多賀城市文化財調査報告書第115集

桜　井　館　跡　ほか

桜 井 館 跡 第 3 次

西 沢 遺 跡 第 25 次

山 王 遺 跡 第 139 次

平 成 26 年 3 月

多 賀 城 市 教 育 委 員 会

序　　文

多賀城市内には特別史跡多賀城跡や多くの埋蔵文化財包蔵地があり、それらは市域の約４分の１にも及んでおります。これら貴重な「文化遺産」を後世に伝えていくことは我々の重要な責務であります。このことから当教育委員会としても開発事業との円滑な調整を図りつつ、国民共有の歴史的財産である埋蔵文化財を適切に保護し、活用することはもとより歴史の解明に資する調査に努めているところです。

本書は、平成25年度に受託事業として実施した３件の発掘調査の成果を収録したものです。これらの調査においては、古墳時代から中世までの遺構や遺物が確認されました。

山王遺跡では、古墳時代前期の沖積地を利用して造られた水田跡や平安時代の畑跡とそれを区画する溝跡、西沢遺跡では、奈良・平安時代の竪穴住居跡、を発見しました。また、桜井館跡については、本市では希少な城館跡の調査となり、中世の土塁や空堀の発見によって中世社会の一端を垣間見ることができました。

市内の広大な遺跡に比べ、これらの調査した範囲はごくわずかですが、これらひとつひとつの成果を積み重ねていくことが、本市の具体的な歴史像の解明につながるものと確信しております。

最後になりましたが、発掘調査に際し、御理解と御協力をいただきました地権者の皆様をはじめ関係各位に対し、心より感謝申し上げます。

平成26年３月

多賀城市教育委員会
教育長　菊　地　昭　吾

例　　言

1　本書は、平成25年度に受託事業として実施した発掘調査３件の成果をまとめたものである。
2　遺構の名称は、各遺跡とも第１次調査からの通し番号である。
3　測量法の改正により、平成14年４月１日から経緯度の基準は、日本測地系に代わり世界測地系に従うこととなったが、本書では過去の調査区との整合性を図るため、従来の国土座標「平面直角座標系Ｘ」を用いている。
4　挿図中の高さは標高値を示している。
5　土色は『新版標準土色帖』（小山・竹原：1996）を参考にした。
6　本書は、調査員全員の協議のもとに、Ⅰを相澤清利、Ⅱを小原一成、Ⅲを石川俊英が執筆し、編集は相澤が行った。遺構・遺物の図版作成は各担当者及び髙橋純平・村上詩乃が、遺物の写真撮影は板垣泰之、村上詩乃、城口貴彰が担当した。
7　桜井館跡第３次調査出土の須恵器について、村田晃一氏（宮城県教育庁文化財保護課）からご教示を頂いた。
8　調査に関する諸記録及び出土遺物はすべて多賀城市教育委員会が保管している。

目　　次

Ⅰ　桜井館跡第３次調査…… 1
Ⅱ　西沢遺跡第25次調査…… 46
Ⅲ　山王遺跡第139次調査 …… 80

調 査 要 項

1　調 査 主 体　　多賀城市教育委員会　　教　育　長　菊地　昭吾
2　調 査 担 当　　多賀城市埋蔵文化財調査センター　所　　長　鈴木　典男
3　調査担当者　　多賀城市埋蔵文化財調査センター
　　研 究 員　石川俊英　　相澤清利　　小原一成
　　調 査 員　髙橋純平　　城口貴彰
4　調査協力者　　小川幸男　志賀久造　エヌエスプランニング　株式会社大雄産業　株式会社澤木工務店
　　大東建託株式会社
5　調査従事者　　阿部純一　渥美静香　阿部孝子　阿部信夫　石井眞六　大泉清吉　大山邦夫
　　小川勝彦　長田拓海　小野寺常雅　片倉忠　鎌田修一　菊地清喜　工藤敦子
　　小松まり　小松美樹　紺野恵美　西條金三　櫻井良博　佐々木一郎　佐々木直正
　　佐々木正範　佐々木裕四郎　佐竹守雄　志賀定夫　須田英敏　千葉志津子
　　千葉美恵子　戸枝瑞枝　中島弘　濱田茂樹　平塚孝志　平塚武慶　福原寛
　　藤田恵子　星芳子　松川謙二　三浦侑士　山田理　矢島恒男
6　整理従事者　　遠藤睦美　佐藤幸恵　千葉郁美　村上和恵

調査一覧

No.	遺跡名	所　在　地	調査期間	調査面積	調査担当者
1	桜井館跡第３次	中央１丁目104-1	5月9日～10月31日	1,628㎡	石川・相澤 髙橋・城口
2	西沢遺跡第25次	浮島字高原150番	10月2日～12月19日	435㎡	小原・城口
3	山王遺跡第139次	山王字山王四区195－２、196－２、197－２地内	12月17日～1月31日	300㎡	石川・相澤

凡　　例

1　本書で使用した遺構の略称は、次のとおりである。

ＳＡ：柱列跡　　ＳＢ：掘立柱建物跡　　ＳＤ：溝跡　　ＳＩ：竪穴住居跡　ＳＥ：井戸跡

ＳＫ：土壙　　Ｐｉｔ：柱穴及び小穴　　ＳＸ：その他の遺構

2　奈良・平安時代の土器の分類記号は下記のとおりである。詳細は『市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ』（多賀城市教育委員会　2003）で報告している。

（１）土師器坏

Ａ類：ロクロ調整を行わないもの

Ｂ類：ロクロ調整を行ったもの

ＢⅠ類：ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの

ＢⅡ類：ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの

ＢⅢ類：ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの

ＢⅣ類：ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの

ＢⅤ類：ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの

ＢⅠ・ＢⅡ類では、ロクロからの切り離しが識別できる資料があり、ヘラ切りによるものをa、静止糸切りによるものをb、回転糸切り（糸切り）によるものをcとして細分する。

（２）土師器甕

Ａ類：ロクロ調整を行わないもの

Ｂ類：ロクロ調整を行ったもの

（３）須恵器坏

Ⅰ類：ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの

Ⅱ類：ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの

Ⅲ類：ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの

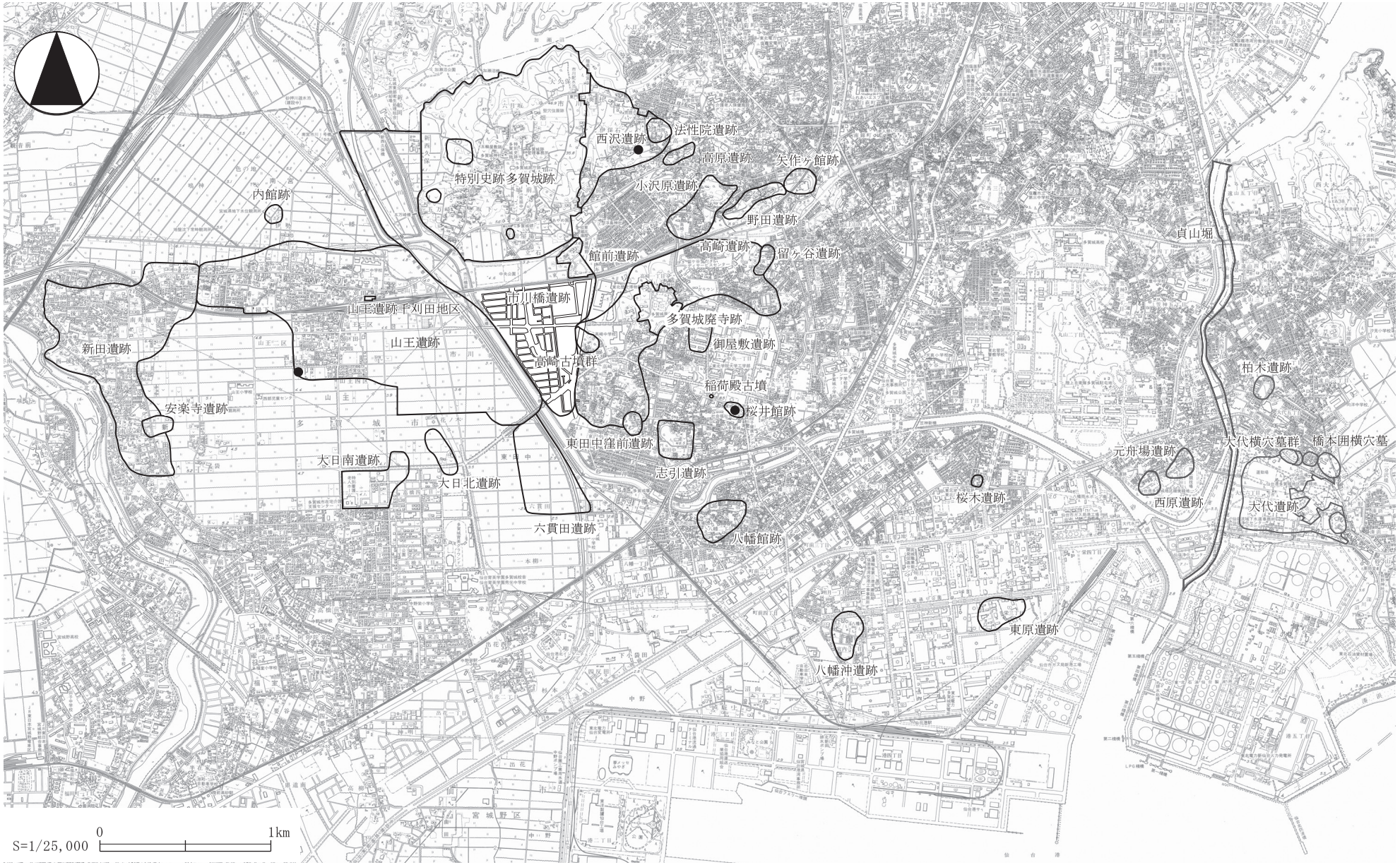
Ⅳ類：ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの

Ⅴ類：ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの

Ⅰ・Ⅱ類では、ロクロからの切り離しが識別できる資料があり、ヘラ切りによるものをａ、静止糸切りによるものをｂ、回転糸切り（糸切り）によるものをｃとして細分する。

3　瓦の分類は「多賀城跡　政庁跡　図録編」（宮城県多賀城跡調査研究所　1980）、「多賀城跡　政庁跡本文編」（宮城県多賀城跡調査研究所　1982）の分類基準に従った。

4　本文中の「灰白色火山灰」の年代については、伐採年代が907年とされた秋田県払田柵跡外郭線Ｃ期存続中に降灰し、承平４年（934年）閏正月15日に焼失した陸奥国分寺七重塔の焼土層に覆われていることから、907 ～ 934年の間とする考えと、『扶桑略記』延喜15年（915年）７月13日条にある「出羽国言上雨灰高二寸諸郷桑枯損之由」の記事に結びつけ915年とする考えがある（町田洋「火山灰とテフラ」『日本第四紀地図』1987、阿子島功・壇原徹「東北地方、10Ｃ頃の降下火山灰について」『中山久夫教授退官記念地質学論文集』1991）。



巻頭図版　多賀城市の遺跡地図と調査区の位置

Ⅰ　桜井館跡第３次調査

１　遺跡の地理的・歴史的環境

本館跡は多賀城市役所の西側に位置し、東西約150m、南北約120mの舌状に張り出した小独立丘陵の突端部（標高約18m）に所在する。多賀城市内の中世城館跡は、現在15ヶ所（多賀城跡の作貫地区など）が知られているが、これらの大部分は破壊が著しく、遺構の不明瞭なものが多い。その中で本館跡は、丘陵南側が宅地造成によって削り取られているものの、北側は山林となっていたため大きな地形改変を受けずに現在に至っている。現況でも土塁と空堀が確認されることから市内でも希少な遺跡と言える。

文献資料によると、安永３年（1774年）の「風土記御用書出」留ケ谷村の項には、

一古館　二

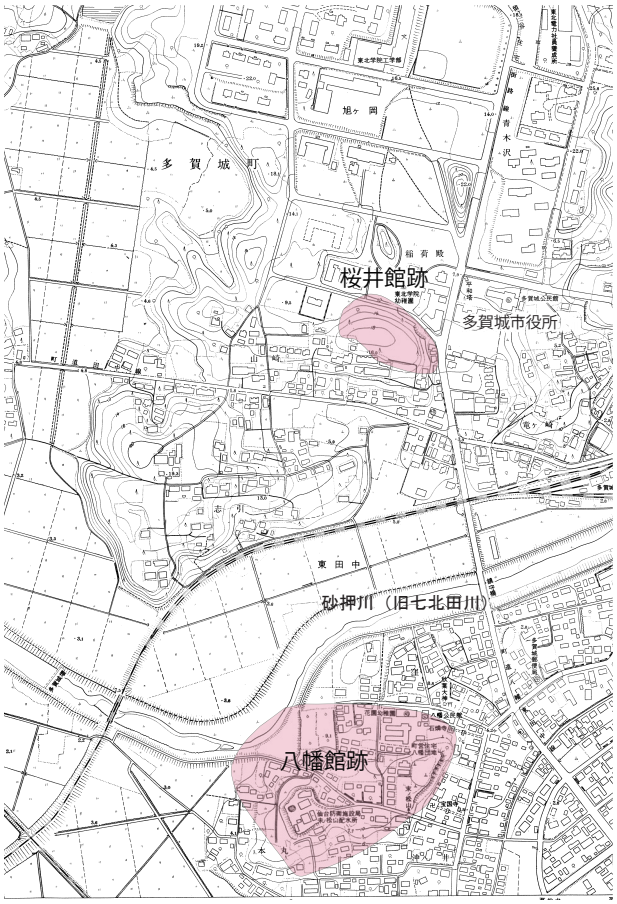
　野田

　一屋はきか館　竪四十間　横廿五間

　当郡田中村御境

　一桜井館　竪三十間　横十五間

　　※約54m×約27m



第１図　桜井館跡位置図（昭和 39 年作成）

桜井館跡周辺の空撮写真（昭和 36 年撮影）

右二館共誰御居館と申儀並年月共相知不申候事

との記載があり、江戸時代中頃には伝承として桜井館跡のことが人々の間に伝わっていたようである。また、当時の留守氏の家臣団編成を伝える「留守分限帳」（天文17年:1548年に作成）には、さくらい（桜井）の名字がみられる。多賀城町誌では、本館跡について留守家家臣黒川某のものと推測している。

次に、中世における周辺遺跡の様相についてみてみる。本遺跡の西側に隣接する高崎遺跡表地区(第17次調査)では、南北約35m、東西40m以上の溝によって区画された武士階級の屋敷跡を発見しており、高崎氏との関連が指摘されている。また、第11次調査では、15世紀頃から機能し16世紀末頃に埋め戻された大溝を発見している。これの廃絶に関しては天正18年（1590）頃、高崎氏の宗家である八幡氏が、国人領主である留守氏が居城としていた利府城から黒川郡大谷城への移転に伴ってこの地を離れたことと関係していると推測される。さらに、井戸尻地区には「館屋敷」とよばれる一画があり、発掘調査は行われていないが地表観察の結果、東西約70m・南北約60mの平場や土塁、空堀が確認できる。また、文献資料にこの頃の様子をみることができる。『留守家文書』の「斯波直持施行状」によると延文元年（1356）には宮城郡高崎村は八幡氏の所領であったことが確認でき、また『平姓八幡氏系譜』には、八幡氏一族の彦三郎盛忠が寛正６年（1465）四月にこの地に居住し、以来「高崎」の姓を名乗ったという記述がある。天正６年（1578）には高崎近江盛長が八幡氏の家督相続に功績をあげていることが記されている。なお盛長の法号は「化度寺殿」であり、現在の化度寺との関連がうかがわれる。

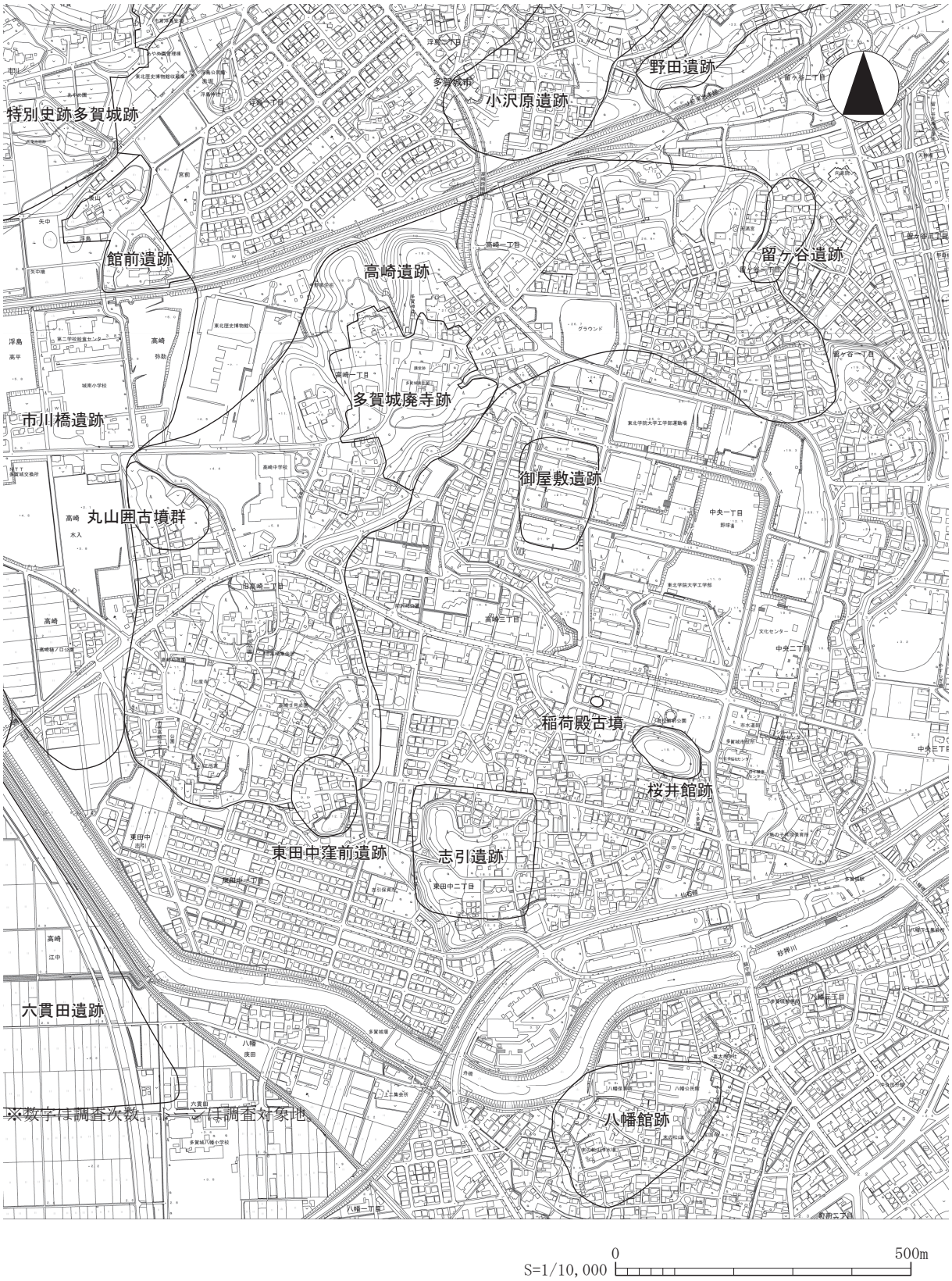
同じ丘陵上に位置する志引遺跡東田中地区には、碑面に三重塔が線刻された大型の板碑が存在する。正和３年(1314年)と嘉歴３年(1328年)の年号が記されている。県内では三重塔は唯一の例とされている。また、この丘陵上には、昭和40年代に幅３m、高さ1.5mほどの土塁が南北に走っていたことが確認されており、館跡の存在が考えられている。

このように中世における本遺跡とその周辺の様相は、城館の痕跡や板碑、文献資料等からある程度知ることができるが、この館跡については、その歴史的背景についての詳細は不明であり、今回の発掘調査によってその一端の解明が期待された。

２　調査に至る経緯と経過

本調査は、宅地造成に伴うものである。平成24年６月15日に開発業者より当該地における宅地造成計画と埋蔵文化財とのかかわりについての協議書が提出された。計画では、対象地全域を最大10mの切土をして宅地を造成するものであった。本館跡では、丘陵西側で南北方向に延びる土塁状の高まりや堀跡・平場と見られる遺構が確認されていることから、埋蔵文化財への影響が懸念された。そのため、工法変更により遺構等の保存が計れないか協議を行ったが、申請どおりの工法で着手することに決定した。なお、開発面積が約4,600㎡と広範囲に及んでおり、調査期間・経費積算を目的として確認調査を実施することとなった。その後、６月28日に地権者より発掘調査の依頼・承諾書の提出を受けて、調査の実施に至ったものである。調査は11月２日～平成25年１月31日に実施した。調査では、調査対象地内の12箇所（１～12区）に調査区を設定しＳＸ１土塁、ＳＸ２堀跡、ＳＸ３・４平場等を発見した。

確認調査の実績を踏まえて遺構の発見されたところを中心に調査区を再設定し、平成25年５月９日より本発掘調査を開始した。ＳＸ３平場の東端から西へと表土剥ぎを進め23日には終了した。平場では地山面がすぐ検出され城館に伴う遺構は発見されなかった。24日から土塁の検出作業に入り縁辺にⅡ層の堆積が



第２図　桜井館跡と周辺の遺跡位置図

把握された（６月４日）。土塁の調査と並行して、５日より空堀の検出作業と丘陵北斜面の表土剥ぎをＳＸ４平場付近から開始する。28日よりⅡ層の除去を行い土塁本体の輪郭が把握できるようになる（７月18日）。８月３日には空堀を完掘する。８月９日、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行う。盆休みをはさんで、８月23・24日に市民を対象とした遺跡見学会を開催する。８月30日、調査区内の地形測量並びに遺構の平面測量を行う。９月３日より南端付近から土塁積土の除去を開始し、Ⅲ層上面で南北方向の小溝群や東西方向のＳＤ６溝跡を発見する。これらの遺構の完掘作業、図面作成が終了したのが９月20日である。ただちにⅢ層の除去を行いⅣ・Ｖ層上面での遺構検出業を行う。Ⅳ層上面では、ＳＸ８焼成遺構、ＳＤ７溝跡、Ｖ層上面ではＳＩ９・10竪穴住居跡を発見した。それらの遺構の精査、図面作成、写真撮影を同時並行で進め、最後にⅣ層の除去を行い調査が終了した（10月29日）。30・31日にかけて器材の撤収と現場内の環境整備を行いすべての業務を完了した。

３　調査成果

（１）層序

今回の調査で確認した層序は以下の通りである。

Ⅰ　層：表土層で、厚さは２～５㎝である。

Ⅱ１層：均質なにぶい黄色土で、厚さは30㎝未満である。ＳＸ１土塁の平場側縁辺付近、ＳＸ２空堀の埋土最上層、丘陵北斜面に分布する。土塁・空堀廃絶後の堆積層である。

Ⅱ２層：赤褐色ローム土粒を含む褐灰色土で、厚さは20㎝未満である。ＳＸ１土塁の平場側縁辺付近、ＳＸ２空堀の埋土、丘陵北斜面に分布する。

Ⅲ　層：やや粘性のある均質な褐灰色土で、厚さは20㎝未満である。ＳＸ１土塁の積土下や丘陵北斜面に分布する。中世の旧表土層。

Ⅳ　層：固く締まりのある均質な褐灰色土で、厚さは10㎝未満である。ＳＸ１土塁の積土下や丘陵北斜面に分布する。古墳時代後期～古代の旧表土層。

Ｖ　層：赤褐色ローム土の基盤層（地山）である。この下に灰白色の凝灰岩質層が続く。

（２）発見した遺構と遺物

中世以降

今回の調査では、館跡に伴うものとして土塁、空堀（堀切）各1条、平場２ケ所を発見した。（第４図）

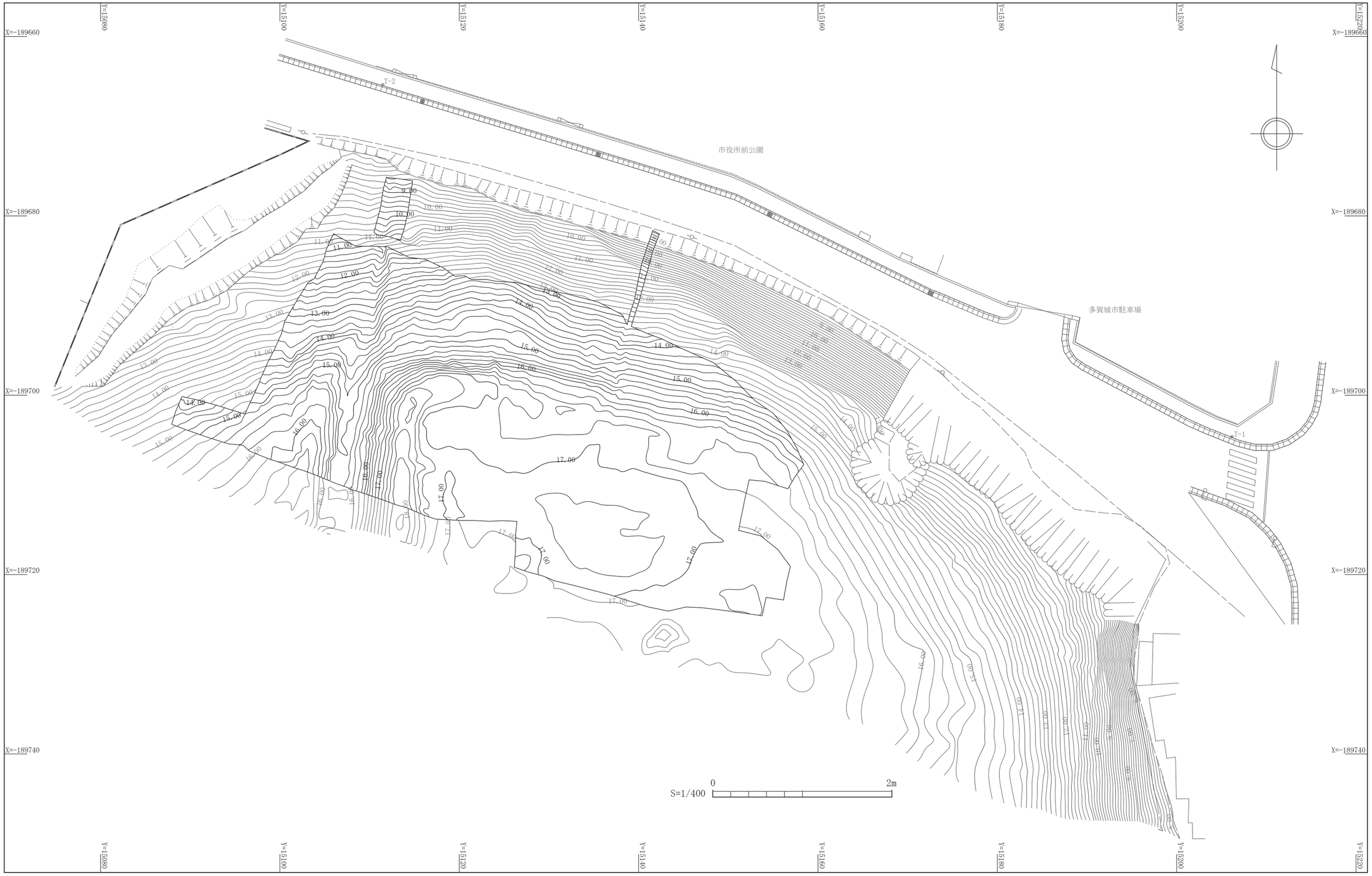
ＳＸ１土塁

【位置】東西に延びる独立丘陵東端部の平場の北西縁辺に造られた鉤型の土塁である。西側にＳＸ２空堀を伴う。

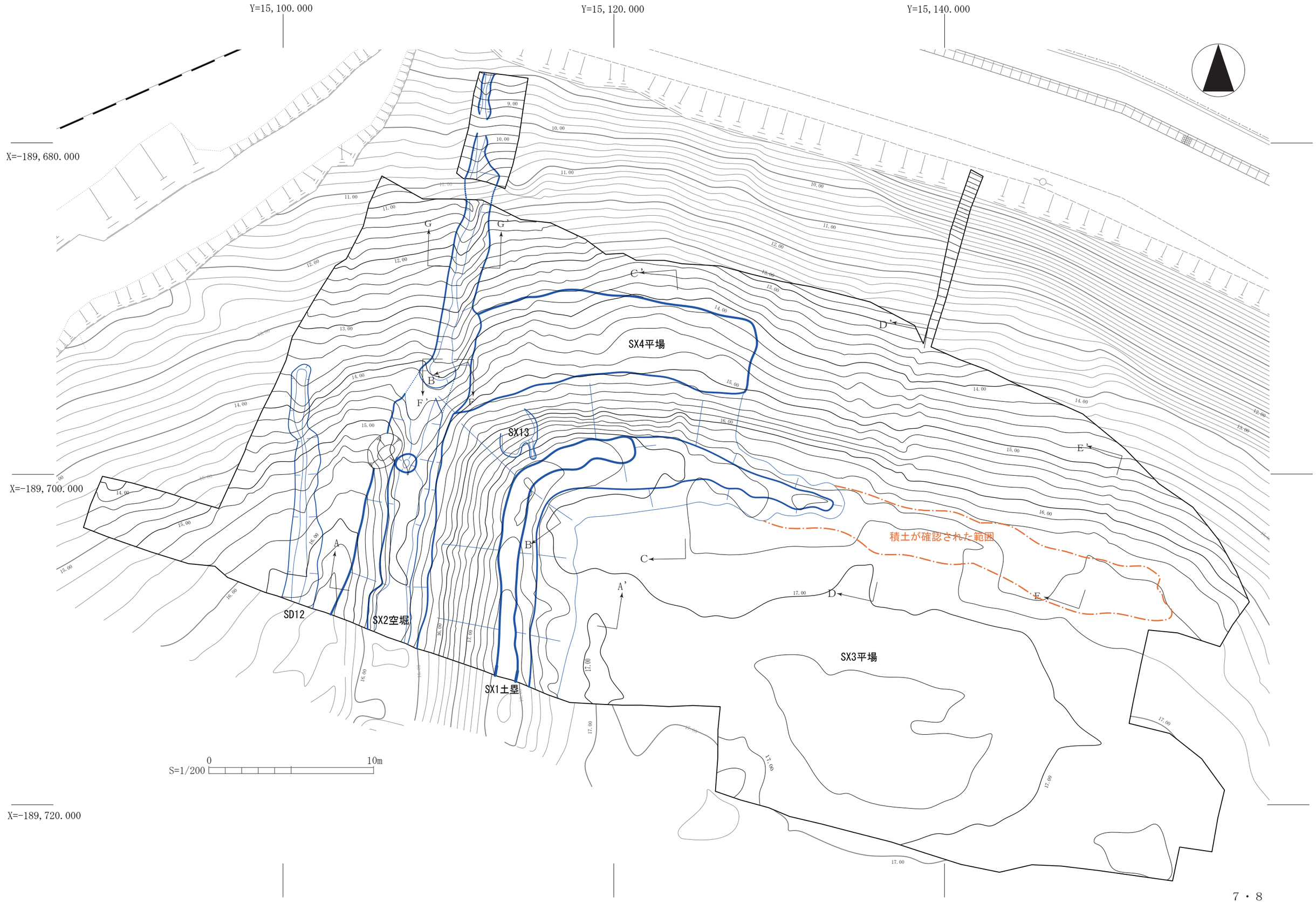
【構築面・重複】Ⅱ1層におおわれⅢ層上に構築している。ＳＸ13土塁と重複しそれよりも古い。

【規模･方向】規模は西辺（南北方向）14m以上（地形測量で確認できた範囲では約19m以上）、北辺（東西方向）は東に行くに従って徐々に高さを減じていくが約20mまで高まりを確認した。基底幅は６～７m、残存高は西辺南端で約0.8m、コーナー付近で約1.15mである。方向は西辺でみると北で約５度東に偏する。

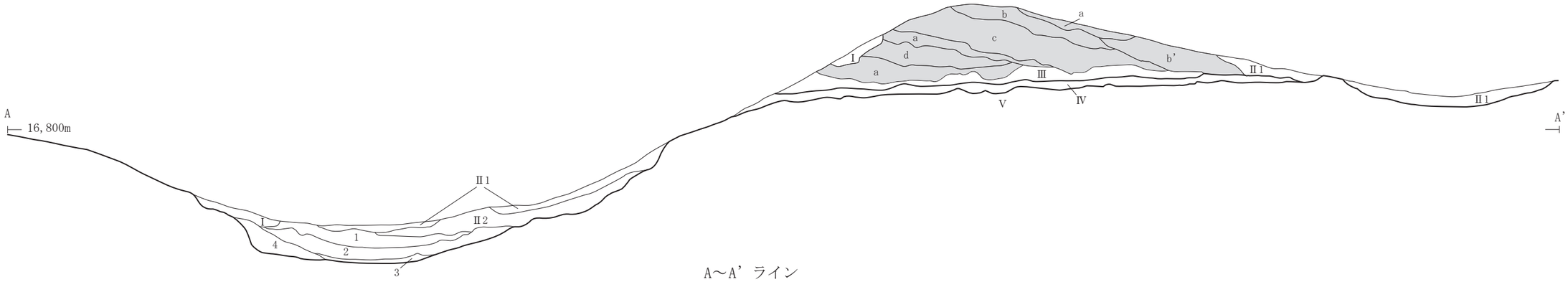
【積土】旧表土上（Ⅲ層）に積み上げており、基本的に以下の５種類の土層の組み合わせによって構成されている。ａ：均質な赤褐色ローム（地山・Ｖ層上部）主体の層、ｂ：Ⅲ層を主体として、Ｖ層を粒・



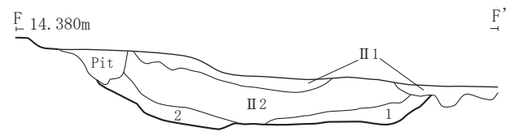
第３図　桜井館跡地形測量図



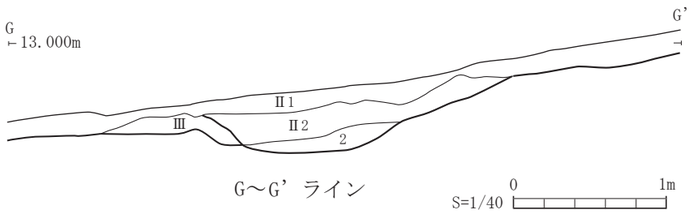
第４図　発見遺構平面図（中世以降）



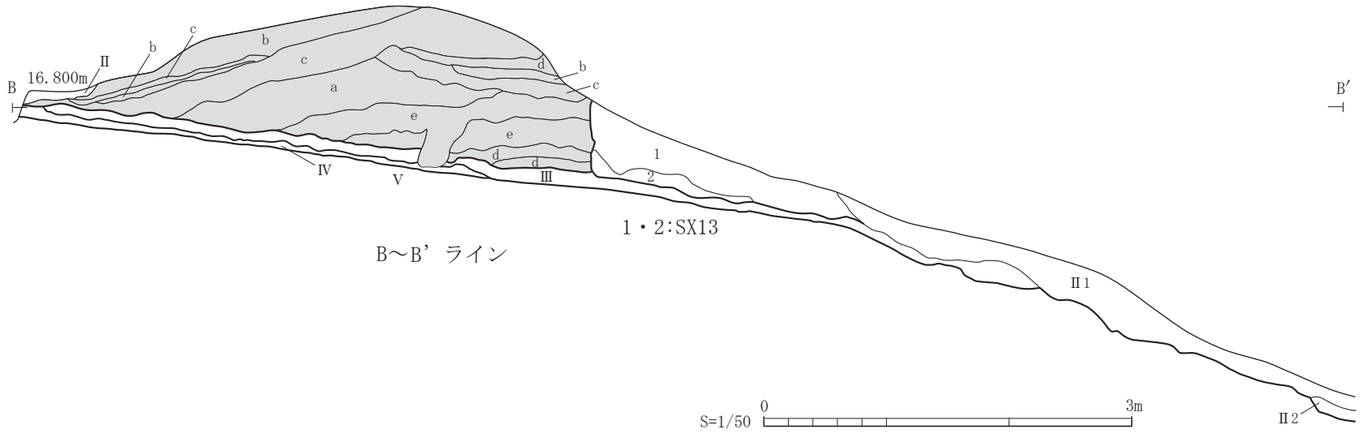
A～A’ライン



F～F’ライン

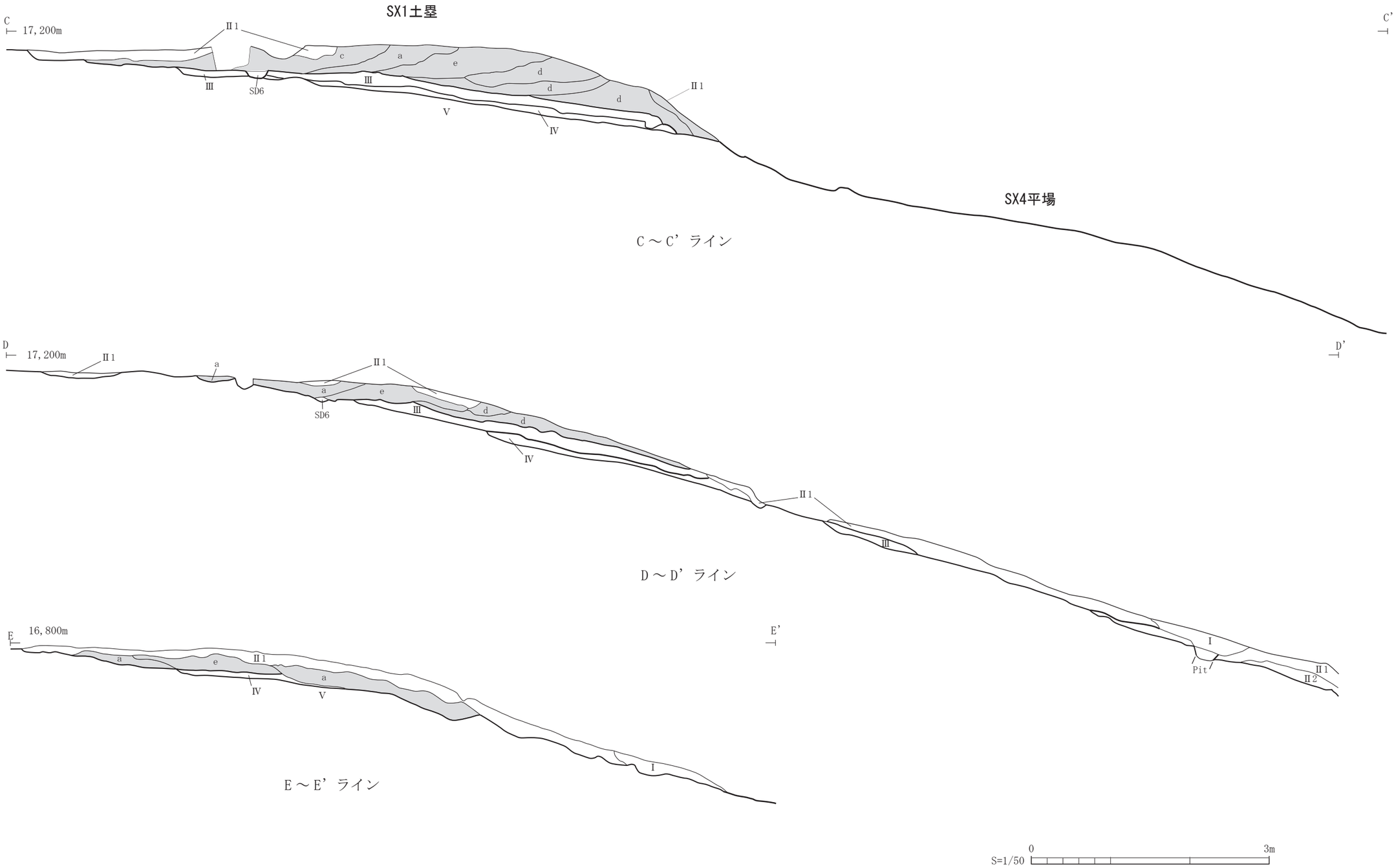


G～G’ライン



B～B’ライン

第５図　ＳＸ１土塁・ＳＸ２空堀断面図



第６図　ＳＸ１土墨(南北)断面図

ブロック状に含む層、ｃ：Ｖ層のロームと白色凝灰岩質土（地山・Ｖ層下部）ブロックがランダムに混じり合う層、ｄ：Ⅲ層とほぼ近似する均質な層、ｅ：Ⅲ層とＶ層がランダムに混じり合うが一部互層になるところもある層。積土は場所によって積み上げの順序が異なるが、下位層は平行に、上位層は斜めに積み上げている。西辺（南北方向）の土塁は、西側のＳＸ２空堀を掘削した土砂を積み上げて構築したものとみられる。なお、北辺（東西方向）の土塁の東方約20m付近まで積土と同様の土が約３ｍの幅を持って確認された。

【遺物】積土より土師器坏（Ａ・ＢＶ類）・鉢（Ａ類）、須恵器坏（Ｉ類）・瓶・長頸瓶・短頸壷、甕、須恵系土器坏、古代の瓦、土製羽口？の破片が出土している。

ＳＸ２空堀（堀切）

【位置】ＳＸ１土塁の西側に位置し、東西に延びる丘陵尾根を断ち切るように造られた空堀である。

【検出面・重複】Ⅱ1・2層におおわれⅢ層上面もしくはⅤ層上面で検出した。重複関係はない。

【規模・方向】南北方向に延びており長さは35m以上を計り、土塁コーナー付近でやや東側へとずれる。規模は上幅5.５～6.5m、下幅約1.３～２ｍ、深さ1.3mである。土塁頂部と堀底面の高低差は約2.9mを計る。堀は地形の傾斜に沿って掘られており、南端と北端の底面の比高は約6.6mである。方向は北で約10度東に偏する。

【埋土】南端付近で埋土は４層に分けられ、１層がＶ層に由来する均質なローム土主体、２層が白色粒を層状に含む橙色砂質土、３層がにぶい黄橙色粘質土、４層がほぼ１層と同じ土である。粘質土と砂質土が交互に堆積する自然堆積である。これら埋土の上層には、東半を中心にⅡ層が堆積する。

【壁・底面】底面はほぼ平坦で、壁は内湾気味に立ち上がり、中位付近に段が認められる。

【遺物】土師器坏（ＢＶ類）、鉢・甕（Ａ類）、須恵器坏（Ⅳ類）・瓶、須恵系土器坏、古代の瓦の破片が出土している。

ＳＸ３平場

西側を土塁・空堀で区切られた東西約50m、南北20m以上の広さをもつ。南側の調査区外の部分を含めると南北約50mの正方形に近い平場であると考えられる。表土除去後すぐに地山面が検出された。土塁積土下及び北斜面において存在したⅡ・Ⅲ・Ⅳ層は確認できないことから、この平場ついては数10ｃｍほど削平して造った平坦面であることが分かった。館跡に伴う遺構・遺物は発見されなかった。

ＳＸ４平場

土塁コーナー付近の北斜面に造られた郭輪で、地山を削り出して造成している。東西約16m、南北約５ｍの小規模なものである。表土除去後すぐに地山面が検出されたが、館跡に伴う遺構・遺物は発見されなかった。

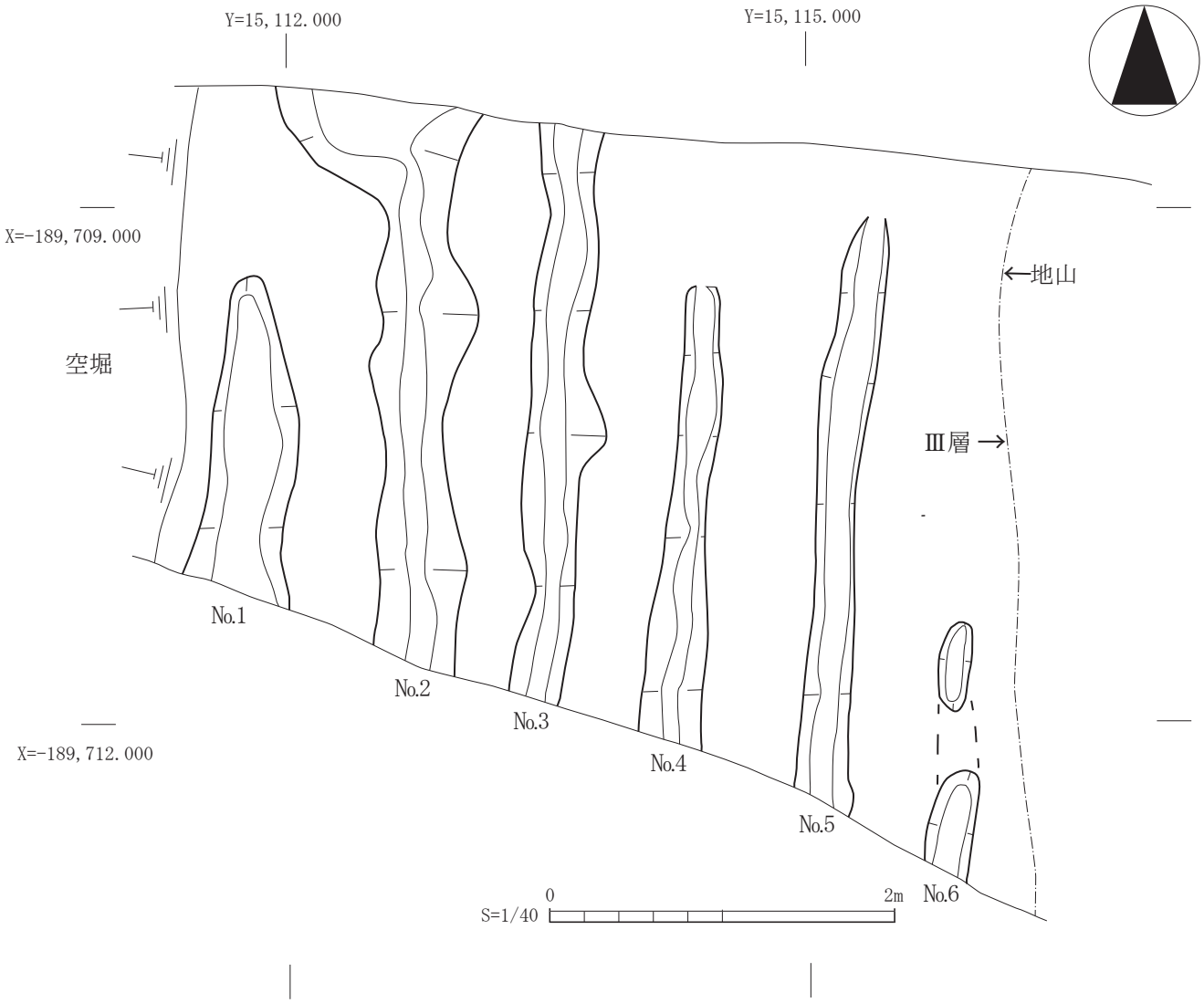
ＳＤ５小溝群

【位置】調査区南端の中央よりやや西寄りの丘陵平坦面に位置する。

【検出面・重複】土塁積土除去後のⅢ層上面（中世の旧表土面）で検出した。重複関係はない。

【規模・方向】６条検出し、確認できた長さは３ｍ以上、幅10～110㎝、深さ5～10㎝である。平面形はNo，４～６のように直線的な輪郭のものと、No，１～３のように出入りがあるものとがある。方向はほぼ座標北に沿う。

【埋土】土塁構築時の積土によって埋められている。



第７図　ＳＤ５小溝群平面図

【壁・底面】底面は不整な凹凸がある。

【遺物】須恵系土器坏の破片が出土している。

ＳＤ６溝跡

【位置】調査区中央付近の丘陵平坦面に位置する東西溝跡である。

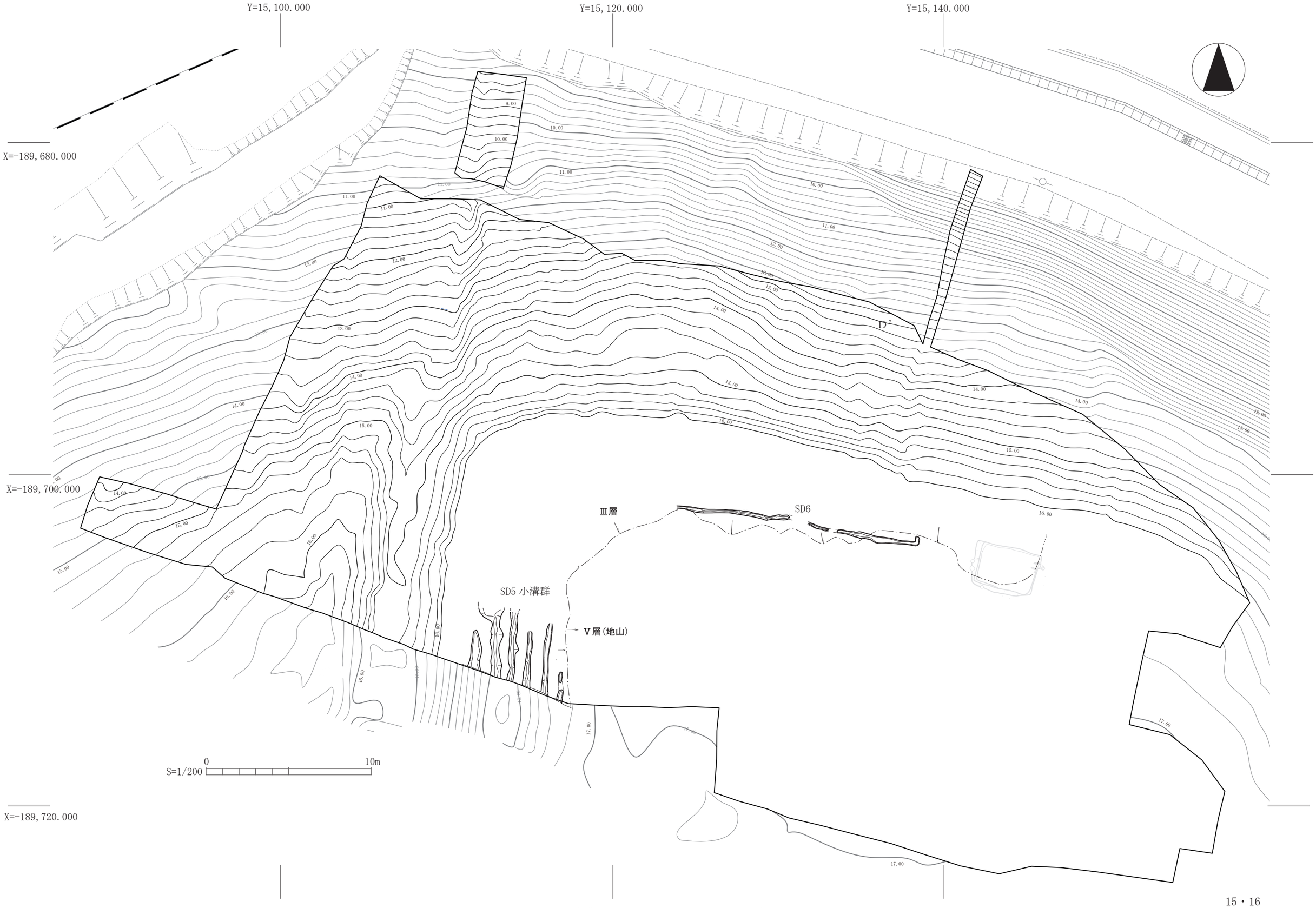
【検出面・重複】土塁積土除去後のⅢ層上面（中世の旧表土面）で検出した。重複関係はない。

【規模･方向】確認できた長さは14.7m以上、幅15 ～ 40cm、深さ10cm前後である。東端では鉤型に曲がる。方向は東で約８度南に偏する。

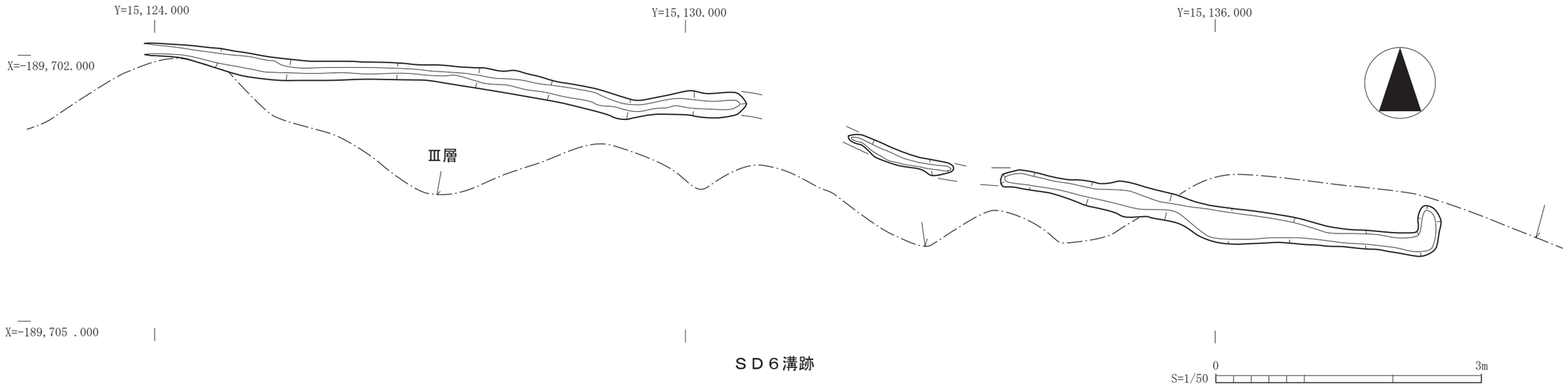
【埋土】土塁構築時の積土によって埋められている。

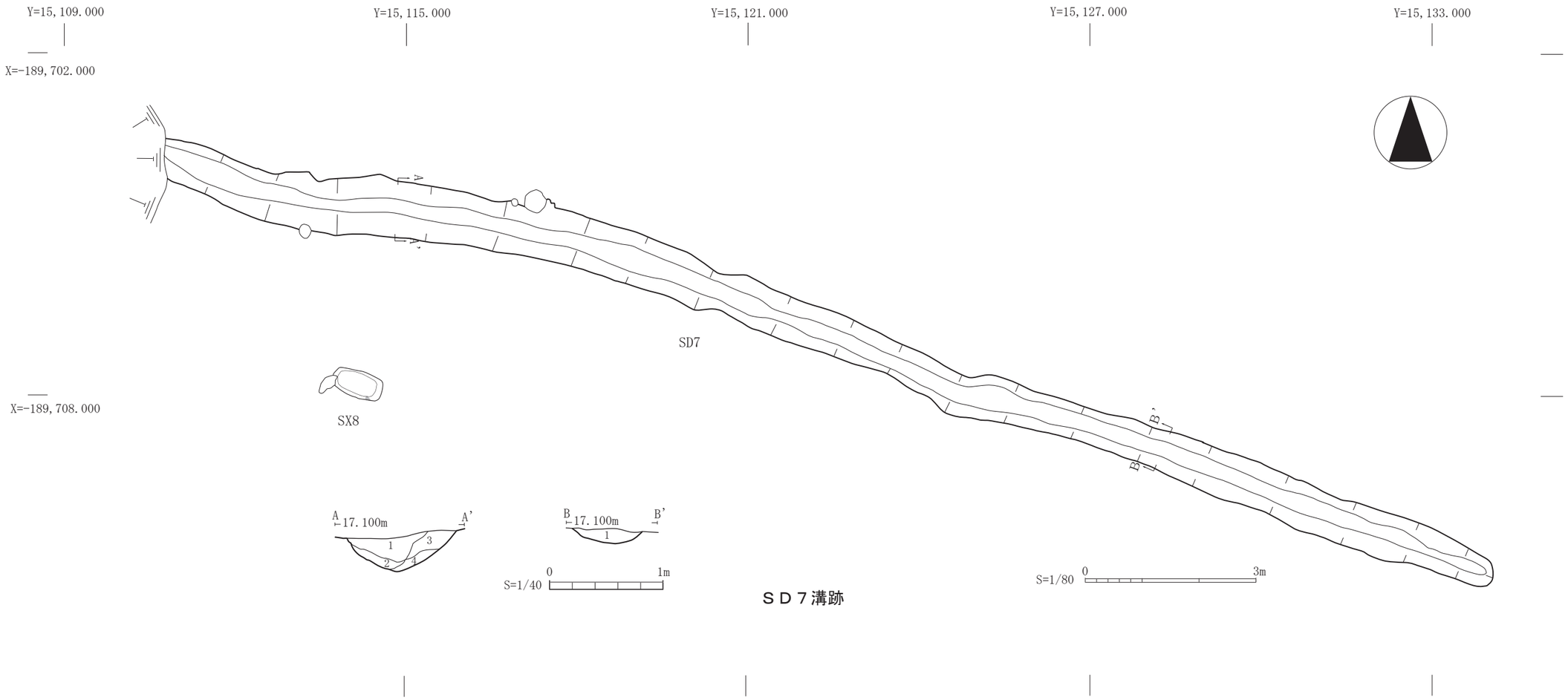
【壁・底面】底面は丸みを持ち、壁は内湾しながら立ち上がる。

【遺物】出土していない。



第８図　発見遺構平面図（中世:Ⅲ層上面検出遺構）





第９図　ＳＤ６・７溝跡平面・断面図

ＳＤ12溝跡

【位置】調査区西端付近の丘陵北斜面に位置する南北溝跡である。

【検出面・重複】Ⅱ1層におおわれⅤ層上面で検出した。重複関係はない。

【規模・方向】確認できた長さは14.5m以上、上幅1～2m、下幅0.2～0.8m、深さ５～20cmである。方向は北で約1度東に偏する。

【埋土】埋土はⅡ1層である。

【壁・底面】底面は平坦なところと丸みを持つところがあり、壁は緩やかに立ち上がる。

【遺物】出土していない。

ＳＸ13

【位置】ＳＸ１土塁コーナー付近の北斜面に位置する。

【検出面・重複】Ⅱ1層におおわれⅢ層上面で検出した。ＳＸ１土塁と重複しそれよりも新しい。

【平面形・規模・方向】不整方形を呈しているが、北側の立ち上がりは確認されなかった。南東隅付近には小溝がとりつく。長軸３m以上、短軸2.3m、深さは最大で0.6mである。

【埋土】２層に分けられ、１層が均質でしまりのない灰黄褐色土、２層が赤褐色ロームを含むにぶい黄褐色土である。

【壁・底面】底面はほぼ平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。

【遺物】出土していない。

古墳時代後期～古代

Ⅳ層上面で溝跡１条、焼成遺構１基、Ⅴ層上面で竪穴住居跡２軒を発見した。

ＳＤ７溝跡

【位置】調査区中央付近の丘陵頂部平坦面に位置する東西溝跡である。

【検出面・重複】Ⅳ層上面で確認された。重複関係はない。

【規模･方向】西半部はやや蛇行する。確認できた長さは24.4m以上、幅0.6～１m、深さ10～30cmである。方向は東で約17度南に偏している。

【埋土】東半部では均質なにぶい黄色土の単層であるが、西半部では４層に分けられ１～２層が東半部の土層に近似し、３～４層はⅤ層が汚れたローム土主体である。

【壁・底面】東半部では皿状を呈するが、西半部では船底形ある。

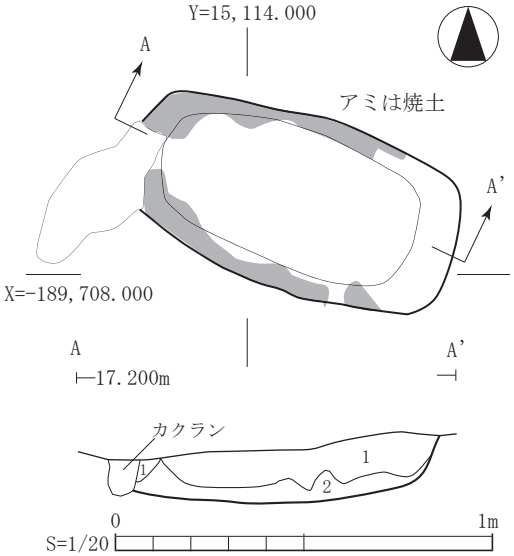
【遺物】土師器坏（Ｂ類）・高台付坏・甕（Ａ類）の破片が出土している。

ＳＸ８焼成遺構

【位置】調査区南半のやや西より丘陵頂部平坦面に位置する。

【検出面･重複】Ⅳ層上面で確認された。重複関係はない。

【平面形・規模・方向】隅丸長方形を呈する。長軸90cm、



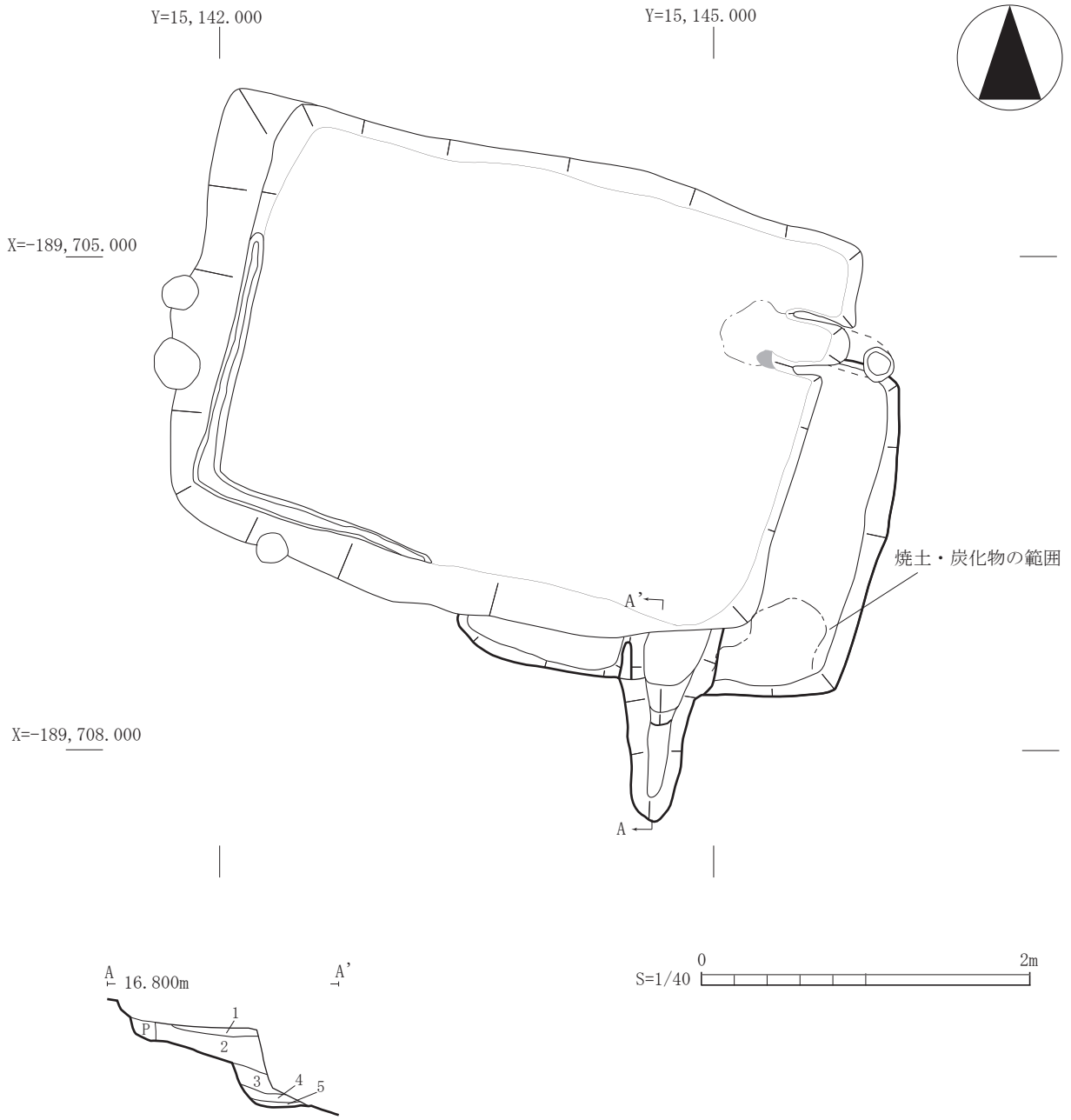
第10図　ＳＸ８平面・断面図

短軸35 ～ 46cm、深さ10 ～ 15cmである。方向は東で約19度南に偏している。

【埋土】３層に分けられ、１層が炭化物・焼土粒を若干含む固く締まりのあるにぶい黄橙色土、２層が炭化物層、３層が焼土層である。３層は東側の一部を除いた壁面に張り付くような状況で確認された。

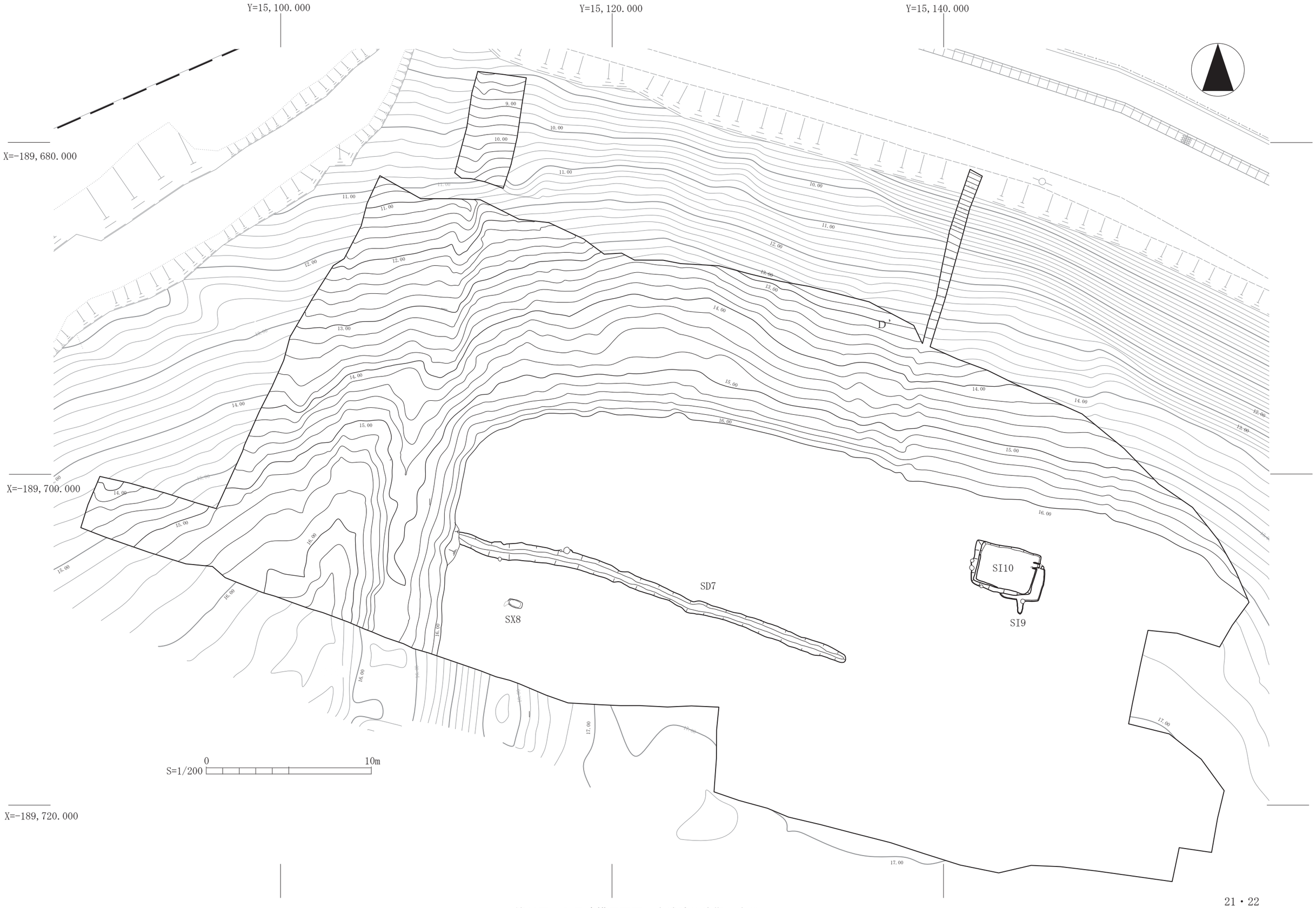
【壁・底面】底面はほぼ平坦で、壁は内湾気味に立ち上がる。

【遺物】須恵器瓶の破片が出土している。



カマド内断面図

第11図　ＳＩ９竪穴住居跡平面・断面図



第12図　発見遺構平面図（古墳時代後期～古代）

ＳＩ９竪穴住居跡

【位置】丘陵頂部平坦面の北斜面際に位置する。

【検出面】Ⅲ層におおわれⅤ層上面で確認された。

【重複】ＳＩ10竪穴住居跡と重複しており、それよりも古い。

【平面形・規模・方向】東西2.65m、南北2.2mのほぼ正方形で、方向は東辺でみると北で約９度東に偏している。

【埋土】２層に分けられ、１層が褐色土、２層が地山ブロックを含む褐色土である。

【壁の状況】下半は垂直に立ち上がるが、上半は内湾気味に開きながら立ち上がる。残存壁高は45～50cmを計る。

【床面の状況】地山を床面とする。

【カマド】南辺の中央付近に付設され、燃焼部と煙道部が検出された。燃焼部側壁は壊されており西側にわずかな立ち上がりが確認された。煙道部は長さ約80cm、幅30cmを計る。燃焼部底面と煙道部との間には約30cmの段差がある。カマド内堆積土は、５層に分けられ、１・２層が黄褐色土、３～５層が炭化物粒、焼土ブロックを含む褐色土である。燃焼部底面は被熱し赤色化していた。

【柱穴】確認されなかった。

【周溝】確認されなかった。

【遺物】床面より非ロクロ調整の甕が出土している。図示できないが頚部に段を有するものである。

ＳＩ10竪穴住居跡

【位置】丘陵頂部平坦面の北斜面際に位置する。

【検出面】Ⅲ層におおわれⅤ層上面で確認された。

【重複】ＳＩ９竪穴住居跡と重複しており、それよりも新しい。

【平面形・規模・方向】東西４m、南北2.7～2.8mの長方形で、方向は西辺でみると北で約14度東に偏している。

【埋土】２層に分けられ、１層が固く締まりのある褐色土、２層がしまりのない黄褐色土である。いずれも自然堆積層である。

【壁の状況】内湾気味に開きながら立ち上がる。残存壁高は50～60cmを計る。

【床面の状況】地山粒を含む黄褐色粘土の掘方埋土（４層）を床面とする。

【カマド】東辺の北寄りに付設され、燃焼部と煙道部が検出された。燃焼部側壁は地山を削り出して作られており、南側の先端には石が据えられていた。煙道部は長さ約50cmで、その先端には径18cmの煙り出しピットがある。燃焼部底面と煙道部との間には約14cmの段差がある。燃焼部内及びその前面には焼土・炭化物粒の分布がみられた。

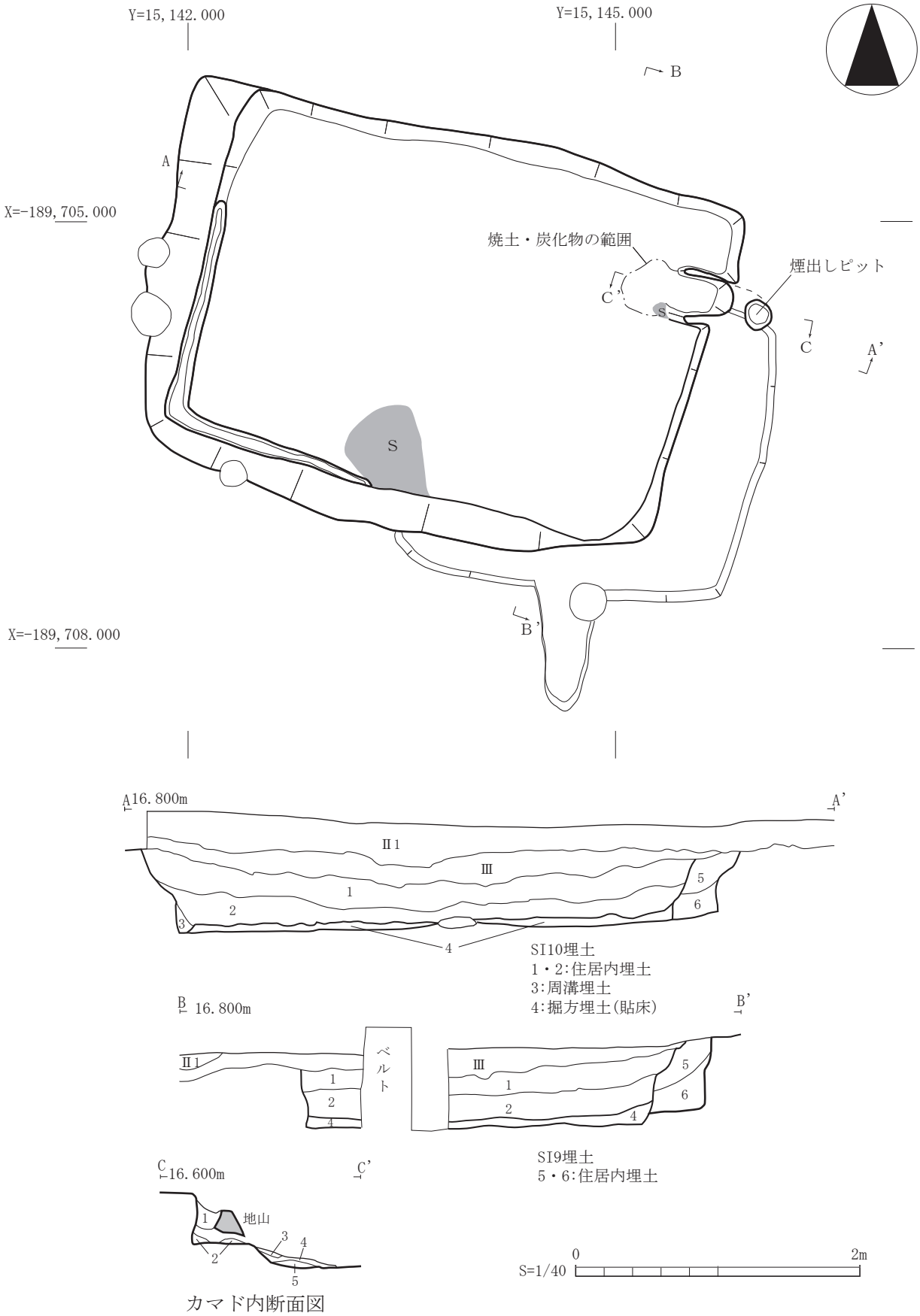
【柱穴】確認されなかった。

【周溝】部分的に南西コーナー付近で確認された。幅10cm前後、深さ約5cmで、埋土は褐色粘土（３層）である。

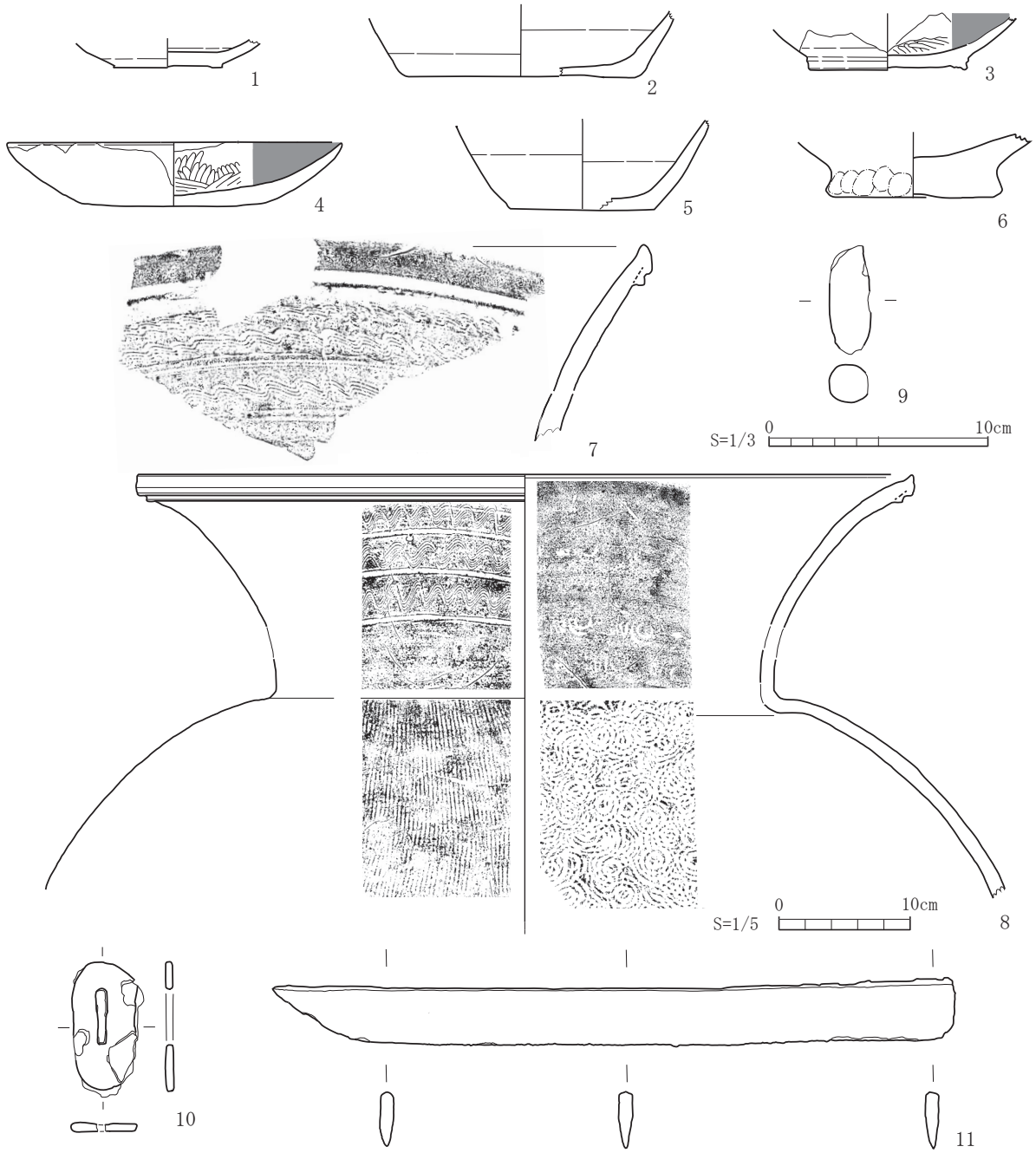
【遺物】１層より須恵器甕の体部破片が出土している。

その他堆積層出土の遺物

Ⅰ層からは、刀（第14図11）、寛永通宝14点（写真図版13-5）、Ⅱ層からは、土師器坏（Ａ・Ｂ類）・甕（Ａ・



第13図　ＳＩ10竪穴住居跡平面・断面図



（単位：cm）

番号	種類	遺構 層位	特　徴 外面	特　徴 内面	口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備　考
1	須恵系土器 坏	SX1土塁 積土	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	－	(4.9) 24/24	－	12-1	R4	
2	須恵器・坏	SX2空堀 埋土	ロクロナデ 底部：静止糸切り	ロクロナデ	－	(10.4) 7/24	－	12-2	R3	
3	土師器 高台付坏	SD7 埋土	ロクロナデ 底部：切り離し不明	ヘラミガキ、黒色処理	－	7.2 17/24	－	12-3	R6	
4	土師器・坏	SD7 埋土	磨滅のため不明	ヘラミガキ、黒色処理	(15.2) 1/24	(8.3) 24/24	2.9	12-4	R7	非ロクロ調整
5	土師器・甕	Ⅱ層	ロクロナデ	ロクロナデ	－	(6.6) 8/24	－	12-5	R5	
6	土師器・甕	Ⅲ層	指頭圧痕	ナデ、黒色化	－	7.3 24/24	－	12-6	R2	非ロクロ調整
7	須恵器・甕	Ⅲ層	ロクロナデ、口縁:突帯部１条沈線、頚部:櫛描波状文×2、3条沈線×2	ロクロナデ	－	－	－	13-2	R9	
8	須恵器・甕	Ⅱ・Ⅲ層 SI10埋土	ロクロナデ、口縁:突帯部１条沈線、頚部:櫛描波状文×3、2条沈線×3　体部:平行タタキ	同心円状当て具痕、ロクロナデ	59.0 24/24	－	－	13-1	R8	
9	土製品	Ⅱ2層	長さ：4.8以上、径：1.75					12-7	R1	
10	鍔	Ⅱ層	長さ：5.8、幅：2.7、厚さ：0.35					13-3	R2	
11	鉄刀	Ⅰ層	長さ：31.2、幅：2.6、厚さ：0.6					13-4	R1	

第 14 図　出土遺物実測図

Ｂ類)、須恵器甕（第14図８）の破片、土製品（第14図９)、鍔（第14図10)、Ⅲ層からは、土師器坏（Ａ類)・甕（Ａ・Ｂ類)、須恵器甕（第14図８)、須恵系土器坏、古代の丸瓦の破片が出土している。

４　まとめ

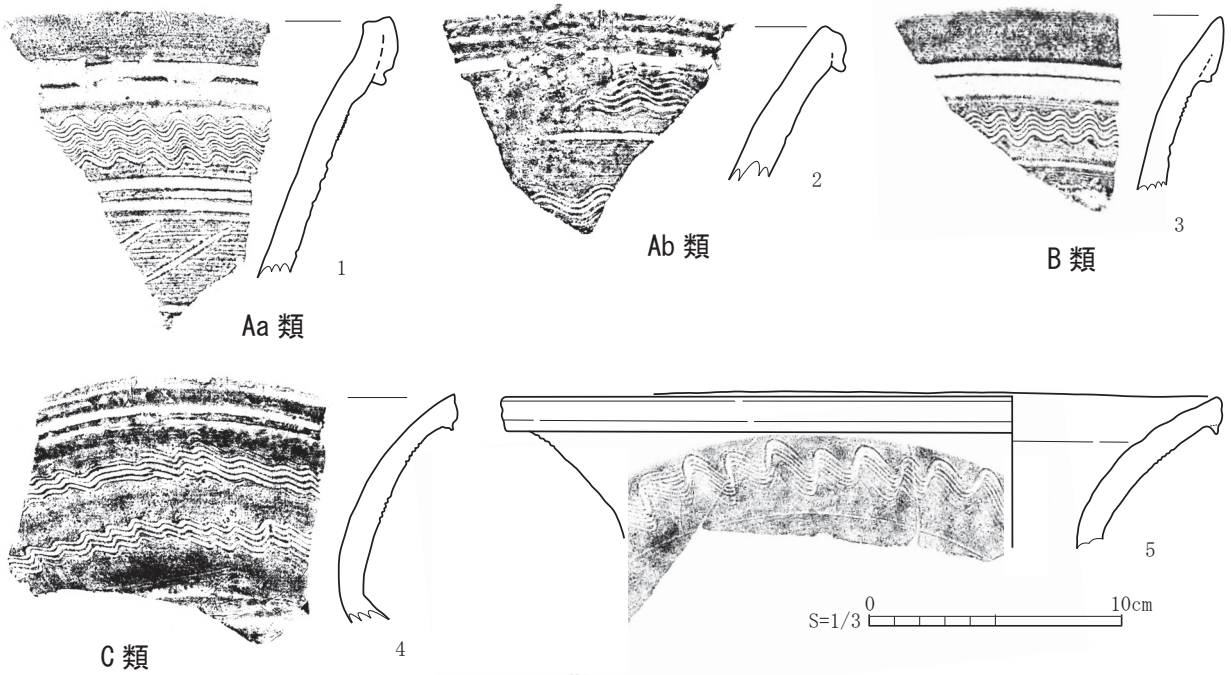
本館跡は出土遺物から直接遺構の年代を推定することは難しいが、土塁、空堀等の築城方法や文献資料及び放射性炭素年代測定結果から判断すると中世の城館と考えられる。館跡の立地する小丘陵は、南に延びる舌状台地の東端にあり、立地的には東西南北を見渡せるところに位置している。空堀（堀切）は尾根を切断するように造られており、これで区切られる平場(ＳＸ３)は東西・南北約50mの独立した空間を造りだしている。土塁はこの西辺と北辺を囲むように造られていたが、東西方向の土塁は途中から徐々に高さが減じて平場と同じレベルの平坦面となっていた。この部分には土塁基底幅と同じ幅で積土が連続して約20mにわたって確認されている。この部分については、元々土塁があったが何らかの要因（人為的あるいは自然の営力）で崩壊し基底部のみが残存したものと考えられる。したがって、土塁の構築当初は、東西約40mの規模を持っていたものと推察される。また、この施設で区画される平場(ＳＸ３)では、建物跡など居住に関連する遺構が全く発見されず、日常的に人々が暮らす場ではなかったと考えられる。このような施設は、防御的な役割を果たすとされており、周辺を監視する場や有事に備えた場などに使われていたと推察される。

中世（おもに鎌倉・室町時代）における多賀城市域は、おおむね旧七北田川（新田地区の南側を東流し砂押川と合流していた）を境として、北側に留守氏、南側に八幡氏の所領があったとされている。本館跡は旧七北田川をはさんで八幡氏の居館である「八幡館」に近接する位置関係にある。室町幕府成立時には、八幡氏と留守氏の間でも抗争があり、その後、八幡氏は留守氏に服属し家臣となっている。このような地理的・歴史的環境のなかで本館跡の位置づけがなされるものと思われるが、その具体的な背景については、詳細な時期の特定ができなかったこともあり、今後の課題としたい。

土塁積土除去後のⅢ層上面では、ＳＤ５小溝群、ＳＤ６溝跡を発見した。小溝群は畑の畝溝として理解されているものであることから、この地は耕作域から館跡へと土地利用が変わったことになる。ＳＤ６溝跡については、Ⅲ層の残存範囲や土塁の裾部とほぼ一致することから、土塁構築に関わるものと推察される。また、ＳＸ13、ＳＤ12溝跡は、城館の時期に伴う可能性もあるが、確証が得られないので、ここでは中世以降としておく。

古墳時代後期～古代の遺構については、古墳時代後期の竪穴住居跡２軒、焼成遺構１基、古代の溝跡１条を発見した。

ＳＩ10竪穴住居跡からは非ロクロ調整の土師器と須恵器甕の破片が出土している。このうち須恵器甕は第14図８の櫛描波状文を持つ甕と同一個体である。したがって、この甕の年代を検討することにより住居跡のおおよその年代も知ることができる。この甕は口縁径が約60cmで口縁から肩部までの高さが17cmと大型なものである。口縁部は粘土を貼り付けて肥厚部をつくり、上端はつまみ出し、下端は沈線をまわして突帯縁にしている。頚部の文様は、２条１対の平行沈線によって３段に区画されその間に櫛描波状文が配される。体部外面には平行タタキ痕、内面には同心円状の当て具痕が認められる。第14図７はⅢ層からの出土であるが、特徴が類似するので合わせて取り上げる。口縁部は８と同様に肥厚部をつくり、下端は沈線をまわして突帯縁にしているが、上端はやや丸みを持ち、断面は扁平な半円形を呈する。頚部の文様は、



第 15 図　高崎古墳群 SR32 窯跡と高崎遺跡 SR1678 窯跡出土遺物

３条１対の平行沈線によって２段に区画されその間に櫛描波状文が配される。櫛描波状文は上段が２段、下段が１段である。両者とも外面に自然釉がみられ、灰黒色を呈し焼成は良好である。胎土も石英・白色粒を含み緻密である。

さて、このような特徴を持つ甕は、おおむね７世紀代の年代が求められる。近年、多賀城市内でもこの時期の遺構・遺物が多数検出されており、年代や系統など詳細な検討が行われている。高崎古墳群第11次調査では、須恵器を焼成した地下式穴窯（ＳＲ32）が1基検出されている。出土遺物には蓋、甕、瓶があり蓋と甕が大半を占めている。これらの年代は市川橋遺跡伏石地区のＳＤ6517区画溝、八幡地区ＳＫ6777大土壙出土須恵器（宮城県教委2009）との類似性から6世紀末～７世紀第1四半期に位置付けている（多賀城市教委2011ａ）。また、近隣の高崎遺跡第56次調査でも窯跡１基（ＳＲ1678）が発見されており、坏・坏蓋・盤・瓶・甕と加工焼台が出土している。坏類の特徴や窯跡の類似性から、福島県善光寺遺跡等の資料に対比して７世紀前半の古い段階に位置付けている（多賀城市教委2007）。いずれの遺跡からも甕が出土していることから、これらと比較して年代の検討を行ってみたい。まず、高崎古墳群第11次調査出土の甕は、口縁部の形態からＡ・Ｂ・Ｃの３類に、さらにＡ類は突帯縁の幅でＡａとＡｂの２類に分けられている。Ａ・Ｂ類（第15図１～３）は、口縁部を肥厚させて突帯縁を作り出している（註）。Ａ類は口縁上端部に軽く窪む平坦面が巡っており、その内面側にはつまみ出しによる突帯を持つ。下端は沈線をまわして突帯縁にしている（上下端２条突帯口縁）。Ｂ類は口縁上端部に平坦面や突帯はなくやや先尖り状の形状である。下端はＡ類同様沈線をまわして突帯縁にしている（下端１条突帯口縁Ａ）。Ｃ類（第15図４）は、口縁下端部を外側につまみ出して突帯縁を作り出している（下端１条突帯口縁Ｂ）。高崎遺跡第56次調査の第15図５は、Ｃ類に類似しているが、相違する点もあり、高崎古墳群よりもやや年代が下るものとされている

註：報告書中においては、「口縁端部に近づくと外側に折り返して厚い突帯縁をつくっている」としているが、再観察の結果、粘土紐を貼り付けて口縁を肥厚させていることが判明した。

（多賀城市教委2011ａ）。

ここで本例と高崎古墳群、高崎遺跡の甕と比較してみると、口縁上端部の形状や突帯縁の幅に少なからず相違が認められるが、本例７がＢ類の系列、８がＡ類の系列上にあるものと考えられる。Ａ類の文様区画沈線は、太い工具で２条平行沈線間が幅広で深く描かれるのに対して、本例は沈線間が狭く浅い。櫛描波状文の波数は、Aa類が11条、Ab類が７～９条、Ｂ類が５条、Ｃ類が７条、本例７が４条、８が６条である。Ａ類のみが他に比べ多条であることがわかる。頚部外面の器面調整では、Ａ・Ｂ類に文様施文前に横位のカキメが施されるが、本例には見られない。体部内面の当て具痕では、高崎古墳群例は同心円状になるところも一部あるが、半円状もしくは弓状になるものが多い。一方、本例は同心円状のものが丁寧に押されている。胎土については、本例は石英・白色粒を含み緻密であるが、高崎古墳群、高崎遺跡例は白色粒が多く、砂粒もやや多く含む違いがある。また、全体的に本例よりも高崎古墳群、高崎遺跡例のほうが厚手に作られている。

以上の比較検討から、本遺跡の甕は、近隣の２窯跡とは異なる属性要素も認められることから、他の窯跡から供給された可能性が極めて高い。すると同時期の窯の違いによるものなのか、あるいは新旧の型式（形態）差によるものなのかが問題となろう。櫛描波状文の波数、カキメの有無や突帯縁の幅からすると高崎古墳群に比べ本例が後出の様相を持っているとみることもできるが、比較した個体数が少ないこともあり、さらなる良好な資料の追加を待って検討することとしたい。

したがって、ＳＩ９・10竪穴住居跡の年代については、７世紀前半頃とやや幅を持ってみておきたい。なお、放射性炭素年代測定（附章参照）では、ＳＩ10竪穴住居跡埋土試料が７世紀中葉の時期とされており、出土資料の年代観よりもやや新しい。

ＳＸ８焼成遺構の年代は、出土遺物が須恵器の小破片であるため特定できないが、埋土試料の放射性炭素年代測定では、７世紀前半の時期とされている。ＳＩ９・10竪穴住居跡の出土資料からみた年代観とほぼ一致する。

ＳＤ７溝跡は、ロクロ調整の土師器が出土していることから、８世紀後葉以降の古代の範疇に収まる時期とみておきたい。

引用・参考文献

1　多賀城市教育委員会『高崎遺跡－第17次調査報告書－』　多賀城市文化財調査報告書第61集　2001
2　多賀城市教育委員会『高崎遺跡－第56次調査報告書－』　多賀城市文化財調査報告書第89集　2007
3　多賀城市教育委員会『多賀城市内の遺跡２－平成22年度発掘調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第103集　2011ａ
4　多賀城市教育委員会『高崎古墳群ほか』多賀城市文化財調査報告書第104集　2011ｂ
5　宮城県教育委員会『市川橋遺跡の調査－県道泉塩釜線関連遺跡調査報告書Ⅶ－』宮城県文化財調査報告書第218集　2009
6　仙台市市教育委員会『沼向遺跡第4～34次調査－宮城県仙台港背後地土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書Ⅲ－』仙台市市文化財調査報告書第360集　2010
7　加藤孝・野崎準「多賀城市内の館跡」『東北学院大学東北文化研究所紀要』第２号　1973
8　多賀城町誌編纂委員会『多賀城町誌』1967
9　多賀城市『多賀城市史　原始・古代・中世』第１巻　1997

附章　桜井館跡における放射性炭素年代測定（AMS測定）報告

（株）加速器分析研究所

１　測定対象試料

桜井館跡（第３次調査）は、宮城県多賀城市中央１丁目104-1に所在する。測定対象試料は、基本層及び遺構から出土した木炭合計6点である（表１）。

基本層第Ⅲ層は中世の旧表土層とされている。ＳＸ１は館跡を構成する土塁で、中世と推定されている。ＳＩ10竪穴住居跡は古墳時代後期とされ、ＳＸ８焼成遺構は出土遺物が少片であるため詳細は不明である。

２　測定の意義

試料No.１～3の測定により中世城館の築造年代を、No.４～6の測定により中世城館以前の遺構の年代を明らかにする。

３　化学処理工程

（１）メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。

（２）酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。

（３）試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

（４）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

（５）精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

（６）グラファイトを内径１mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

４　測定方法

加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、^{14}Cの計数、^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

５　算出方法

（１）δ^{13}Cは、試料炭素の^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表1）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

（２）^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C年代はδ^{13}Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表１に、補正していない値を参考値として表２に示した。^{14}C年代と誤差は、下１桁を丸めて

10年単位で表示される。また、^{14}C年代の誤差（±1σ）は、試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

（３）pMC（percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい（^{14}Cが少ない）ほど古い年代を示し、pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値もδ^{13}Cによって補正する必要があるため、補正した値を表１に、補正していない値を参考値として表２に示した。

（４）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の^{14}C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の^{14}C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、１標準偏差（1σ＝68.2%）あるいは2標準偏差（2σ＝95.4%）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ^{13}C補正を行い、下1桁を丸めない^{14}C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース（Reimer et al. 2013）を用い、OxCalv4.2較正プログラム（Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については､特定のデータベース､プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

６　測定結果

測定結果を表１、２に示す。

基本層第Ⅲ層出土試料の^{14}C年代は、上面出土のNo.1が370±20yrBP、層中出土のNo.2が610±20yrBPである。暦年較正年代（1σ）は、No.1が1464 ～ 1618cal AD、No.2が1303 ～ 1394cal ADの間に各々複数の範囲で示される。上面出土のNo.1は、層中出土のNo.2より新しい年代となっている。

中世城館を構成するSX1土塁出土試料No.3の^{14}C年代は480±20yrBP、暦年較正年代（1σ）は1421 ～ 1441cal ADの範囲で示される。

中世城館以前の遺構出土試料の^{14}C年代は、ＳＩ10竪穴住居跡出土のNo.4が1360±20yrBP、No.5が1380±20yrBP、ＳＸ８焼成遺構出土のNo.6が1430±20yrBPである。ＳＩ10竪穴住居跡出土の2点の値は、誤差（±1σ）の範囲で一致する。暦年較正年代（1σ）は、No.4が650 ～ 669cal AD、No.5が642 ～ 665cal AD、No.6が613 ～ 646cal ADの範囲で示される。

これら６点の試料の年代値は、層位や出土遺物から推定される時期におおむね整合する（佐原2005)。試料の炭素含有率はすべて60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

表１　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C補正値）

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C（‰）(AMS)	δ^{13}C補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA-132063	No.1	基本層第Ⅲ層上面	木炭	AAA	-26.00 ± 0.44	370 ± 20	95.55 ± 0.27
IAAA-132064	No.2	基本層第Ⅲ層中	木炭	AAA	-25.43 ± 0.55	610 ± 20	92.66 ± 0.25
IAAA-132065	No.3	SX1土塁（東西）積土中	木炭	AAA	-26.23 ± 0.52	480 ± 20	94.14 ± 0.27
IAAA-132066	No.4	SI10竪穴住居跡 埋土2層	木炭	AAA	-24.61 ± 0.42	1,360 ± 20	84.41 ± 0.26
IAAA-132067	No.5	SI10竪穴住居跡 貼床埋土	木炭	AAA	-23.40 ± 0.70	1,380 ± 20	84.20 ± 0.26
IAAA-132068	No.6	SX8焼成遺構 埋土	木炭	AAA	-24.63 ± 0.53	1,430 ± 20	83.70 ± 0.25

［#6198］

表２　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C未補正値、暦年較正用^{14}C年代、較正年代）

測定番号	δ^{13}C補正なし		暦年較正用(yrBP)	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age（yrBP）	pMC（%）			
IAAA-132063	380 ± 20	95.35 ± 0.26	366 ± 23	1464calAD - 1517calAD (46.8%) 1595calAD - 1618calAD (21.4%)	1451calAD - 1524calAD (55.5%) 1558calAD - 1632calAD (39.9%)
IAAA-132064	620 ± 20	92.58 ± 0.23	612 ± 22	1303calAD - 1325calAD (28.1%) 1344calAD - 1366calAD (27.4%) 1383calAD - 1394calAD (12.7%)	1297calAD - 1400calAD (95.4%)
IAAA-132065	510 ± 20	93.90 ± 0.25	484 ± 23	1421calAD - 1441calAD (68.2%)	1413calAD - 1446calAD (95.4%)
IAAA-132066	1,360 ± 20	84.48 ± 0.25	1,361 ± 24	650calAD - 669calAD (68.2%)	634calAD - 689calAD (95.4%)
IAAA-132067	1,350 ± 20	84.48 ± 0.23	1,381 ± 24	642calAD - 665calAD (68.2%)	616calAD - 673calAD (95.4%)
IAAA-132068	1,420 ± 20	83.76 ± 0.23	1,429 ± 23	613calAD - 646calAD (68.2%)	585calAD - 655calAD (95.4%)

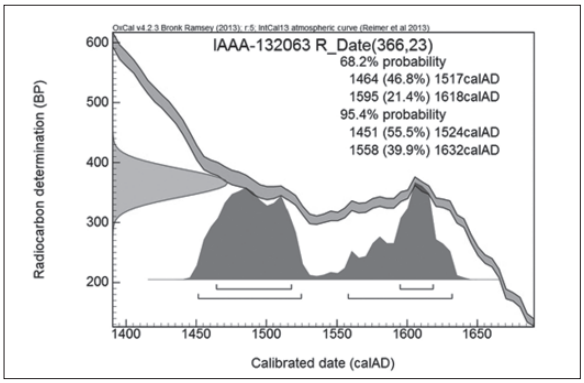
文献

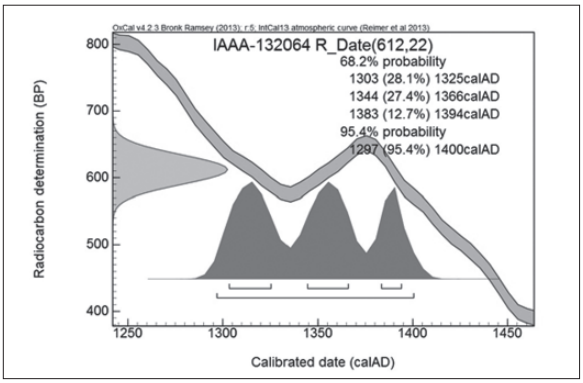
Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

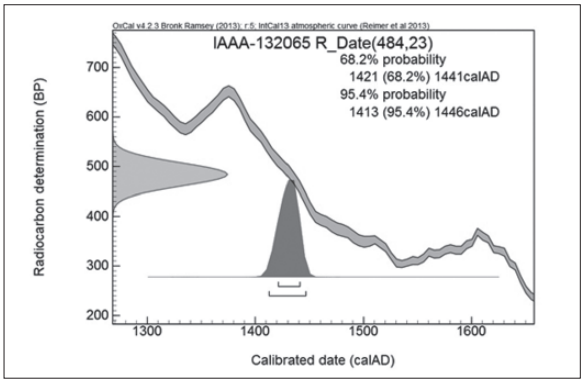
Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55(4), 1869-1887

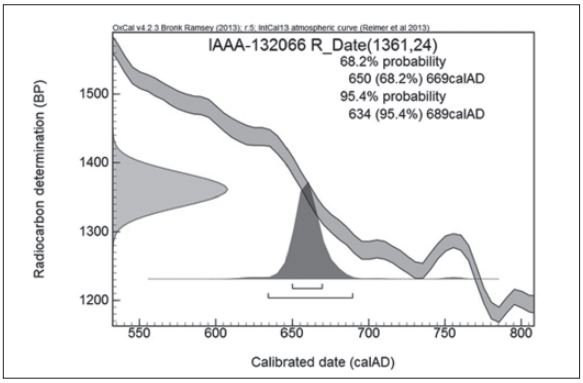
佐原眞 2005 日本考古学・日本歴史学の時代区分，ウェルナー・シュタインハウス監修，奈良文化財研究所編集，日本の考古学　上　ドイツ展記念概説，学生社，14-19

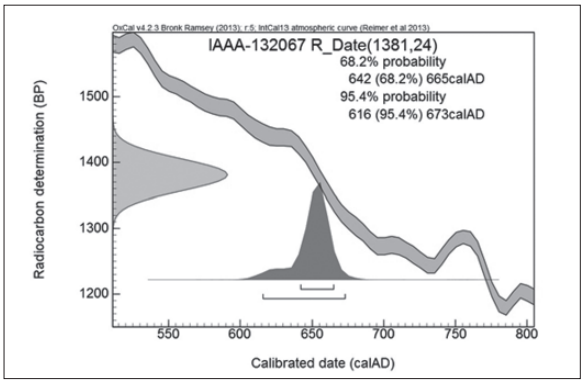
Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

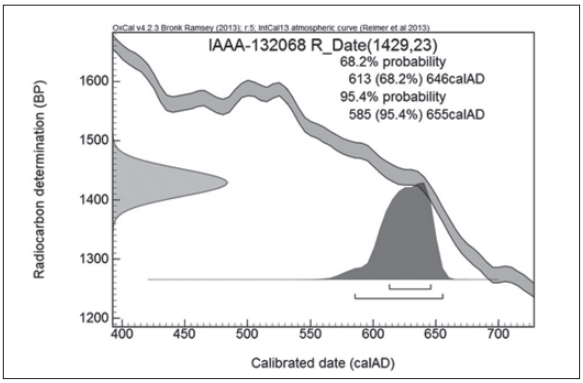












[図版]暦年較正年代グラフ（参考）

桜井館跡の遠景（北東より）

調査区全景（上空東より）

写真図版 1

調査区全景（上空より）

ＳＸ１土塁・ＳＸ２空堀全景（上空より）

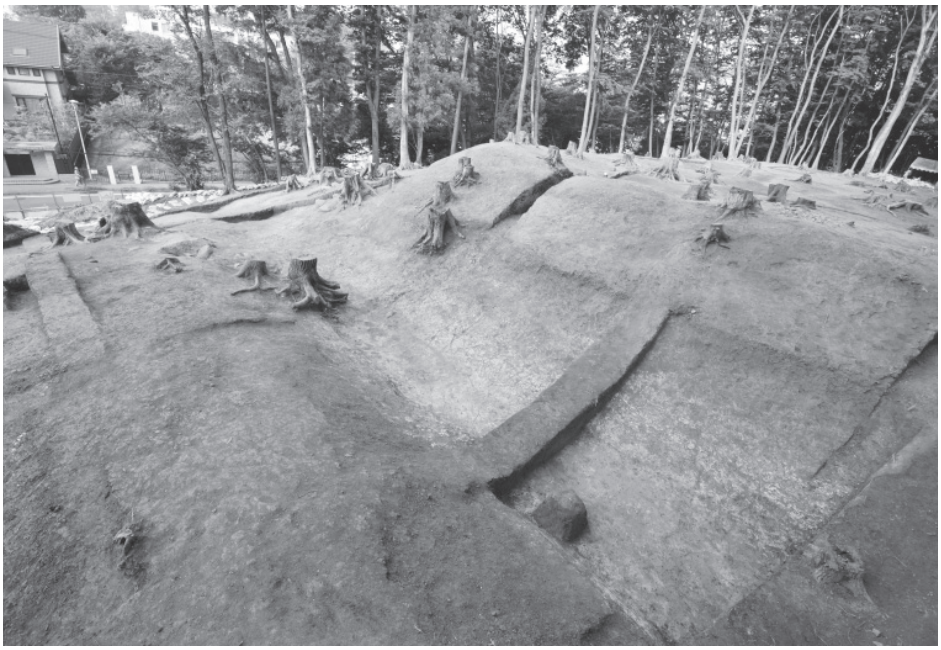
写真図版２

ＳＸ１土墨全景（西より）

ＳＸ１土墨とＳＸ２空堀
（南より）

ＳＸ１土墨とＳＸ２空堀
（西より）

写真図版３



ＳＸ１土塁とＳＸ２空堀
（南西より）

ＳＸ２空堀（北より）

ＳＸ２空堀北半部（南より）

ＳＸ２空堀南端付近土層
堆積状況　　（北より）

ＳＸ２空堀中央付近土層
堆積状況　　（北より）

ＳＸ２空堀調査状況

写真図版５

ＳＸ１土塁Ａ～Ａ′ ライン積土断面
（南より）

ＳＸ１土塁Ｂ～Ｂ′ ライン積土断面
（東より）

ＳＸ１土塁Ｃ～Ｃ′ ライン積土断面
（北東より）

写真図版６

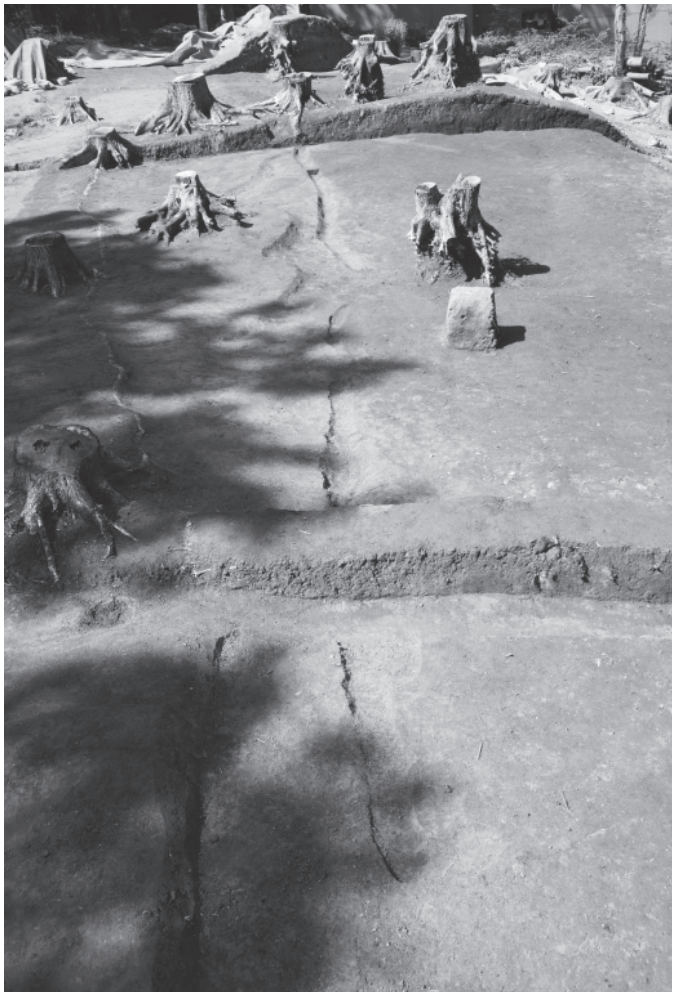
ＳＸ３平場全景（東より）

ＳＸ４平場全景（西より）

ＳＸ４平場全景（東より）

写真図版７

ＳＤ５小溝群全景（南東より）



ＳＤ６溝跡全景（東より）

ＳＸ13全景（北東より）

ＳＤ７溝跡全景（東より）

ＳＤ７溝跡・土層堆積状況
（西より）

写真図版９

ＳＩ10竪穴住居跡全景（西より）

ＳＩ10竪穴住居跡・カマド内
土層堆積状況　　（北より）

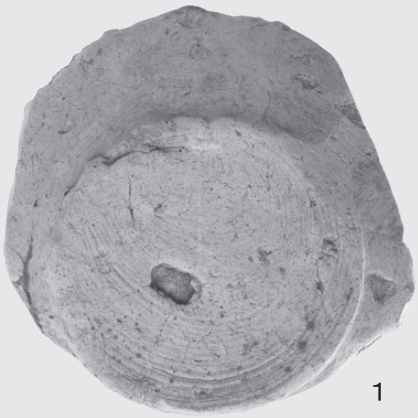
ＳＩ９竪穴住居跡全景（北より）

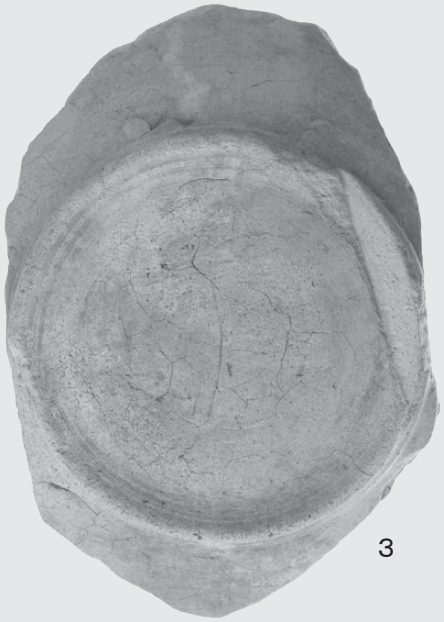
写真図版 10

ＳＸ８焼成遺構検出状況（東より）

ＳＸ８焼成遺構完掘状況（東より）

ＳＸ８焼成遺構土層堆積状況（南より）





1：須恵系土器坏　（第14図１）
2：須恵器坏　（第14図２）
3：土師器高台付坏　（第14図３）
4：土師器坏　（第14図４）
5：土師器甕　（第14図５）
6：土師器甕　（第14図６）
7：土製品　（第14図９）

写真図版 12

1：須恵器甕　（第14図８）
2：須恵器甕　（第14図７）
3：鍔　　（第14図10）
4：鉄刀　　（第14図11）
5：寛永通宝　（Ⅰ層出土）

写真図版 13

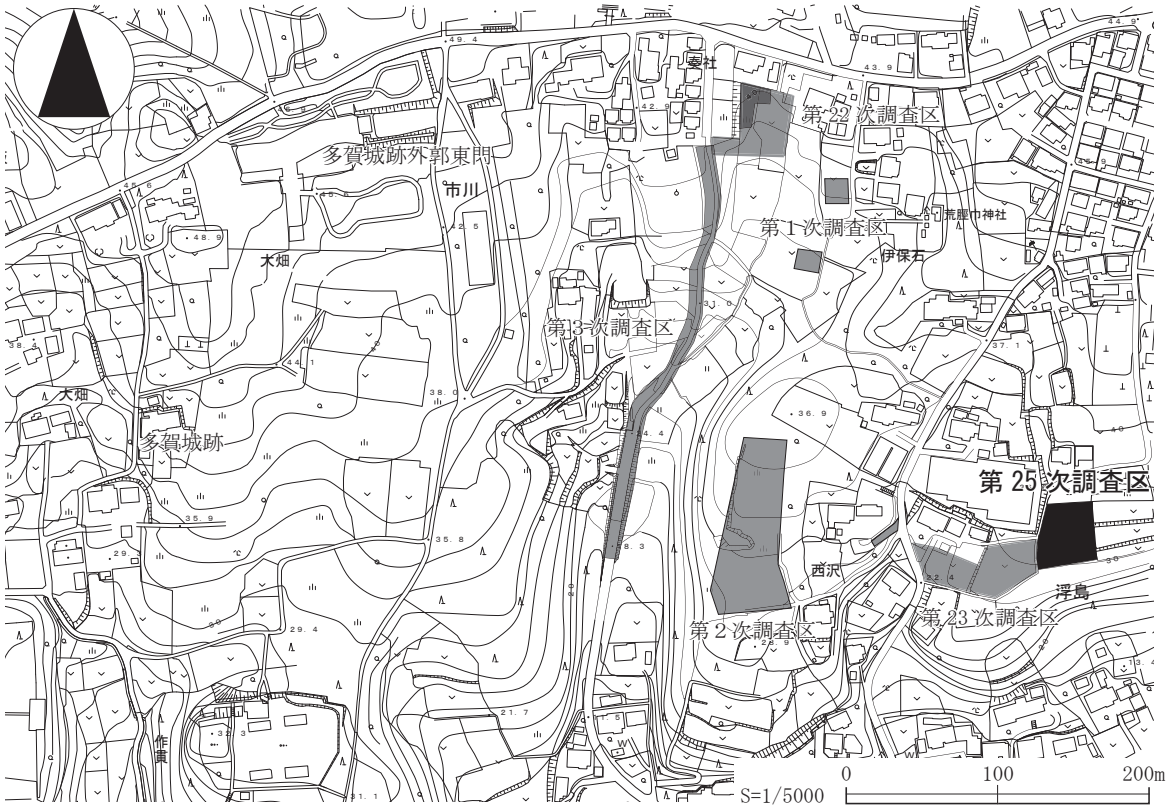
Ⅱ　西沢遺跡第25次調査

１　遺跡の地理的・歴史的環境

本遺跡は市北部の市川・浮島地区に所在している。地形的には松島丘陵から塩釜方面に向かって張り出した低丘陵上の南西端部にあたり、東西450m、南北700mの範囲を占めている。標高は北側丘陵尾根付近で約46m、南側の沖積地と接する付近で約６mである。遺跡全体をみると北から南に向かって低くなる緩斜面の合間に、大小の沢地形が複雑に入り組んだ景観を呈している。今回実施した調査区は遺跡のおよそ中央部にあり、北側は標高32.8m、南側は標高28.9mで比高差約４mの斜面上に位置している。

本遺跡内ではこれまで24度に及ぶ発掘調査を実施しており、平安時代の数多くの遺構・遺物を発見している。主な成果をみると、第２次調査区では一辺８mを超える平安時代の竪穴住居跡や、桁行５間の大型掘立柱建物跡、倉庫と見られる総柱の掘立柱建物跡を確認している。また、第３次調査区では、東側の沢地形に近接して、平安時代の竪穴住居跡や鍛冶工房跡が営まれていたことが明らかとなっている。これらは、遺構の規模や性格などから、いずれも西側に隣接する多賀城跡との関連性が想定しうる。

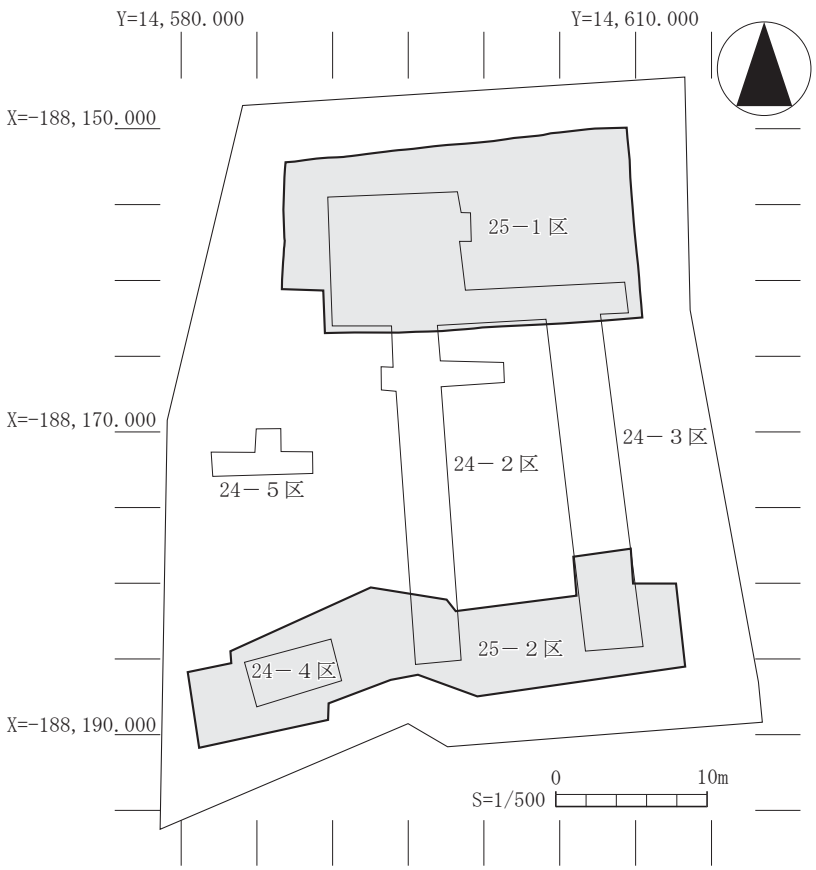
一方、第２次調査区では中世頃の整然と配置された30棟を超す掘立柱建物群を確認しており、立地も含め沖積地で確認されている大規模な屋敷群との構造的な違いも注目される。



第１図　調査区位置図

２　調査に至る経緯と経過

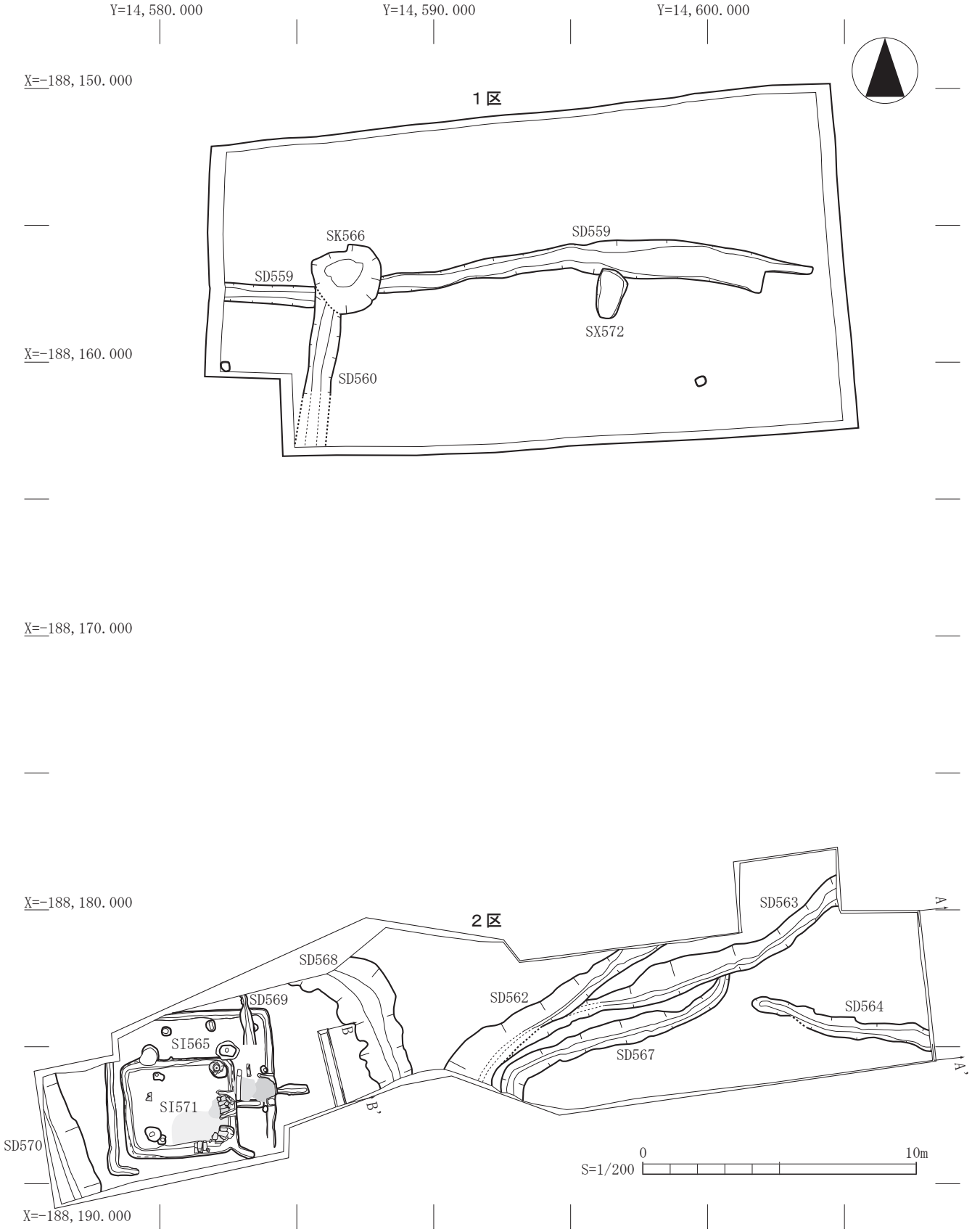
本件は、集合住宅新築に伴う本発掘調査である。平成25年７月、地権者より当該区における集合住宅建築と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、開発範囲の南側約３分の２を盛土、北側約３分の１を切土し、北側に基礎工事の際に最深87cmの掘削を伴う建物、南側には道路と擁壁を建築することとなっていた。本調査区の西側隣接地の調査成果では、地表面から遺構検出面までの深さは30～90cmであることから、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、遺構の分布と密度を確認するための調査を実施することに決定した。その後、８月６日に地権者から調査に関する依頼・承諾書の提出を受けて確認調査を実施した。



第２図　調査敷地と調査範囲

第24次の確認調査は、建物部分を東西に横断する１区、調査区を南北に縦断する２・３区、道路部分の西側を確認する４区、調査区西側の切土部分の５区の５箇所に調査区を設定した。調査の結果、１区からは溝跡と土壙、２・３区からは溝跡、４区からは竪穴住居跡が発見されたため、計画変更等により遺構の保存が図れないか協議を行ったが、申請どおりの計画で着手することに決定した。その後、９月27日に本発掘調査の委託契約を締結し、調査を実施した。

調査は10月２日から開始し、４日までかけて重機で表土を除去すると同時に現場の環境整備と２区の遺構検出作業を行った。台風26号の影響により作業に遅れが出て、18日に２区東側の遺構検出状況の写真撮影を行い、遺構の掘り下げを進めた。その後も悪天候と台風の影響に悩まされながらも、１区と２区東側の遺構精査・記録と西側の遺構検出を進めた。11月７日に２区西側のＳＩ565竪穴住居跡の検出状況の写真撮影を行い、床面まで掘り下げたところ、それよりも古いＳＩ571竪穴住居跡の存在を確認した。11月20日、ＳＩ565竪穴住居跡の完掘状況、11月22日には１区検出遺構の検出状況、11月29日にはＳＩ571竪穴住居跡の検出状況の写真撮影を行い、引き続き遺構の精査・記録を進めた。12月12日にはＳＩ571竪穴住居跡の完掘状況の写真撮影を行い、図面の作成を進め、12月19日に埋め戻して全ての作業を終了した。


Y=14,580.000
Y=14,590.000
Y=14,600.000
X=-188,150.000
X=-188,160.000
X=-188,170.000
X=-188,180.000
X=-188,190.000
1区
SK566
SD559
SD559
SX572
SD560
2区
SD563
SD568
SD569
SD562
SD564
SI565
SD567
SI571
SD570
A
A'
B
B'
0
10m
S=1/200

第３図　遺構配置図

３　調査成果

（１）　層　序

今回の調査区で確認した層序は以下の通りである。

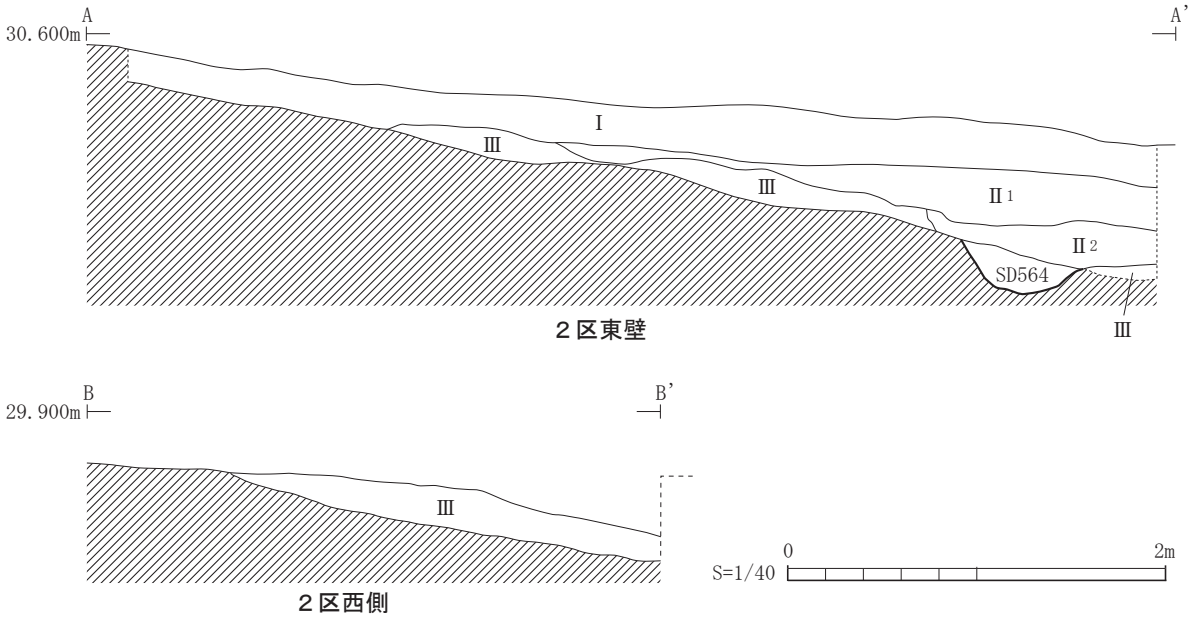
Ⅰ　層：調査区全域に堆積する現代の表土で、厚さは１区で15㎝～ 60㎝である。２区南側の斜面下方では70㎝とより厚くなる。

Ⅱ１層：調査区全域に堆積する褐色土で、厚さは15㎝である。

Ⅱ２層：２区南側に部分的に堆積する暗褐色土で、厚さは25㎝である。

Ⅲ　層：２区南側に部分的に堆積するⅣ層の明黄褐色の岩盤をブロック状に多量に含む黄褐色粘土層で、厚さは20㎝である。２区南側の斜面下方の一部では、この層が遺構検出面となっている。

Ⅳ　層：基盤となる岩盤層である。調査区北側の斜面上方から中腹では、この層が遺構検出面となっている。



第４図　層序断面図

（２）発見遺構と遺物

今回の調査では、竪穴住居跡２棟、溝跡８条、土壙１基、性格不明遺構１基を発見した。遺構検出面は、１区はⅣ層、２区は北側がⅣ層、南側がⅢ層である。

ＳＩ571竪穴住居跡（第５～９図）

【位置】２区西側に位置する隅丸方形の竪穴住居跡である。

【残存状態】南辺の一部は後世の改変により一部失われているが、それ以外の箇所は良好である。

【重複】ＳＩ565と重複し、それよりも古い。

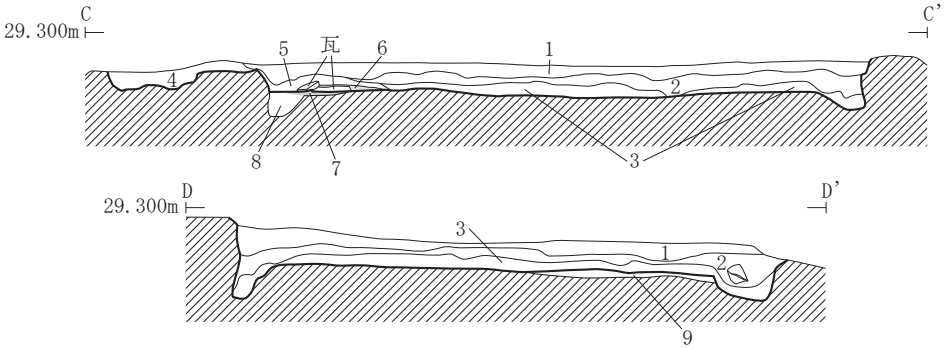
【平面形・方向】平面形は隅丸方形である。方向は西辺でみると北で約５度西に偏している。

【規模】東辺が4.11ｍ、南辺が3.56ｍである。

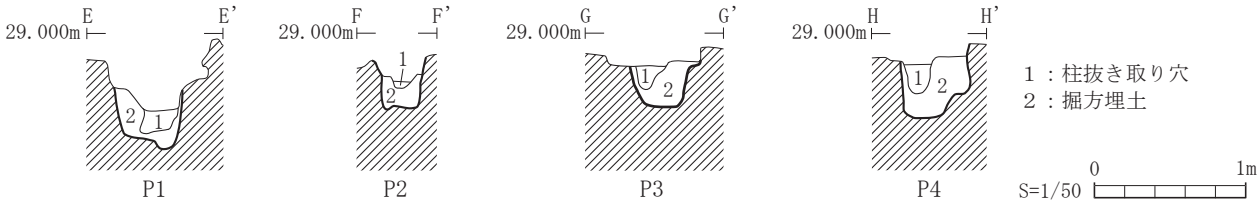
【埋土】１層はⅣ層の岩盤をブロック状にやや多く含む褐色粘質土である。２層はⅣ層の岩盤をブロック状に多量に含む暗褐色土、３層はⅣ層の岩盤を小ブロック状に多く含む褐色粘質土で、周溝にも堆積し

Y=14,580.000
Y=14,585.000
X=-188,185.000
X=-188,190.000
P1
P2
P3
P4
平瓦
カマド下部
S=1/50
0
3m

第５図　ＳＩ 571 竪穴住居跡平面図

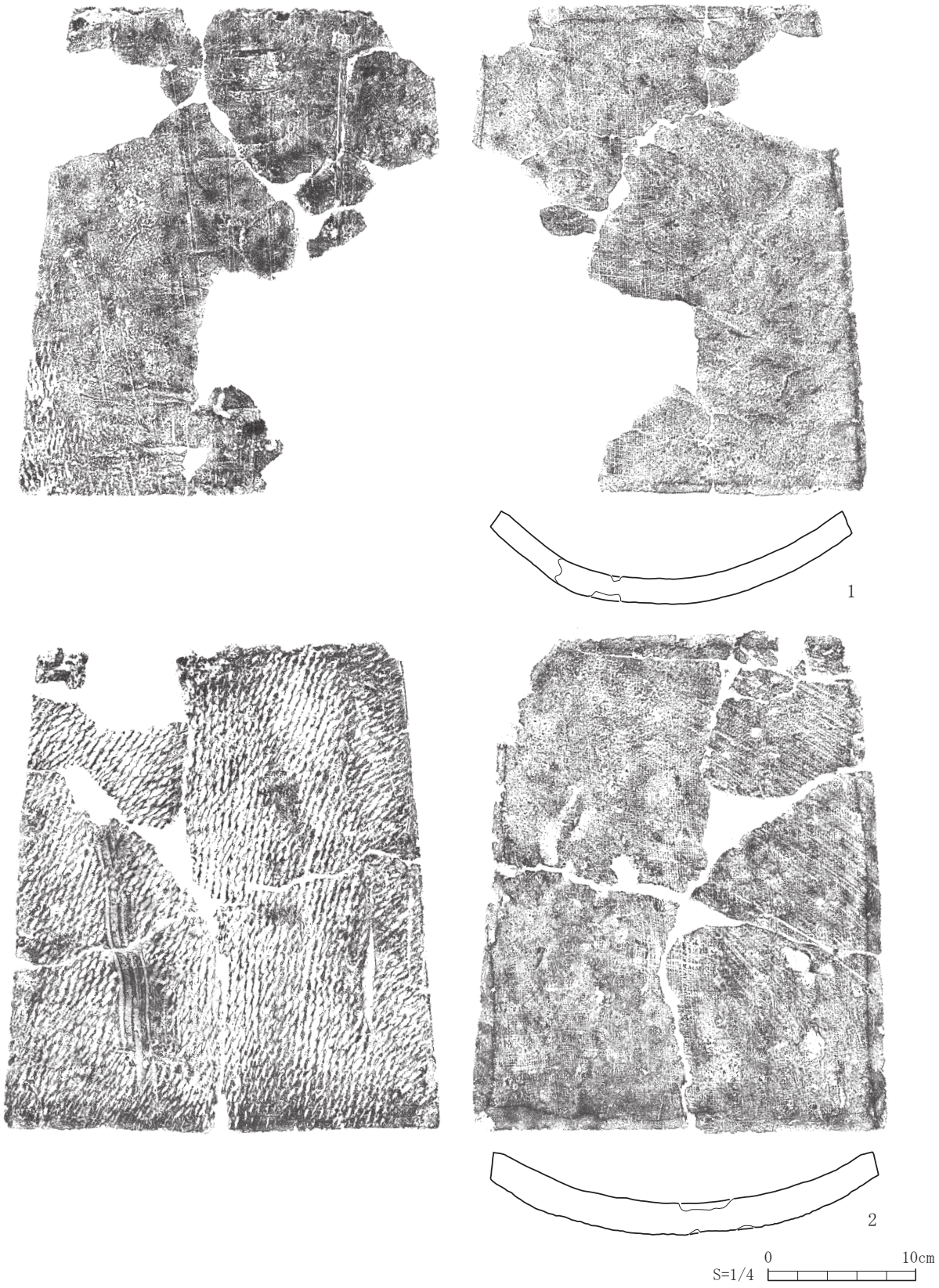


１～３：埋土１～３層　４：カマド煙道内埋土　５：カマド崩落土
６：炭化物層　７：焼土化部分　８：カマド下部周溝埋土　９：貼床



１：柱抜き取り穴
２：掘方埋土

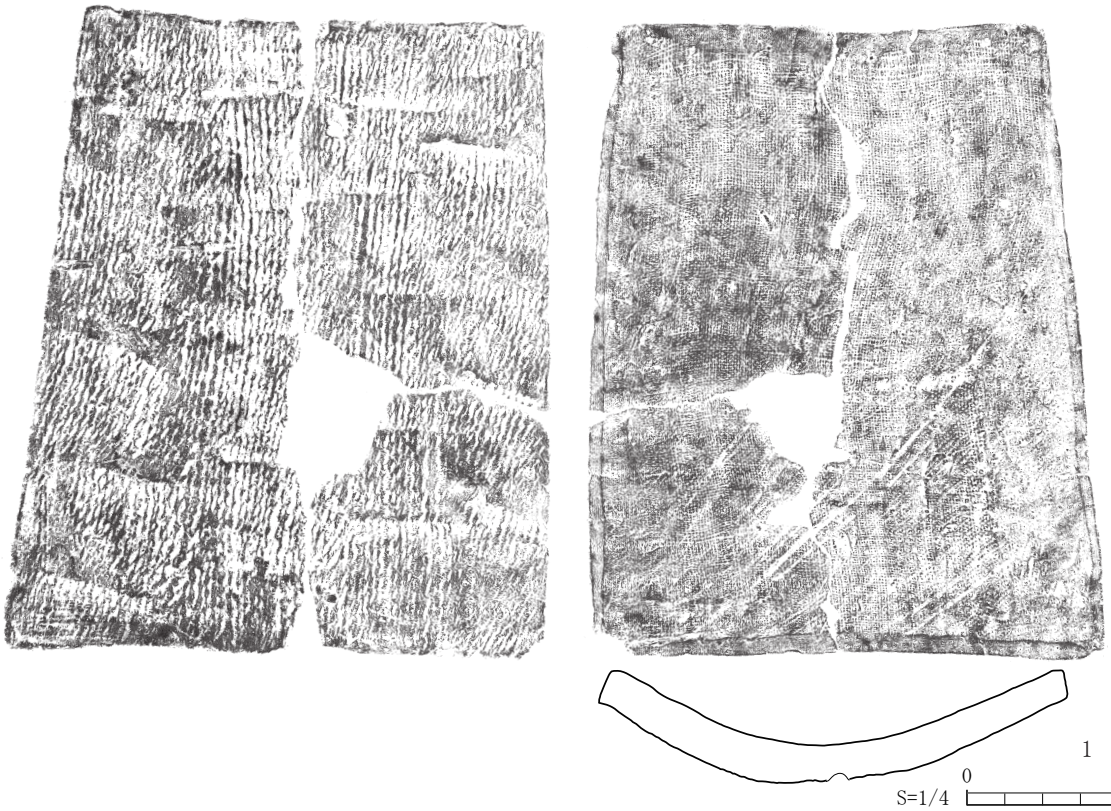
第６図　ＳＩ 571 竪穴住居跡断面図

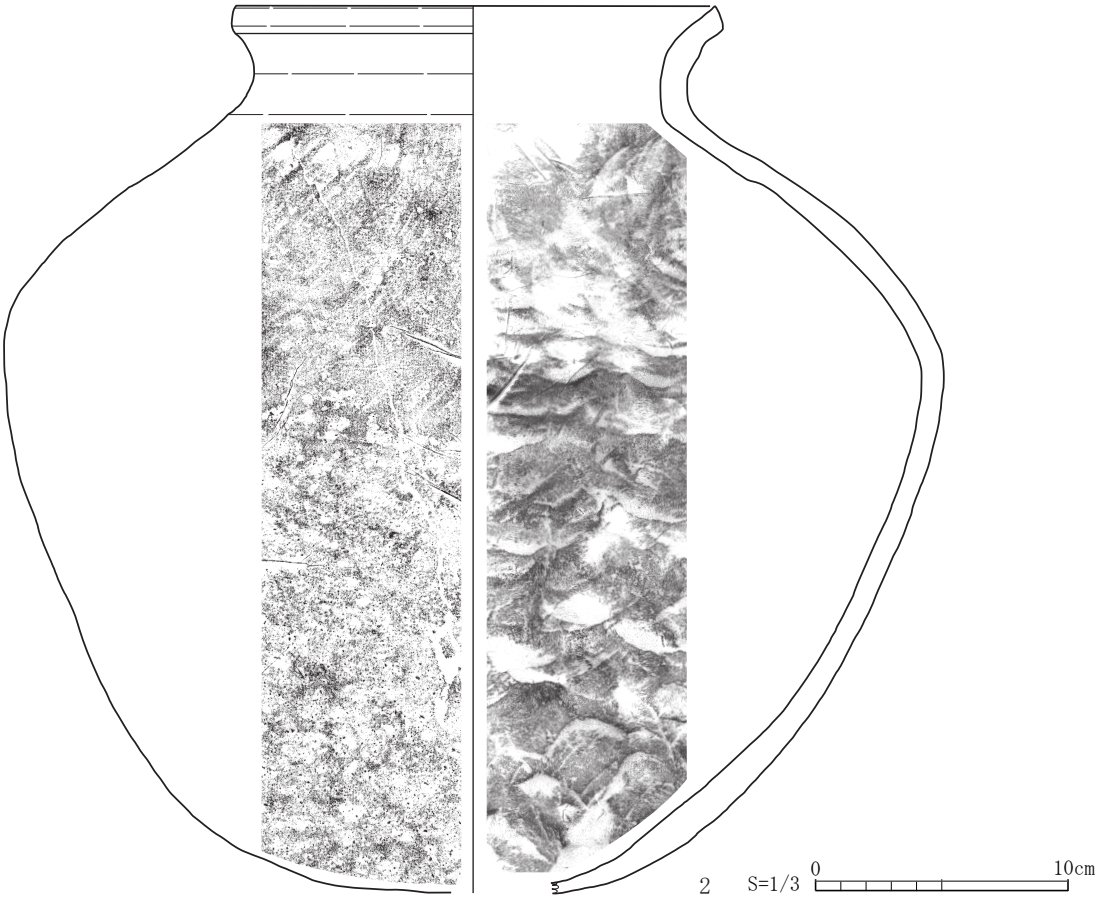


（単位：cm）

番号	種類	層位	特徴		長さ	広端部幅	狭端部幅	厚さ	写真図版	登録番号	備考
			凸面	凹面							
1	平瓦	SI571 カマド火床面	縄叩き目→ナデ	布目→ナデ	32.9	—	—	1.8		R13	ⅠA類－a
2	平瓦	SI571 カマド火床面	縄叩き目→凹型台圧痕、一部に布目	布目→ナデ	33.5	27.8	—	2.2	6-4	R5	ⅡB類－a1に類似

第７図　ＳＩ 571 出土遺物（１）

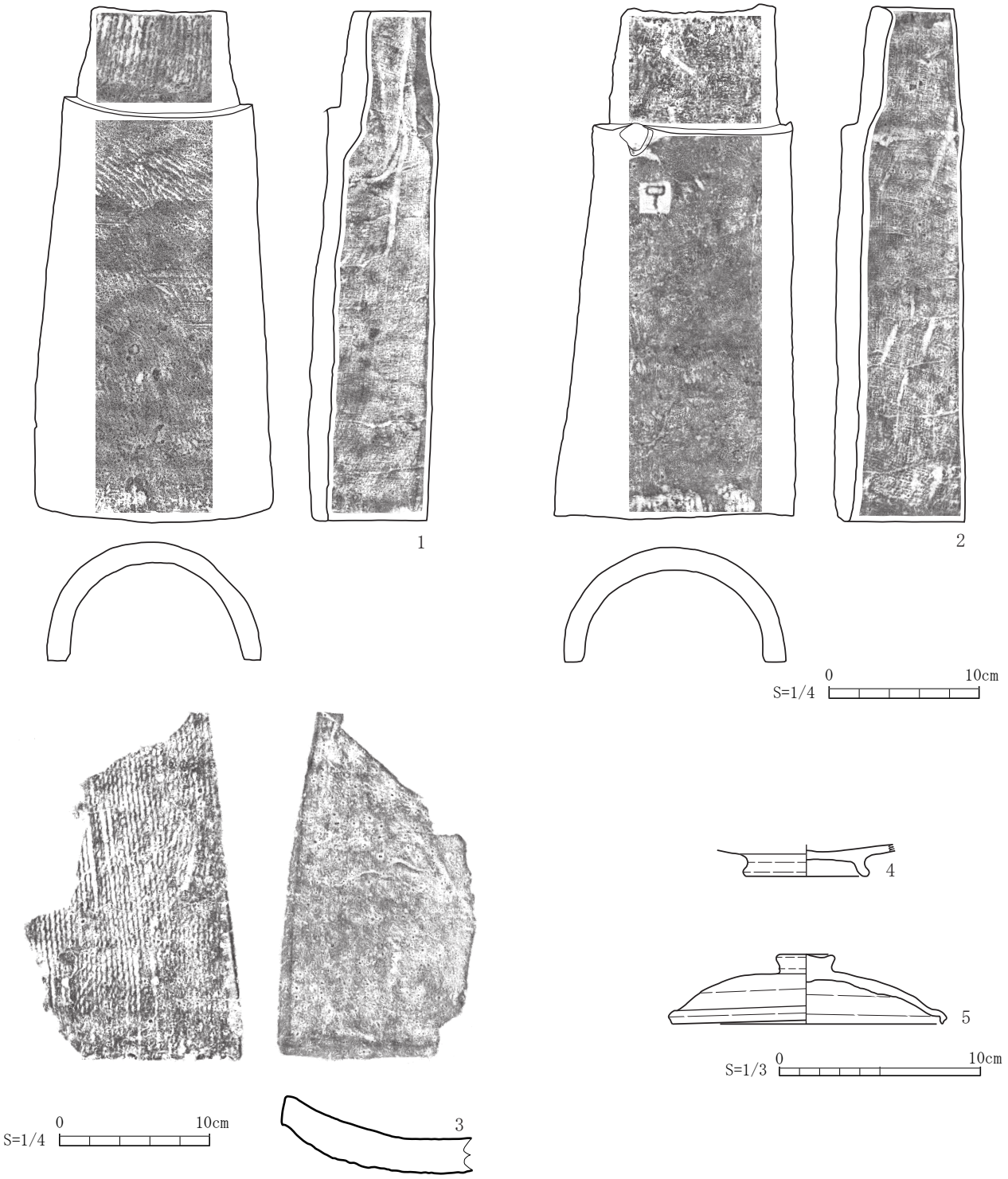




（単位：cm）

番号	種類	層位	特徴		長さ	広端部幅	狭端部幅	厚さ	写真図版	登録番号	備考
			凸面	凹面							
1	平瓦	SI571 カマド火床面	縄叩き目→凹型台圧痕	布目→ナデ	33.5	26.5	22.4	1.8	7-1・2	R8	Ⅱｂ類－ａ
番号	種類	層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真図版	登録番号	備考	
			外面	内面							
2	須恵器 甕	SI571 P4柱抜取り穴	格子叩き→ロクロナデ	半円形状の当て具痕	19.0 23/24	10.6 24/24	35.2	6-1・2	R27	ほぼ完形、底部焼成後穿孔	

第８図　ＳＩ 571 出土遺物（２）



（単位：cm）

番号	種類	層位	特徴		長さ	広端部幅	狭端部幅	厚さ	写真図版	登録番号	備考
			凸面	凹面							
1	丸瓦	SI571 周溝埋土上部	縄叩き目→ロクロナデ	布目	33.8	15.4	9.0	1.3	7-3・4	R11	ⅡＢ類－ａ
2	丸瓦	SI571 周溝埋土上部	縄叩き目→ロクロナデ	布目	34.3	16.0	10.0	1.6	8-1・2	R10	ⅡＢ類－ａ、刻印「占」
3	平瓦	SI571 周溝埋土上部	縄叩き目→凹型台側端部の圧痕	布目→ナデ	－	－	－	2.2		R7	ⅡＢ類－ｂ
番号	種類	層位	特徴		口径残存率	底径残存率	器高	写真図版	登録番号	備考	
			外面	内面							
4	土師器 高台付坏	SI571 埋土１層	ロクロナデ	ヘラミガキ、黒色処理	－	6.2 24/24	(1.6)		R33		
5	須恵器 蓋	SI571 埋土２層	ロクロナデ	ロクロナデ	13.4 20/24	－	3.5	6-3	R28		

第９図　ＳＩ 571 出土遺物（３）

ている。これらの埋土は、ブロック混入の状況から、全て人為的な埋め土と考えられる。

【床面の状態】南東側はⅣ層の岩盤や黒褐色土をブロック状に含む褐色粘土の貼床で、厚さは２～６㎝である。それ以外はⅣ層を平坦にして床としている。

【壁の状態】周溝の底面から床面の高さまでは、約２～４㎝ほど外側にオーバーハングしており、それより上部では垂直に立ち上がる。壁高は、残存状態が良好な北壁で24㎝である。

【柱穴】床上面で主柱穴を４基確認した（Ｐ１～Ｐ４）。住居の平面形に比べてやや東寄りに方形で配置されている。各柱穴の間隔は平均で約2.3ｍ、対角線上は約3.3ｍである。平面形は不整円形であり、規模は長さ35～63㎝、幅20～54㎝、深さ31～58㎝である。掘方埋土はいずれもⅣ層の岩盤を小ブロック状に多量に含む黄褐色土である。柱抜取り穴はＰ２が柱痕跡状の柱のあたり痕跡である。それ以外の柱抜取り穴は掘方を壊しており、その下部は円柱状に窪んで柱痕跡状になる。柱のあたり痕跡の規模は直径14～24㎝で、埋土は褐色土である。

【カマド】東辺中央に付設され、煙道・燃焼部・側壁部を確認した。規模は燃焼部最大幅65㎝、奥行52㎝、残存する側壁高は最大16㎝である。燃焼部には平瓦が平坦になるように敷かれ、瓦全体が被熱している。側壁部はⅣ層の岩盤をブロック状に含む褐色粘質土で構築されており、側壁内側の一部が被熱している。カマド内にのみ堆積する５層は、暗赤褐色の焼土と炭化物とカマド側壁と同質の褐色粘質土をブロック状に多量に含む暗赤褐色土であり、カマド崩落土と考えられる。煙道は長さ100㎝、幅30㎝、残存する深さは12㎝であり、先端ほど深くなる。煙道内埋土の４層は炭化物と暗赤褐色土をブロック状にやや多く含む褐色粘質土である。

【周溝】全周しており、南東隅から外延溝が延びる。規模は上幅24～52㎝、下幅５～30㎝、深さ５～12㎝であり、北から南にかけて約10㎝の比高差で緩やかに傾斜し、南東隅ではさらに５㎝程低くなっている。カマド下部では、Ⅳ層の岩盤を小ブロック状にやや多く含む褐色土で埋め戻されている。

【遺物】１層からは第９図－４に示した土師器の高台付坏（Ｂ類）のほか、土師器坏（Ａ類）・甕（Ａ類）、須恵器坏・甕・瓶・蓋、平瓦（ＩＡ類－ａ・ＩＢ類）が出土している。２層からは第９図－５に示した須恵器蓋のほか、土師器坏（Ａ類）・甕（Ａ類）、須恵器瓶が出土している。住居南東側のＰ１柱抜取り穴埋土と周溝埋土の上部からは、第９図－１～３に示した丸瓦（ⅡＢ類－ａ）平瓦（ⅡＢ－ｂ）のほか、土師器甕（Ａ類）・平瓦が出土している。Ｐ４柱抜取り穴埋土からは、第８図－２に示した須恵器甕が斜めに倒立した状況で出土している。床面直上からは、須恵器甕、平瓦（ＩＡ・ⅡＢ類－ａ）が出土している。カマド周辺の埋土からは、土師器甕、須恵器瓶、平瓦が出土している。カマドの燃焼部からは、第７図－１・２、第８図－１に示した平瓦（ＩＡ類－ａ・ⅡＢ類－ａ）が出土している。また、貼床埋土からは、土師器甕（Ａ類）が出土している。

ＳＩ565竪穴住居跡（第10～12図）

【位置】２区西側に位置する隅丸方形の竪穴住居跡である。

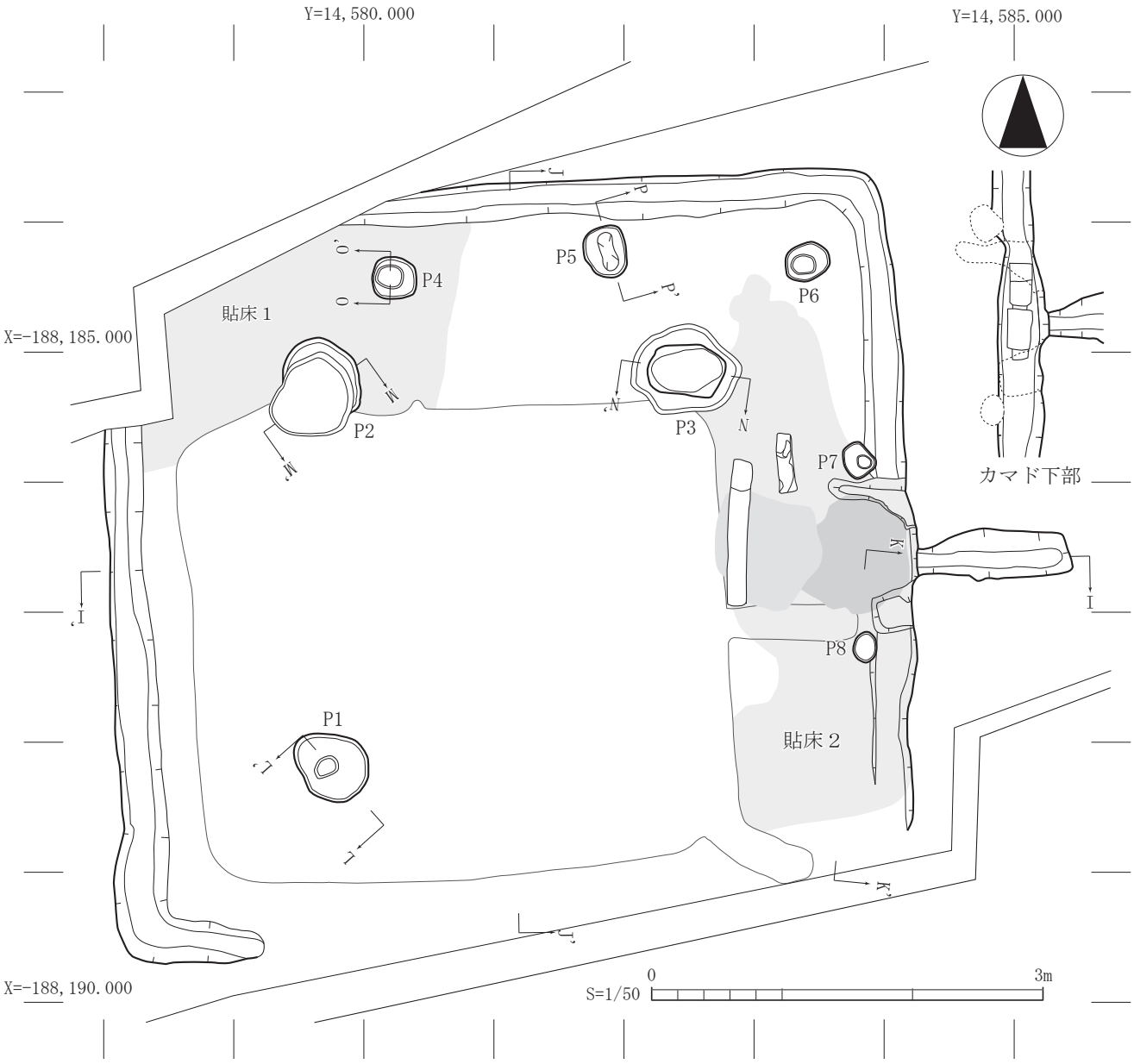
【残存状態】南辺の一部は削平されている。また、北西角は調査区外である。そのほかの箇所では残存状態は良好である。

【重複】ＳＩ571と重複し、それよりも新しい。

【平面形・方向】平面形は隅丸方形である。方向は西辺でみると北で約３度西に偏している。

【規模】東西方向は6.46ｍであり、南北方向で6.08ｍと推定される。

【埋土】１層はⅣ層の岩盤を小ブロック状にやや多く含む明褐色粘土、２層は壁際と周溝に堆積する白色



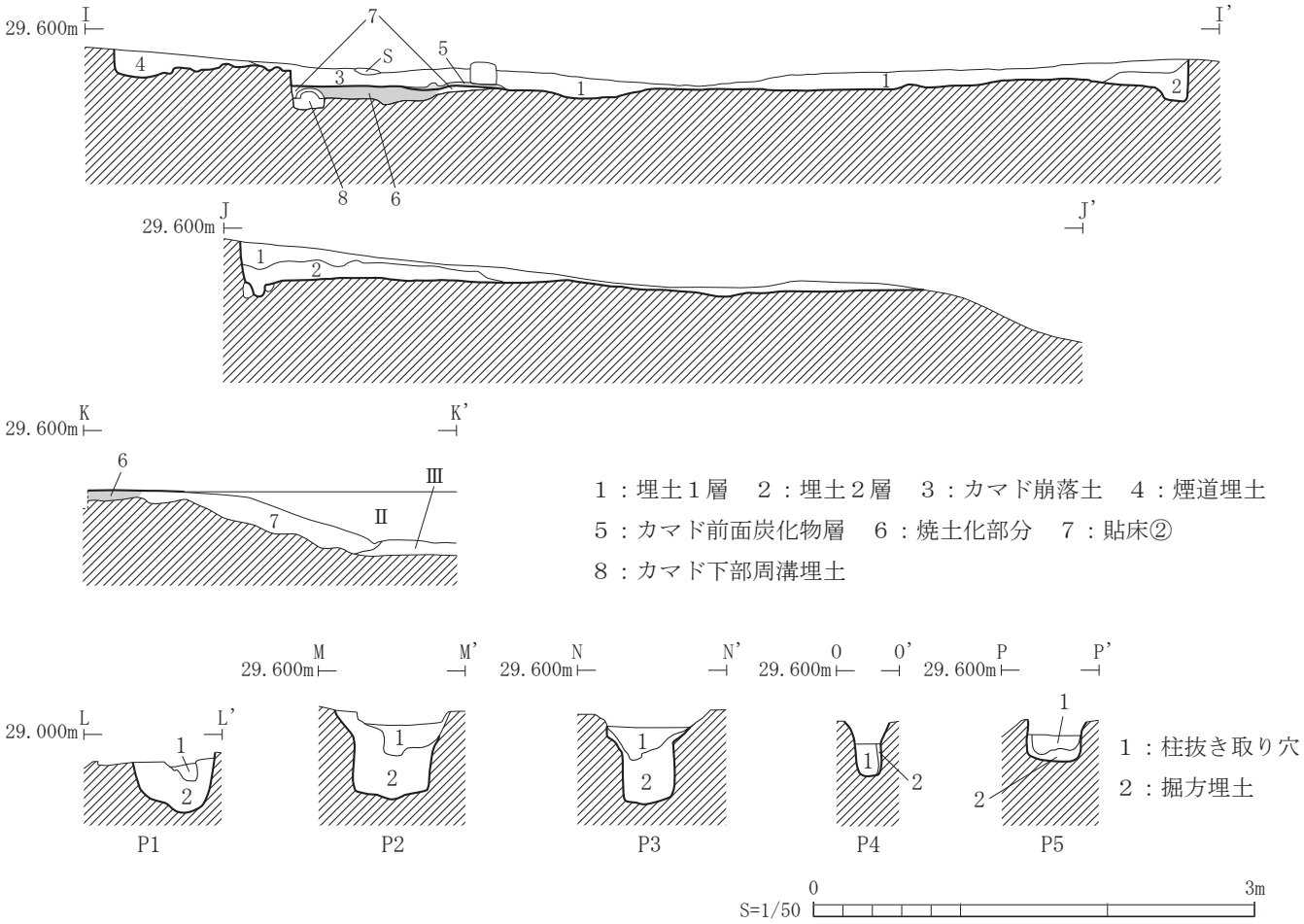
第10図　ＳＩ565竪穴住居跡平面図

粒を含む明黄褐色粘土である。

【床面の状態】北西側の貼床１はⅣ層の岩盤を小ブロック状に多量に含む黄褐色土であり、厚さは１～10cmである。南東側の貼床２は暗褐色土で、厚さは８～16cm以上であり、比高差約40cmの斜面を平坦にするように整地している。そのほかでは、Ⅳ層を平坦にして床としている。

【壁の状態】周溝の底面から検出面まで、ほぼ垂直に立ち上がる。壁高は、残存状態が良好な北壁で26cmである。

【柱穴】床面上で８基確認した（Ｐ１～Ｐ８）。主柱穴は規模と配置からＰ１・２・３と考えられる。柱穴の間隔は平均で2.9m、対角線上は4.1mである。平面形はおよそ楕円形であり、規模は長さ約60cm、幅40～52cm、深さ36～62cmである。掘方埋土はⅣ層の岩盤をブロック状に多量に含む褐色もしくは黄褐色粘質土である。３基とも柱は抜き取られており、柱抜取り穴は、Ｐ１は柱痕跡状に、Ｐ２とＰ３は掘



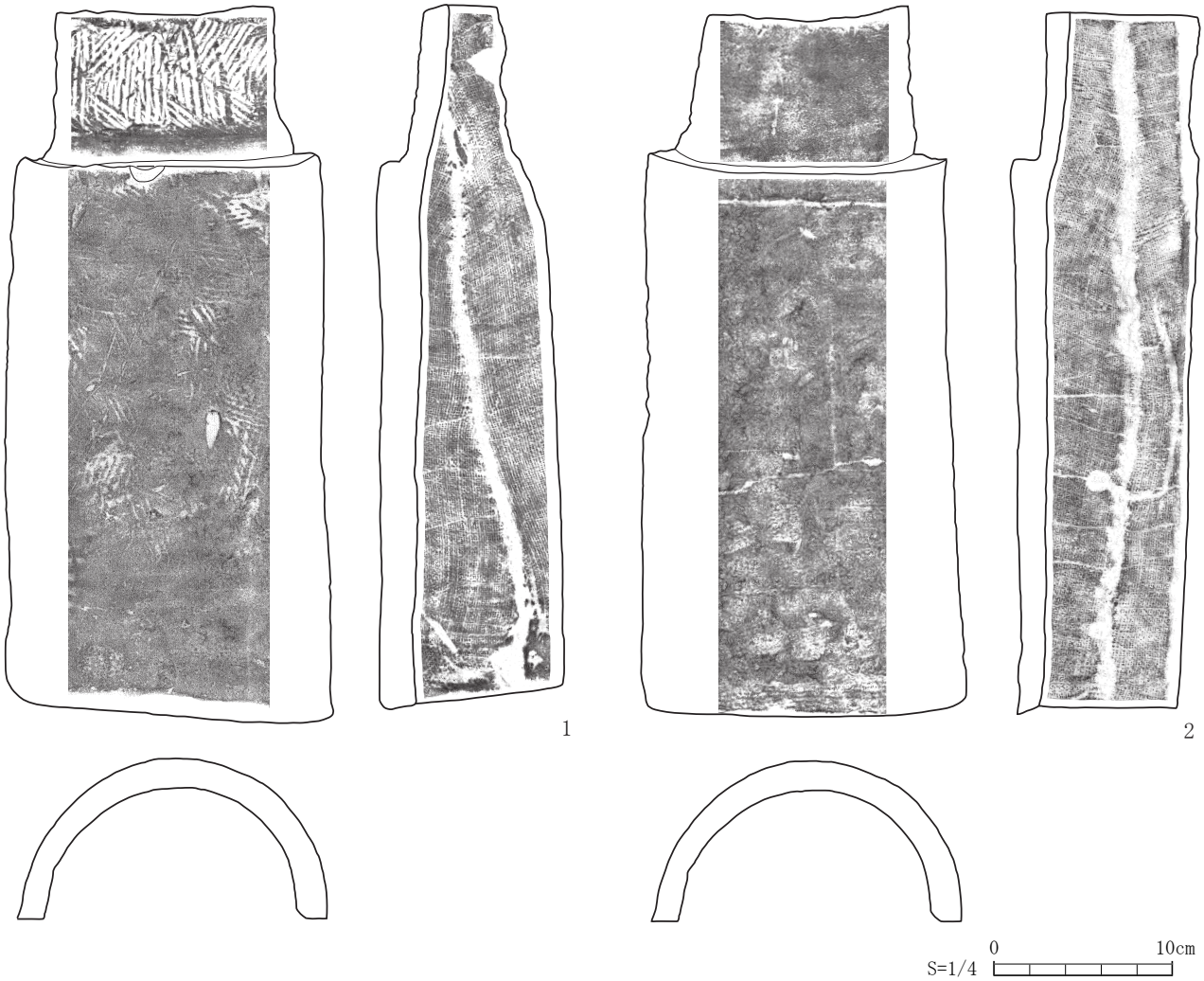
第 11 図　ＳＩ 565 竪穴住居跡断面図

方の上部を大きく壊している。Ｐ２とＰ３の柱抜取り穴の下部は直径約12㎝の円形状にわずかに窪んでおり、柱のあたり痕跡と考えられる。埋土は白色粒を含む褐色粘質土である。

Ｐ４～Ｐ８は北側と東側の周溝に沿うように配されている。柱穴の間隔は、Ｐ４－Ｐ５間で1.7m、Ｐ５－Ｐ６間で1.5m、Ｐ６－Ｐ７間で1.6m、Ｐ７－Ｐ８間で1.4mである。平面形はおよそ楕円形であり、規模は長さ34 ～ 40㎝、幅28 ～ 32㎝、深さ26 ～ 38㎝である。カマド脇のＰ７とＰ８は、ほかに比べて小さい。掘方埋土はⅣ層の岩盤を小ブロック状に含む褐色または黄褐色土である。柱抜取り穴は柱痕跡状に認められ、埋土はⅣ層の岩盤を小ブロック状に含む褐色粘質土である。

【カマド】東辺中央に付設され、煙道と燃焼部と側壁部を確認した。規模は燃焼部最大幅90㎝、奥行82㎝、残存する側壁高は最大16㎝である。側壁部はⅣ層の岩盤をブロック状にやや含む褐色粘土で構築されている。燃焼部は、側壁内側の一部と火床面の貼床が被熱している。カマド内にのみ堆積する３層は、暗赤褐色の焼土と炭化物とカマド側壁と同質のにぶい黄褐色土をブロック状に多量に含む灰黄褐色土で、カマド崩落土と考えられる。煙道は長さ1.2m、幅42㎝、深さ３～ 18㎝で、先端ほど深くなる。煙道内埋土の４層は焼土と炭化物をブロック状に多量に含む灰黄褐色粘質土である。

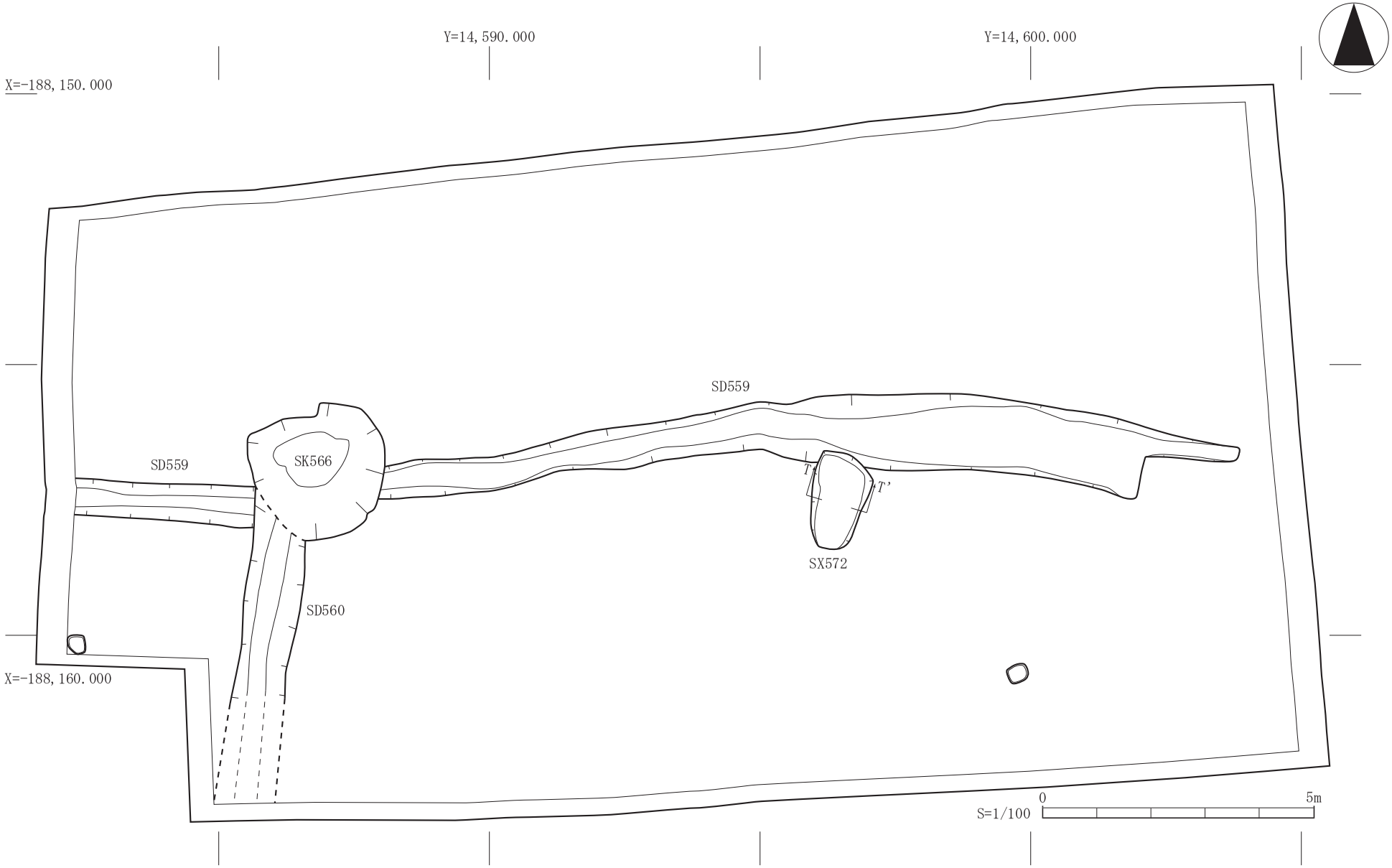
【周溝】東辺、西辺、北辺では良好な状態で残存しており、南辺はほとんど削平されている。規模は上幅24 ～ 40㎝、下幅10 ～ 20㎝、深さ27 ～ 37㎝である。壁はほぼ直立し、底面は平坦で北から南にかけて約30㎝の比高差で緩やかに傾斜する。カマド下部の箇所は、暗褐色土で埋め戻したのちに丸瓦を２点伏せ



（単位：cm）

番号	種類	層位	特徴		長さ	広端部幅	狭端部幅	厚さ	写真図版	登録番号	備考
			凸面	凹面							
1	丸瓦	SI565 カマド下周溝上部	格子叩き・矢羽根状叩き→ロクロナデ	布目	39.2	18.4	―	2.0	8-3・4	R1	ⅡＢ類－ｂに類似
2	丸瓦	SI565 カマド下周溝上部	不明→ロクロナデ	布目	39.1	17.8	11.3	1.6	9-1・2	R2	ⅡＢ類
番号	種類	層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真図版	登録番号	備考	
			外面	内面							
3	須恵器 高台付坏	SI565 埋土１層	ロクロナデ	ロクロナデ	15.8 11/24	11.2 23/24	3.7		R21		

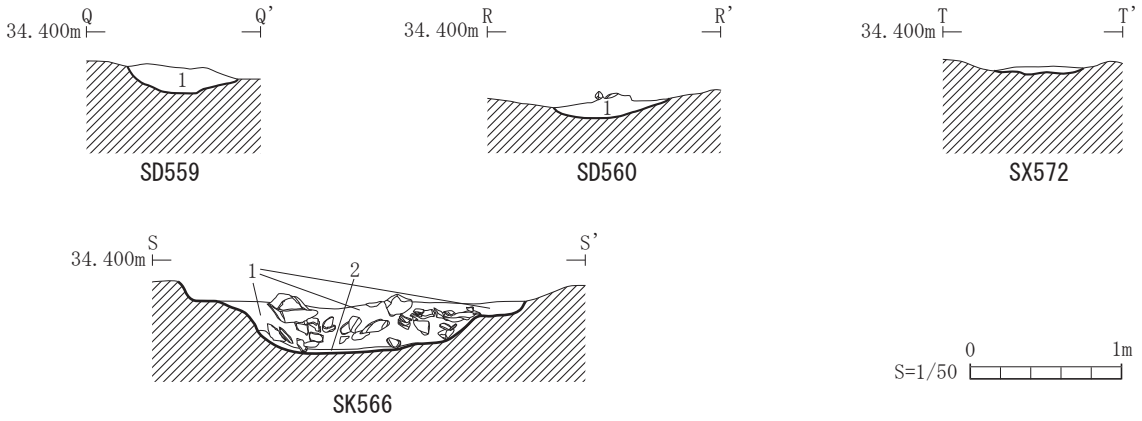
第 12 図　ＳＩ 565 出土遺物



第 13 図　1 区検出遺構平面図

Y=14,582.000
Y=14,585.000
Y=14,588.000
X=-188,157.000
X=-188,160.000
X=-188,163.000
SK566
SD559
SD559
SD560
S
S'
Q
Q'
R
R'
0
1m
S=1/50

第 14 図　ＳＤ 559・560、ＳＫ 566 平面図



第 15 図　１区検出遺構断面図

て周溝に沿って被せられた暗渠状となっている。

【遺物】１層からは第12図－３に示した須恵器高台付坏のほか土師器坏（ＡＩａ・ＡＩｂ・ＡⅢ類・ＢⅡｃ・ＢＶ類）、甕（Ａ・Ｂ類）、須恵器坏（Ｉ類）・甕、丸瓦、平瓦（Ｉｃ類－ａ）が出土している。２層からは須恵器坏（Ⅱ類）が出土している。周溝内からは、土師器甕、須恵器瓶、平瓦ⅡＢ類が出土している。カマド内埋土からは土師器甕Ｂ類が出土している。貼床②中からは、土師器坏（ＡＩｂ・ＡⅡａ類）、須恵器坏（Ⅱ類）・甕が出土している。カマド下部の暗渠には、第12図１・２に示した丸瓦（ⅡＢｂ類）が２点並べられている。また、カマド前面の炭化物層の上部には、角柱状製品が置かれていた（写真図版９－３）。

ＳＤ559溝跡（第13～15図）

【位置】１区中央に位置するやや蛇行する東西溝跡であり、西側は調査区外に延びる。

【重複】ＳＤ560・ＳＫ566と重複し、それらよりも古い。

【方向・規模】方向は東で約９度北に偏しており、東半は南に湾曲している。規模は長さ9.1m以上、上幅0.9～1.3m、下幅0.2～1.1m、深さ17cmである。

【埋土】Ⅳ層の岩盤をブロック状にやや多く含む褐色土である。

【壁・底面】壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面は平坦で、30cmの比高差で西から東へと緩やかに傾斜する。

【遺物】埋土から土師器坏（ＢＩ類）・高台付坏・甕（Ｂ類）、須恵器甕が出土している。

ＳＤ560溝跡（第14・15図）

【位置】１区西側に位置する南北溝跡であり、南側は調査区外に延びる。

【重複】ＳＤ559・ＳＫ566と重複し、ＳＫ566よりもよりも古く、ＳＤ559よりも新しい。

【方向・規模】方向は北で約10度東に偏している。規模は長さ5.5m以上、上幅0.9～1.1m、下幅30～41cm、深さ13cmである。

【埋土】黄褐色土であり、埋土上部にこぶし大の丸礫が並ぶ。

【壁・底面】壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面は平坦であり、35cmの比高差で北から南へと傾斜する。

【遺物】出土していない。

ＳＤ562溝跡（第16・17図）

【位置】２区中央に位置する蛇行する東西溝跡であり、北側と南側は調査区外に延びる。

【重複】ＳＤ563と重複し、それよりも新しい。

【方向・規模】方向は東で約57度北に偏しており、南側は東へと蛇行している。規模は長さ7.8m以上、上幅0.7～1.6m、下幅10～40cm、深さ39cmである。

【埋土】上部はⅡ層が直接堆積している。底面付近に残存する埋土は褐色粘土である。

【壁・底面】南北の比高差最大26cmの斜面を切り通すように掘削されており、壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面は平坦で、比高差約80cmで北から南に向かって傾斜する。

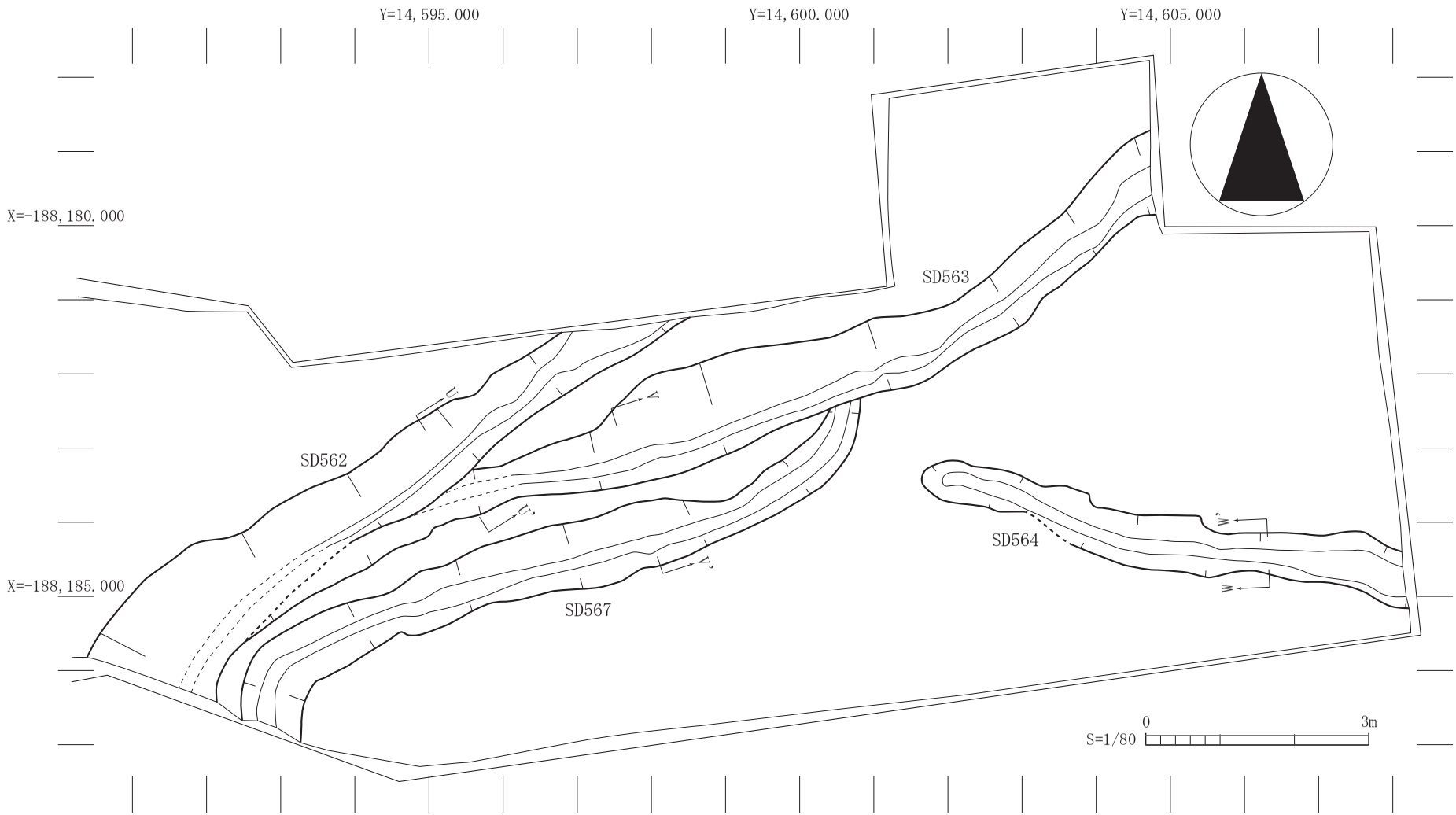
【遺物】出土していない。

ＳＤ563溝跡（第16・17図）

【位置】２区東側に位置する蛇行する東西溝跡であり、東側は調査区外に延びる。

【重複】ＳＤ562・567と重複し、前者より古く、後者より新しい。

【方向・規模】方向は東で約52度北に偏しており、東側は北へ、西側は南へと蛇行している。規模は長さ



第16図　ＳＤ562・563・564・567平面図

10.9m以上、上幅0.5～1.4m、下幅11～34㎝、深さ52㎝である。

【埋土】上部はⅡ層が直接堆積している。底面付近に残存する埋土はにぶい黄褐色粘土である。

【壁・底面】南北の比高差最大39㎝の斜面を切り通すように掘削されており、壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面は平坦で、比高差約60㎝で東から西に向かって傾斜している。

【遺物】検出面から土師器坏、須恵器甕、平瓦、陶器の破片が出土している。

ＳＤ564溝跡（第16・17図）

【位置】２区東側に位置する東西溝跡であり、東側は調査区外に延びる。

【方向・規模】方向は東で約11度南に偏している。規模は長さ6.6m以上、上幅40～75㎝、下幅13～43㎝、深さ20㎝である。

【埋土】Ⅳ層の小礫をブロック状に少量含むオリーブ褐色である。

【壁・底面】壁は外傾しながら立ち上がる。底面は平坦で、比高差43㎝で西から東に向かって傾斜する。

【遺物】検出面から土師器甕、須恵器甕・瓶、磁器、陶器の破片が出土している。

ＳＤ567溝跡（第16・17図）

【位置】２区東側に位置する蛇行する東西溝跡であり、南側は調査区外に延びる。

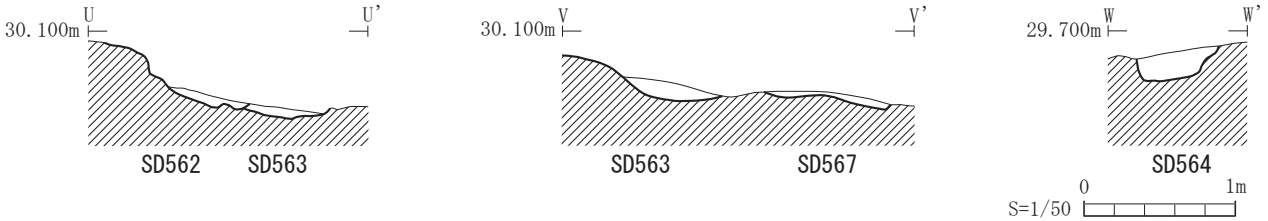
【重複】ＳＤ563と重複し、それよりも古い。

【方向・規模】方向は東で約18度北に偏しており、東側は北側へ、西側は南側へと蛇行している。規模は長さ9.1m以上、上幅46～91㎝、下幅13～27㎝、深さ16㎝である。

【埋土】上部にはⅡ層が直接堆積している。底面付近に残存する埋土はⅣ層の岩盤をブロック状に多量に含む褐色粘質土であり、人為的な埋め土と考えられる。

【壁・底面】南北の比高差最大10㎝の斜面を切り通すように掘削されており、壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面は平坦で、比高差約50㎝で東から西に向かって傾斜する。

【遺物】検出面から土師器坏、須恵器坏・瓶の破片が出土している。



第17図　ＳＤ562・563・564・567溝跡断面図

ＳＤ568溝跡（第18・21図）

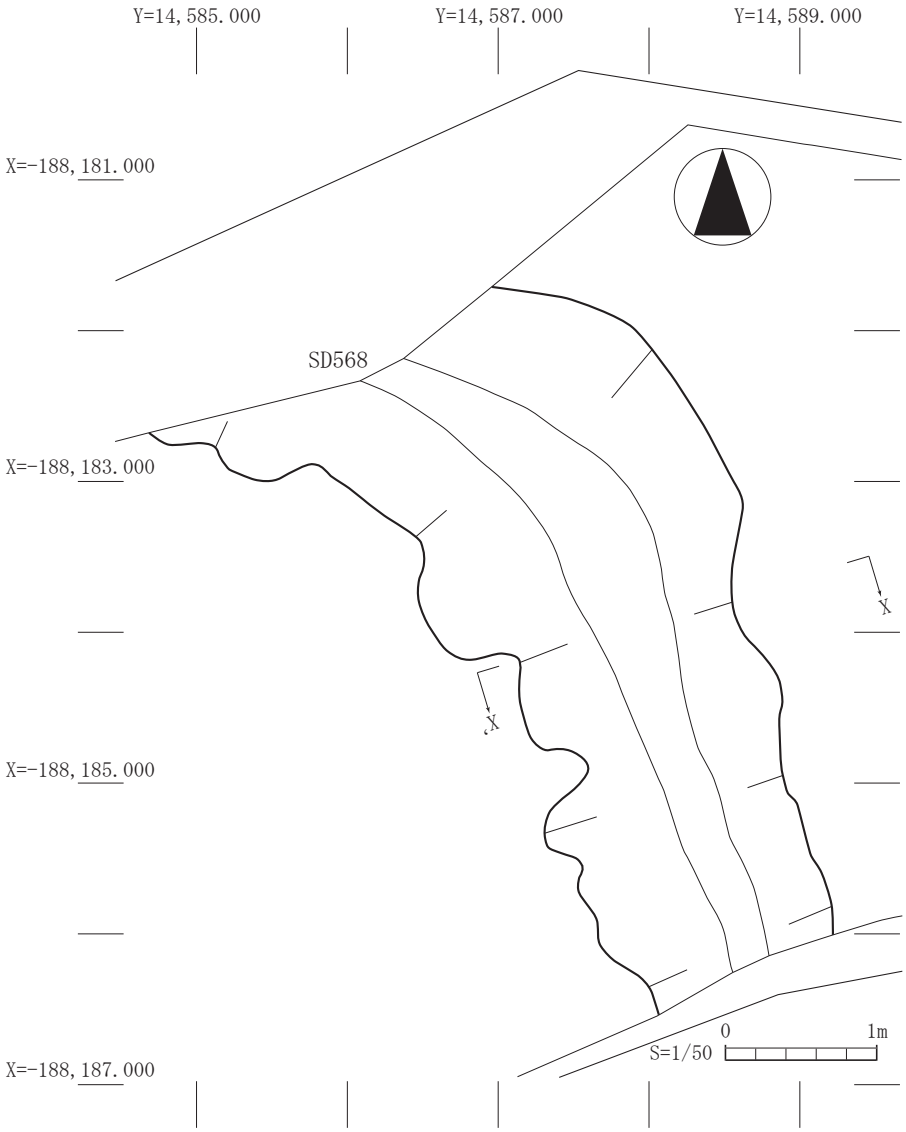
【位置】２区中央に位置する蛇行する南北溝跡であり、北側と南側は調査区外に延びる。

【方向・規模】西に湾曲する形態で、方向は、北半は北で約41度西に偏し、南半は北で約18度西に偏している。規模は長さ4.2m以上、上幅1.4～2.2m、下幅32～65㎝、深さ48㎝である。

【埋土】黄褐色粘質土であり、下方には砂質土をブロック状に含む。

【壁・底面】壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面は平坦で、比高差18㎝で北から南に向かって傾斜している。

【遺物】出土していない。



第 18 図ＳＤ 568 平面図

ＳＤ569溝跡（第19・21図）

【位置】２区西側に位置する南北溝跡であり、北側は調査区外に延びる。また、南側は確認調査の際に掘り下げたため不明である。

【重複】ＳＩ571と重複し、それよりも新しい。

【方向・規模】方向は北で約７度西に偏している。規模は長さ1.9m以上、上幅16 ～ 42cm、下幅５～24cm、深さ48cmである。

【埋土】褐色粘質土である。

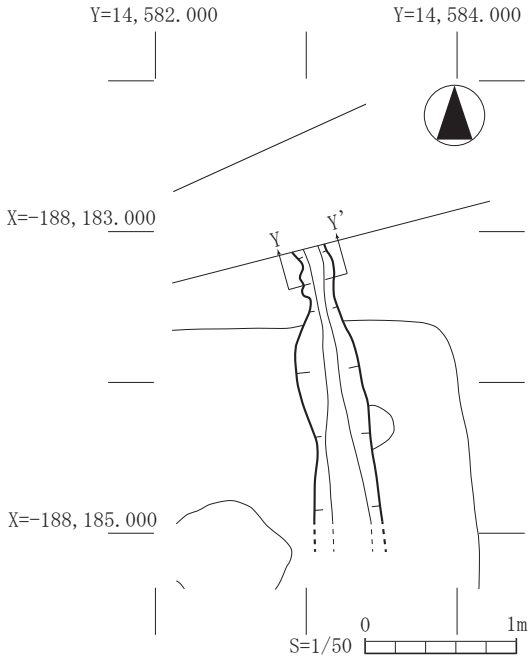
【壁・底面】壁は外傾しながら立ち上がる。底面は平坦で、北から南に向かって傾斜する。

【遺物】出土していない。

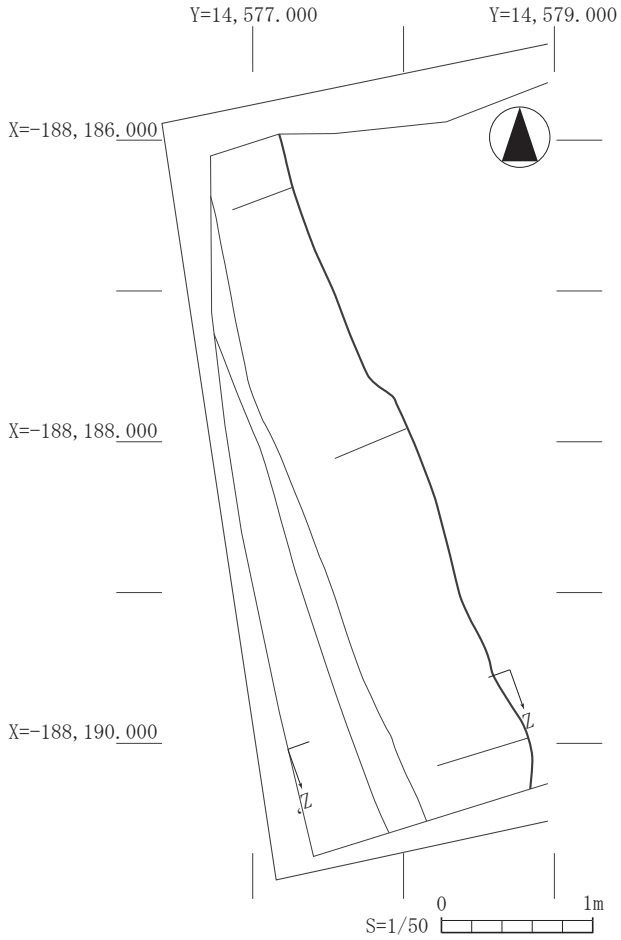
ＳＤ570溝跡（第20・21図）

【位置】２区西端に位置する南北溝跡であり、東辺以外は調査区外である。

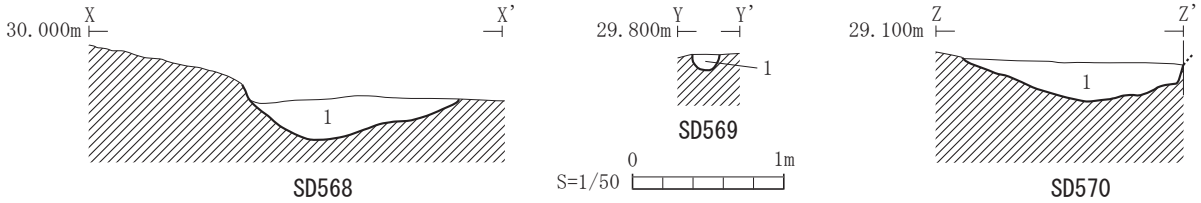
【方向・規模】方向は東辺で測ると北で約21度西に偏している。規模は長さ4.6m以上、上幅1.6m以上、下幅９～ 26cm、深さ30cmである。



第 19 図　ＳＤ 569 溝跡平面図



第 20 図　ＳＤ 570 溝跡平面図



第 21 図　ＳＤ 568・569・570 溝跡断面図

【埋土】褐色粘質土で、下方は黄褐色土や黒褐色土をやや多く含む。

【壁・底面】壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面は平坦であり、比高差約60㎝で北から南に向かって傾斜する。

【遺物】埋土から須恵器瓶の破片が出土している。

ＳＫ566土壙（第14・15図）

【位置】１区西側で発見した。

【重複】ＳＤ559・560と重複し、それらよりも新しい。

【平面形・規模】平面形は不整円形であり、規模は直径2.6m、深さ55㎝である。

【埋土】２層に分けることができる。１層は暗褐色土、２層は黄褐色粘土である。

【壁・底面】壁は緩やかに外反しながら立ち上がり、底面は平坦である。

【遺物】１層から須恵器甕の破片が出土している。

ＳＸ572（第13・15図）

【位置】１区中央に位置する土壙状の浅い落ち込みである。

【重複】ＳＤ559と重複し、それよりも新しい。

【平面形・規模】平面形は楕円形であり、規模は南北方向の上幅1.8m、下幅1.7m、東西方向の上幅1.1m、下幅76cm、深さ４cmである。

【埋土】白色粒をやや含む褐色粘質土である。

【壁・底面】壁は非常に緩やかに外傾しながら立ち上がっており、底面は平坦である。

【遺物】出土していない。

堆積層その他の出土遺物

Ⅰ層から土師器坏・甕、須恵器坏・甕・瓶、瓦、陶磁器の破片が、Ⅱ層から土師器坏・甕、須恵器坏・甕・瓶、陶磁器の破片が出土している。

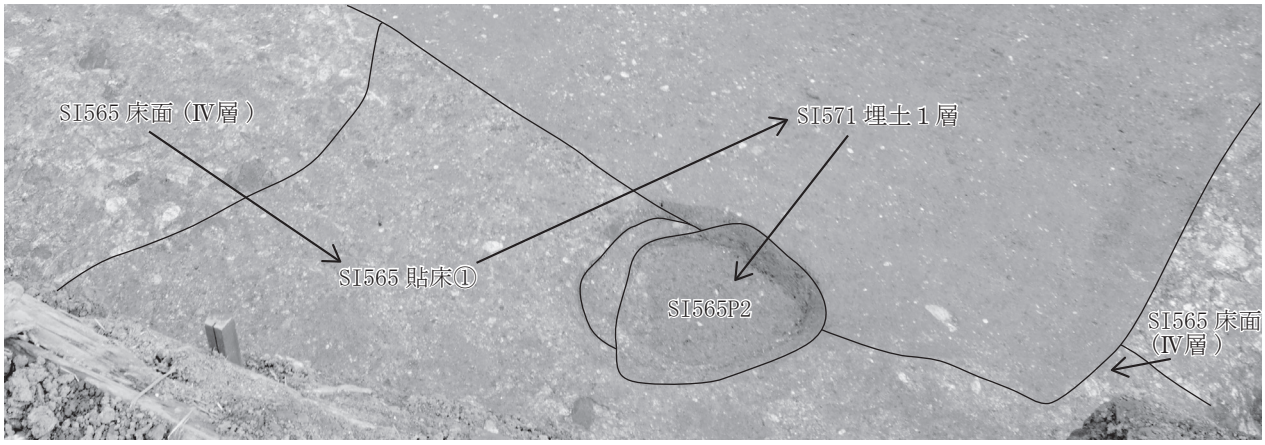
４　まとめ

（１）古代の竪穴住居跡について

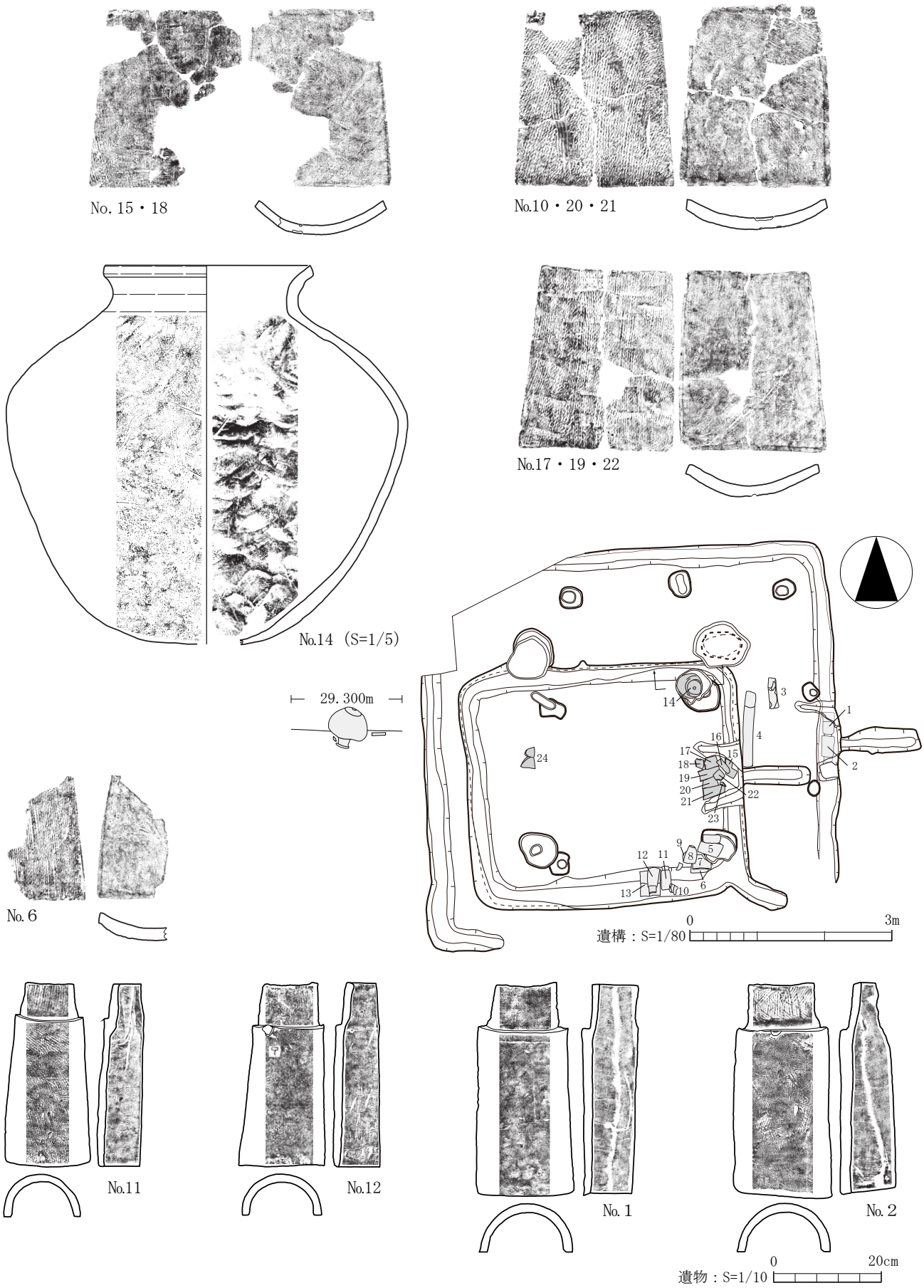
（ａ）ＳＩ571の廃絶からＳＩ565の構築まで（第22図）

第22図は、住居北西隅を北西側から撮影した写真である。ＳＩ565床面に貼床①が施されているが、ＳＩ571埋土がそれを切るような状況で検出され、一見するとＳＩ565→ＳＩ571の新旧関係のようにも見受けられる。一方、これら上面で確認したＰ２は、位置的にＳＩ565に伴うものであり、ＳＩ571埋土を掘り込んでいる。したがって、ＳＩ571→ＳＩ565の新旧関係は明らかである。さらに、これらの重複関係から、ＳＩ565床面の構築→ＳＩ565の部分的な貼床→ＳＩ571の埋め戻し→ＳＩ565上屋の構築という経過が復元できる。

このことは、ＳＩ571が完全に埋没する前にＳＩ565の床面が構築されていたことを示している。一度埋め戻したＳＩ571を再度掘り下げることなく、ＳＩ571が開口している状態で壁を押し広げて、合理的にＳＩ565を構築したことが想定できる。よって、ＳＩ571の廃絶からＳＩ565の構築が連続的であったと言える。



第 22 図　SI565・571 北西隅の構築手順



第 23 図　ＳＩ 565・571 竪穴住居跡遺物出土状況

（ｂ）遺物の出土状態（第23図）

①カマドに用いられた瓦

ＳＩ571の№15～23は、カマドの燃焼部に敷かれていた平瓦である。№20と№21は同一個体であるが、半分に割られて側端部が接するように配置されており、火床面が意図的に平坦になるように処置されている。また、№20・21と№10は接合しており、両者は色調の差が顕著である。

ＳＩ571のカマド下部には周溝が暗渠状にめぐっている。本調査区の基盤層は岩盤であるため、透水性が悪いことから、カマド下部の周溝は、岩盤以外の土で埋めることにより水分を土に浸みこませて通していたと考えられる。平瓦は、カマド下部の周溝から浸み上がってくる水分を防ぐために、燃焼部の火床面として据えられた可能性がある。

ＳＩ565の№１と２は、カマド下部の周溝上に凸面を上に向けて直列で配置されていた丸瓦である。丸瓦の凹面には周溝の埋土が充填されており、密閉されている。ＳＩ571と同様の理由によりカマド下部の周溝を暗渠状にしていたと考えられ、丸瓦は周溝から浸み上がってくる水分により燃焼部が湿ることを防止するための蓋であった可能性がある。

②ＳＩ571出土遺物について

№５～７、９～13の瓦は、住居南東部の周溝やＰ１柱抜取り穴の埋土上に置かれていた丸瓦と平瓦である。周溝の埋土がＰ１、Ｐ３の柱抜取り穴の埋土を覆っていたことから、周溝は主柱穴が抜き取られた後に埋められたと判断できる。よって、これらの遺物は住居の上屋を取り壊した後に置かれたものである。

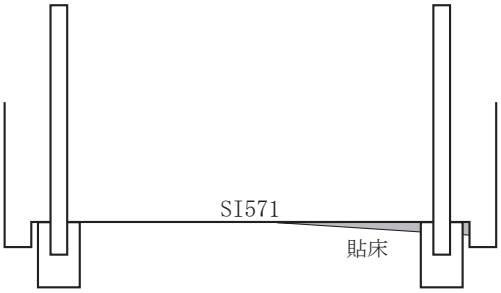
これらの遺物の構成は、平瓦５点、丸瓦２点である。本調査区では、瓦は竪穴住居跡のカマドのみで使用されており、特に丸瓦はＳＩ565のカマド下部暗渠のみで使用されている。また、（ａ）で検討したとおり、ＳＩ565構築段階でＳＩ571は埋めきっていないと言えることから、抜取り穴と周溝を埋めて平坦にしたＳＩ571が、ＳＩ565を構築するにあたり作業スペースとして利用されていたことは十分に有り得る。これらの出土状況が、ＳＩ565カマド構築部材の余剰分として単に遺棄されたものなのか、足場安定などのために意図的に配置されたものかは不明である。しかし、平瓦と丸瓦が出土している点を、ＳＩ565のカマド構築の際にＳＩ571と同様に平瓦を敷くか、周溝に丸瓦で蓋をするか模索するために用意された可能性を想定し、これらの瓦をＳＩ565カマドの構築部材と考える。

№14はＰ４の柱抜取り穴から倒立の斜位で出土した甕である。口縁部が若干割れている以外はほぼ完形であり、空洞の内部には底部に穿孔された孔から入った土がわずかに沈殿していた。この甕は、ＳＩ565床面には露出していなかったことから、ＳＩ565の附属施設として機能していたとは考えにくい。このことから、№14の甕は柱抜取り穴に廃棄された可能性がある。

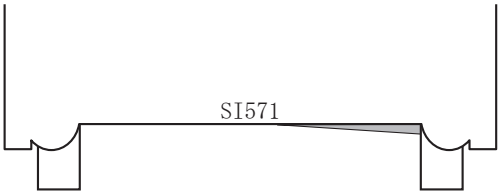
（ｃ）小結（第24図）

ＳＩ571の構築からＳＩ565の拡張に至る過程を第24図に模式的に示した。上記の検討結果をもとにすると、雨水対策をしながら作業の簡便化を図って合理的に住居を構築・拡張していた状況が伺える。本調査区内は、比高差約４ｍの急な南斜面であり、竪穴住居跡は最も標高が低い地点に位置している。雨天時には最も雨水が集中する場所であるため、十分な雨水対策が必要だったのだろう。

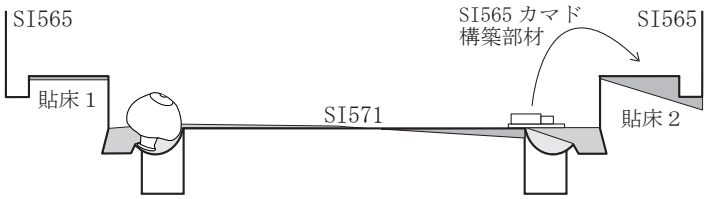
こうした観点から、ＳＩ565の南東隅に柱穴が検出されなかった理由も推測することができる。ＳＩ565貼床２は、比高差40㎝で北から南へと傾斜する浅い溝状の落ち込みを掘り、それを埋め戻して平坦な床面を作り出している。貼床２は、この落ち込みの傾斜面を利用して、標高の低い南へと水分を浸み込ませな



① ＳＩ571 の構築と居住

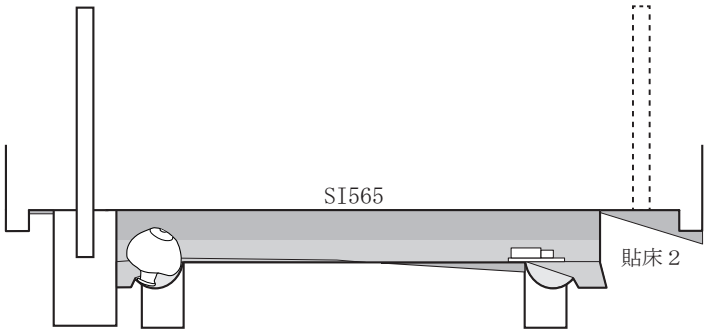


② ＳＩ571 の柱抜取りと上屋解体



③１ ＳＩ571 の柱抜取り穴と周溝の埋め戻し
③２ ＳＩ571 壁の拡張
→ＳＩ565 壁・床面の構築と貼床

④ ＳＩ571 の埋め戻し



⑤ ＳＩ565 の上屋構築・居住

第 24 図　ＳＩ 565・571 の構築手順模式図

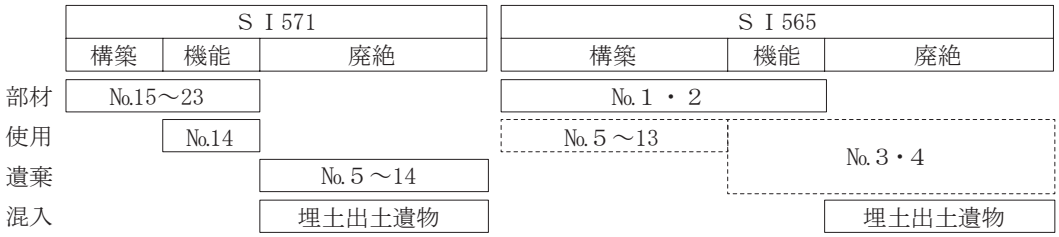
がら通すことを目的とした貼床の可能性がある。この場合、貼床２の場所に柱穴を掘って柱を立てると、浸みこんだ水分が柱穴にまで及び、柱の根元が腐食する可能性がある。こうした状況を回避するために、柱穴を掘らない何らかの方法で柱を立てていた可能性がある。

（２）遺構の時期について

（ａ）竪穴住居跡の時期について

①出土遺物の帰属について

上記の検討をもとにして、住居の構築から廃絶に至る過程と遺物の帰属の状況を第25図に示す。ＳＩ571の構築時期を示すのはカマドに敷かれた№.15 ～ 23平瓦である。№.14須恵器甕は、残存状態が極めて良好なことから、住居の機能時に使用され廃絶時に廃棄されたと考えられる。ＳＩ571の廃絶時期及びＳＩ565の構築時期を示すのは、ＳＩ565のカマド構築部材であり、ＳＩ571に遺棄された№.１・２・５～ 13の丸瓦・平瓦である。埋土出土遺物は、両遺構とも遺構外からの混入が想定できるが、ＳＩ571に関しては短期間で人為的に埋め戻されていることから、ある程度時期を反映している可能性があるだろう。



第 25 図　住居の構築過程と出土遺物の関係

②出土遺物について

・№.15 ～ 23平瓦

№.15・18平瓦（第７図－１）の凹面の痕跡は布目→ナデ、凸面の痕跡は縄叩き目→布目→ナデであり、ＩＡ類－ａタイプに比定できることから、政庁第Ｉ期に位置づけられる。№.10・20・21平瓦（第７図－２）の凹面の痕跡は布目→ナデ、凸面の痕跡は瓦の長軸に平行と斜行する縄叩き目→凹型台圧痕と部分的な布目であり、製作技法としてはⅡＢ類－ａ1タイプに類する。凸面にも布目が認められるものは政庁第Ⅱ期瓦の生産地とされている仙台市枡江遺跡から出土しているため（仙台市教育委員会1980）、政庁第Ⅱ期の瓦と推定できる。№.17・19・22平瓦（第８図－１）の凹面の痕跡は布目→ナデ、凸面の痕跡は瓦の長軸に平行する縄叩き目→叩き目のつぶれであり、ⅡＢ類－ａ2タイプに比定できる。

・№.１・２・５～７・９～ 13瓦

№.６平瓦（第９図－３）は凸面に凹型台側端部の圧痕が見られ、ⅡＢ類－ｂタイプに比定できることから政庁第Ⅲ期に位置づけられる。№.12丸瓦（第９図－２）はⅡＢ類－ａタイプで、凸面に占の刻印が押印されていることから政庁第Ⅱ期の瓦と考えられる。№.２丸瓦（第12図－１）はⅡＢ類－ｂタイプに類し、玉縁に矢羽根状の叩き目が見られ、政庁第Ｉ期の瓦と推定する。

・ＳＩ571埋土出土遺物

坏類の破片数については、１層は土師器：須恵器が15：３、２層は４：０と土師器が多数を占める。土師器坏の中で明確にＢ類と判断できるものは、１層から出土した第９図－５の高台付坏の１点のみであり、そのほかは、器厚が厚くＡ類と推定される。

③時期について

ＳＩ571の構築時期は、カマド燃焼部に政庁第Ⅱ期瓦が使用されていることから、８世紀中葉以降と言える。また、住居の廃絶時期は、廃絶直後に人為的に埋められた１層から土師器坏Ｂ類が出土していることや、周溝上部にＳＩ565構築部材の政庁第Ⅲ期瓦が残されていることから、８世紀後葉以降に埋められたと推定できる。一方、１層出土の土師器坏はＡ類が主体的であり、790年以前の８世紀後葉と位置づけられている市川橋遺跡ＳＤ1184やＳＸ1351出土遺物の傾向に類似している（多賀城市教育委員会2003）。また、ＳＩ565出土遺物も含めて須恵器坏Ｖ類が出土していないことも特徴のひとつとして指摘できるだろう。

これらのことから、ＳＩ571は８世紀中葉以降に構築され、後葉頃には埋め戻されたと考える。ＳＩ565は、（１）の検討からＳＩ571の廃絶直後に構築され、機能していたと考える。

（ｂ）その他の遺構について

ＳＤ559は埋土中から土師器坏ＢⅡ類や土師器甕Ｂ類が出土していることから、８世紀後葉以降の年代が考えられる。それ以外の遺構については、出土遺物は古代のものが主体であるが、ほとんどが破片であるため詳細な年代は不明である（註）。

参考文献

仙台市教育委員会　『枡江遺跡発掘調査報告書－造瓦所の調査－』仙台市文化財調査報告書第18集　1980
多賀城市教育委員会　『市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ－』多賀城市文化財調査報告書第70集　2003
宮城県多賀城跡調査研究所　『多賀城跡　政庁跡本文編』多賀城市史別巻３　1984
宮城県多賀城跡調査研究所　『多賀城跡　政庁跡図録編』多賀城市史別巻２　1985

註：これらの溝跡については、Ⅱ層が上部を覆っているものが多い。斜面に構築されているが故に埋土が流出したことが要因と考えられるため、検出面出土遺物は遺構の年代を直接反映していないと判断した。

調査区の位置（南西より）

ＳＩ571検出状況（西より）

ＳＩ571掘り下げ状況（西より）

写真図版１

ＳＩ571カマド（西より）

ＳＩ571南東側遺物出土状況
（北西より）

ＳＩ571北東側遺物出土状況
（南西より）

写真図版２

ＳＩ565検出状況（北西より）

ＳＩ565カマド検出状況
（西より）

ＳＩ565掘り下げ状況
（北西より）

写真図版３

ＳＩ565カマド（北西より）

ＳＩ565カマド断ち割り状況
（西より）

ＳＤ559検出状況
（西より）

写真図版４

ＳＤ560、ＳＫ566検出状況
（南東より）

ＳＫ566断面（南より）

ＳＤ562・563・564・567検出状況
（西より）

写真図版５

1　須恵器・甕（ＳＩ571Ｐ４柱抜取り穴出土）　R27

2　須恵器・甕（ＳＩ571Ｐ４柱抜取り穴出土）　R27

3　須恵器・蓋（ＳＩ571　２層出土）　R28

4　平瓦（ＳＩ571カマド火床面出土）　Ｒ５

写真図版６

1　平瓦・凸面（ＳＩ571カマド火床面出土）　Ｒ８

2　平瓦・凹面（ＳＩ571カマド火床面出土）　Ｒ８

3　丸瓦・凸面（ＳＩ571周溝埋土上部出土）　R11

4　丸瓦・凹面（ＳＩ571周溝埋土上部出土）　R11

写真図版７

1　丸瓦・凸面（ＳＩ571周溝埋土上部出土）　R10

2　丸瓦・凹面（ＳＩ571周溝埋土上部出土）　R10

3　丸瓦・凸面（ＳＩ565カマド下部出土）　Ｒ１

4　丸瓦・凹面（ＳＩ565カマド下部出土）　Ｒ１

写真図版８

1　丸瓦・凸面（ＳＩ565カマド下部出土）　Ｒ２

2　丸瓦・凹面（ＳＩ565カマド下部出土）　Ｒ２

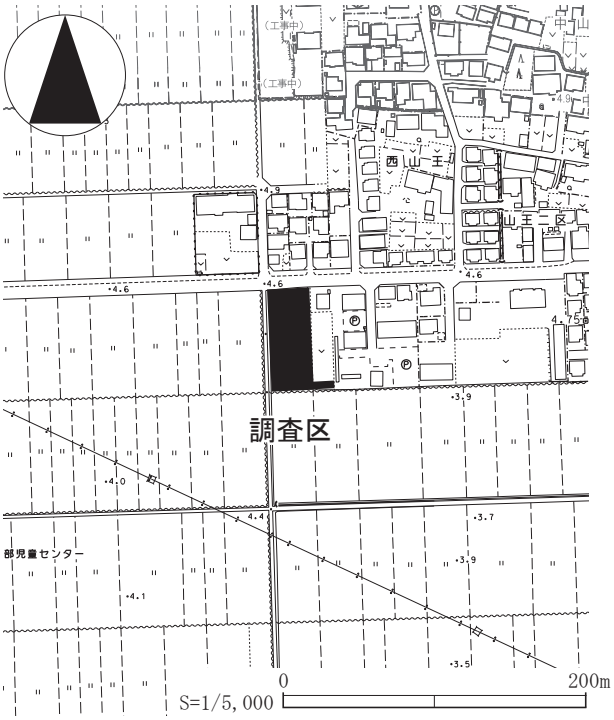
3　角柱状製品（ＳＩ565カマド前面出土）

写真図版９

Ⅲ　山王遺跡第139次調査

１　遺跡の概要

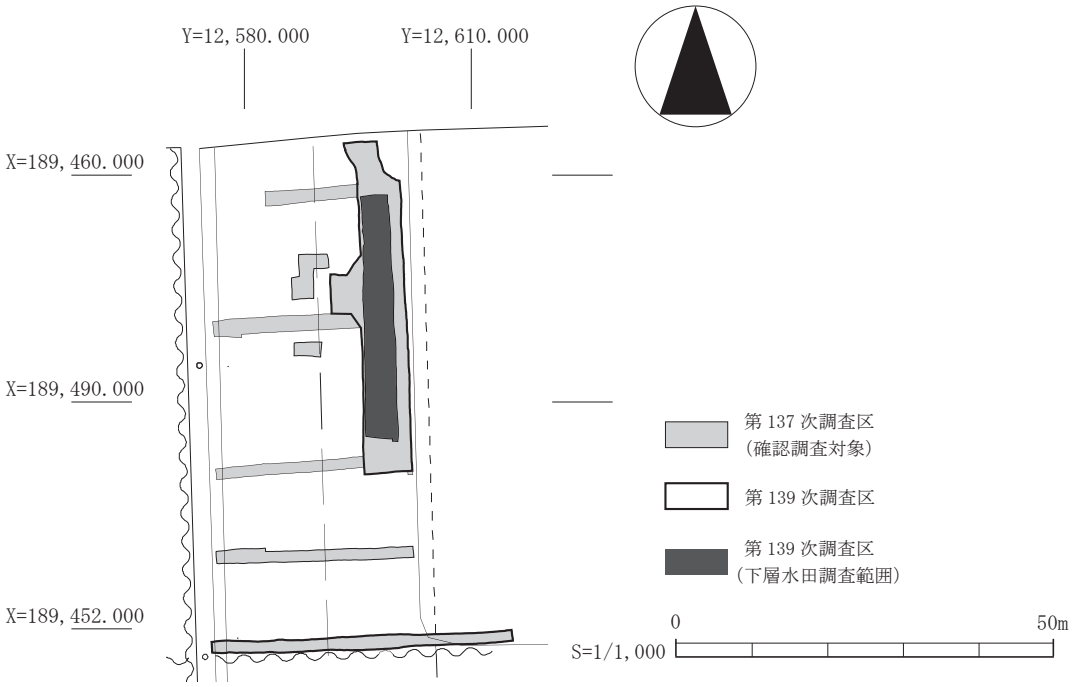
山王遺跡は標高３～４ｍの微高地に立地し、その範囲は東西約２㎞、南北約１㎞の広さを有する。これまでの調査で弥生時代中期頃の水田跡や古墳時代中期～後期の集落跡、古代の方格地割、中世の屋敷跡などが発見されている。このうち、古代の方格地割は南北大路と東西大路の二つの幹線道路を基準とし、東西・南北の直線道路によっておよそ１町四方の区画を造成したものである。これによって形成されたまち並みからは、上級役人の邸宅や中・下級役人の住まいなどを構成する建物跡や井戸跡が多数発見されている。



第１図　調査区位置図

２　調査に至る経緯と経過

本件は、宅地造成計画に伴う本発掘調査である。平成25年４月５日に地権者より当該地区における宅地造成計画と埋蔵文化財とのかかわりについての協議書が提出された。計画では、開発の対象面積が約2,500㎡と広範囲で、また、側溝を伴う南北道路内に排水管敷設のための掘削が1.５～2.５ｍ、擁壁設置の掘削が1.1ｍであった。周辺地区の調査では、遺構検出面までの深さが約20㎝のため、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、事前に遺構の分布状況・遺構検出面までの深さを把握する目的で、確認調査



第２図　第 139 次調査範囲

（第137次調査）を実施し、本発掘調査に係る協議を行うこととなった。

調査については、11月13日より第137次調査として開始し、現代の水田耕作土直下で、古代の遺構面（Ⅳ層）を検出し、ほぼ全域にわたり溝跡や土壙を発見した。さらにこの下層の90㎝下で水田耕作土と見られる黒色土壌を確認した。この調査成果をもとに地権者と本発掘調査について協議を行った結果、17日から第137次調査に引き続いて第139次調査として実施することとなった。調査は遺構を発見した７箇所の内、掘削が及ぶ１区（道路部分）と２区（擁壁部分）について行った。検出遺構については、新旧関係を確認しながら埋土を掘り下げた。年末・年始の休みのため、20日から調査を中断し、翌年１月８日に再開した。掘り下げた遺構は順次写真撮影を行い、平面・断面図を作成した。18日には全景写真を撮影し、この面での調査を終了した。１月21日より下層の調査に入り、重機を使用して堆積土を除去した。翌日より遺構検出作業に入り、Ⅵ層を耕作土とする水田跡を調査区全域で確認した。23日には畦畔検出状況の写真撮影を行う。その後、水田跡を覆っている堆積土を掘り下げ、田面を検出した。24日、写真撮影後、平面図作成のための基準点を設定し、平面図作成に取り掛かる。30日には土層断面図の作成及び註記、平面図の作成を終えた。31日、重機を使用して埋め戻し作業を行って、野外調査を終了した。

３　調査成果

（１）　層序

調査区内の層序は、以下のとおりである。なお、２区の東、南側で厚さ20 ～ 70㎝の盛土が堆積する。

Ⅰ　層：調査区全域で確認した黒褐色粘土で、厚さは20㎝前後である。現代の水田耕作土である。

Ⅱ１層：２区の中央部を除く東・西側で確認した。厚さは２～４㎝で、酸化鉄を多く含んだ黒褐色土である。

Ⅱ２層：２区の西半部で確認した。厚さ２～８㎝で、砂や酸化鉄を含んだ固くしまった黒色粘土である。

Ⅲ　層：２区の西半部で確認した。厚さ２～ 13㎝で、灰白色火山灰層を層状もしくはブロック状に混入した暗オリーブ褐色土である。溝跡の一部は本層に覆われている。

Ⅳ　層：砂を含んだ黄褐色粘土で、厚さは20 ～ 30㎝である。古代の遺構検出面となっている。

Ⅴ１層：調査区東側に堆積する酸化鉄を含んだ灰オリーブ粘土で、厚さは２～ 10㎝である。

Ⅴ２層：酸化鉄を含んだ黄褐色粘土で、厚さは35 ～ 45㎝である。

Ⅴ３層：灰オリーブ砂で、厚さは５～ 13㎝である。粒子は細かくしまっている。

Ⅴ４層：黒褐色粘土で、厚さは７～ 18㎝である。粒子は細かくしまっている。

Ⅴ５層：灰オリーブ砂で、厚さ２～ 14㎝である。

Ⅴ６層：オリーブ黒色粘土で、厚さは９～ 23㎝である。

Ⅵ　層：起伏のある黒色粘土で、厚さは６～ 21㎝である。古墳時代前期の水田耕作土である。

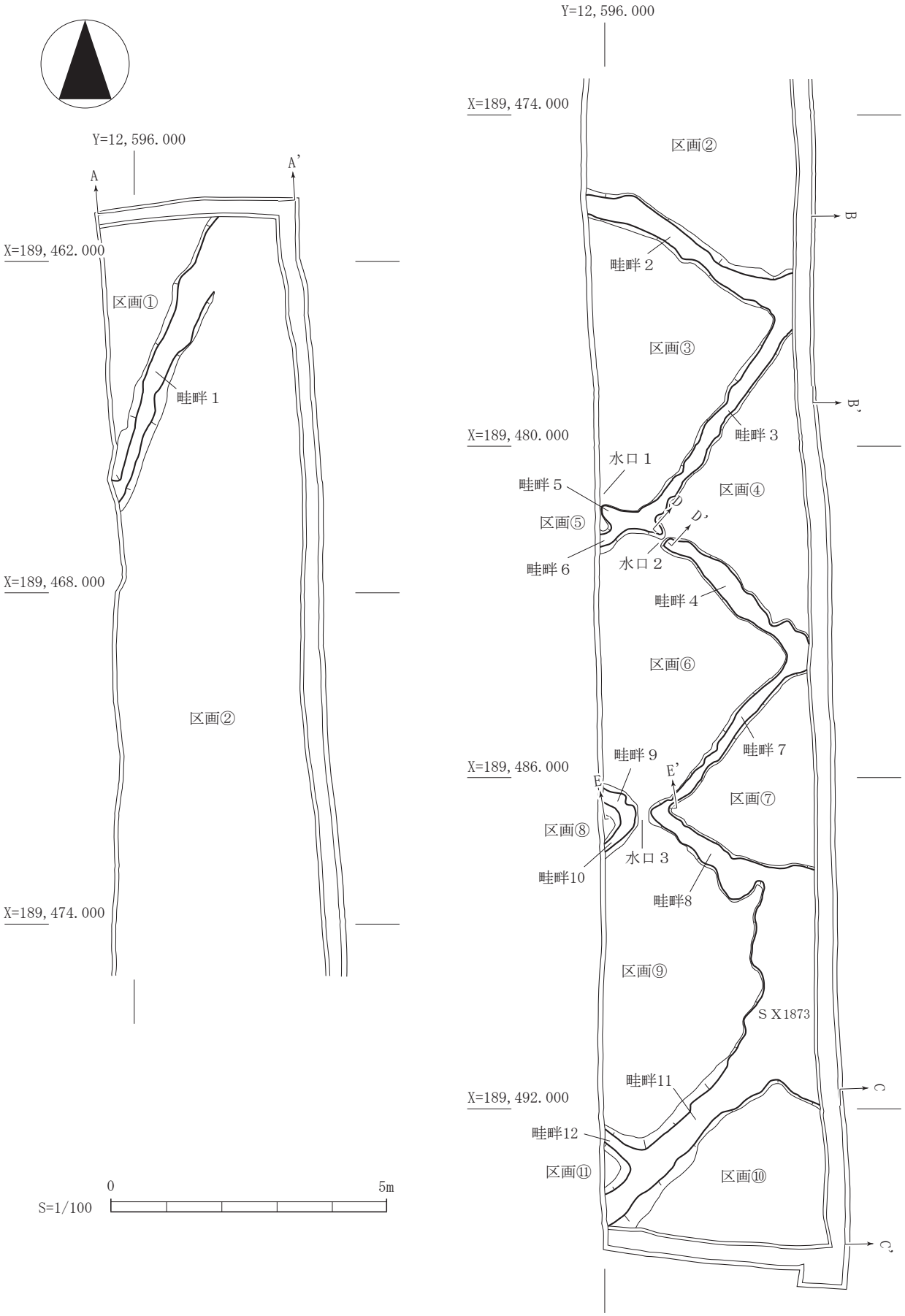
Ⅶ　層：凝灰岩ブロックが層状に堆積する灰オリーブ土で、厚さは３～５㎝である。

Ⅷ　層：粒子の粗い砂を主体とした黒色土で、厚さは10 ～ 20㎝である。

Ⅸ　層：粒子の粗い砂を主体とした灰色土で、今回の調査で確認した最下層ある。

（２）　発見遺構と遺物

今回の調査では、Ⅵ層で古墳時代前期の水田跡を確認し、Ⅳ層上面で溝跡、土壙などを発見した。



第３図　ＳＸ 1872 水田跡平面図

Ⅵ層発見遺構

ＳＸ1872水田跡（第３～６図）

【水田域】Ⅵ層を耕作土とする水田跡を１区全域で確認した。

【検出状況】Ⅴ層を掘り下げて行く過程で畦畔12条、水口３箇所を検出した。

【水田の区画と耕作土】畦畔によって区画される水田11区画（区画①～⑪）を確認した。いずれも平面形は方形を基調としている。このうち区画⑥は、東西・南北の規模がおよそ明らかである。南北約3.8m、東西約3.7mの略正方形で、面積は約14㎡と想定される。そのほか、南北の規模が明らかなものは区画③があり、長さ約4.4mである。東西の規模が明らかなものは区画②・⑨があり、前者が約８m、後者が約3.7mである。なお、区画②では畦畔が南北約８mにわたり検出されず、南北方向に広い区画となっている。この一帯については、元々畦畔がなかったか、あるいは残存状況が悪く検出できなかった可能性がある（註１） 耕作土は黒色粘土で、厚さは６～21㎝である。下面には耕作時の痕跡と考えられる著しい土層の乱れが認められる。

【畦畔の規模と方向】12条検出した（畦畔１～12）。いずれも土盛り畦畔である。残存する規模は上端幅６～96㎝、高さ２～11㎝である。このうち幅及び高さから、畦畔１・11が本水田の基軸となる可能性がある。方向は南北方向のものが北で42～46度東に偏しており、東西方向のものは東で28～42度南に偏している。北端の区画①と南端の区画⑩の比高差を見ると、区画⑩が９㎝低くなっており、北から南に緩やかに傾斜している。

【水口】区画③南東隅（水口１）、区画④南西隅（水口２）、区画⑥南隅（水口３）の３箇所で発見した。規模を確認できたのは水口２・３であり、水口２は上幅約15㎝、深さ４㎝、水口３は上幅約32㎝、深さ６㎝である。水口１・３の底面は北から南に傾斜している。

【遺物】区画④耕作土から、非ロクロ調整の土師器小型壺（第６図）が出土した。

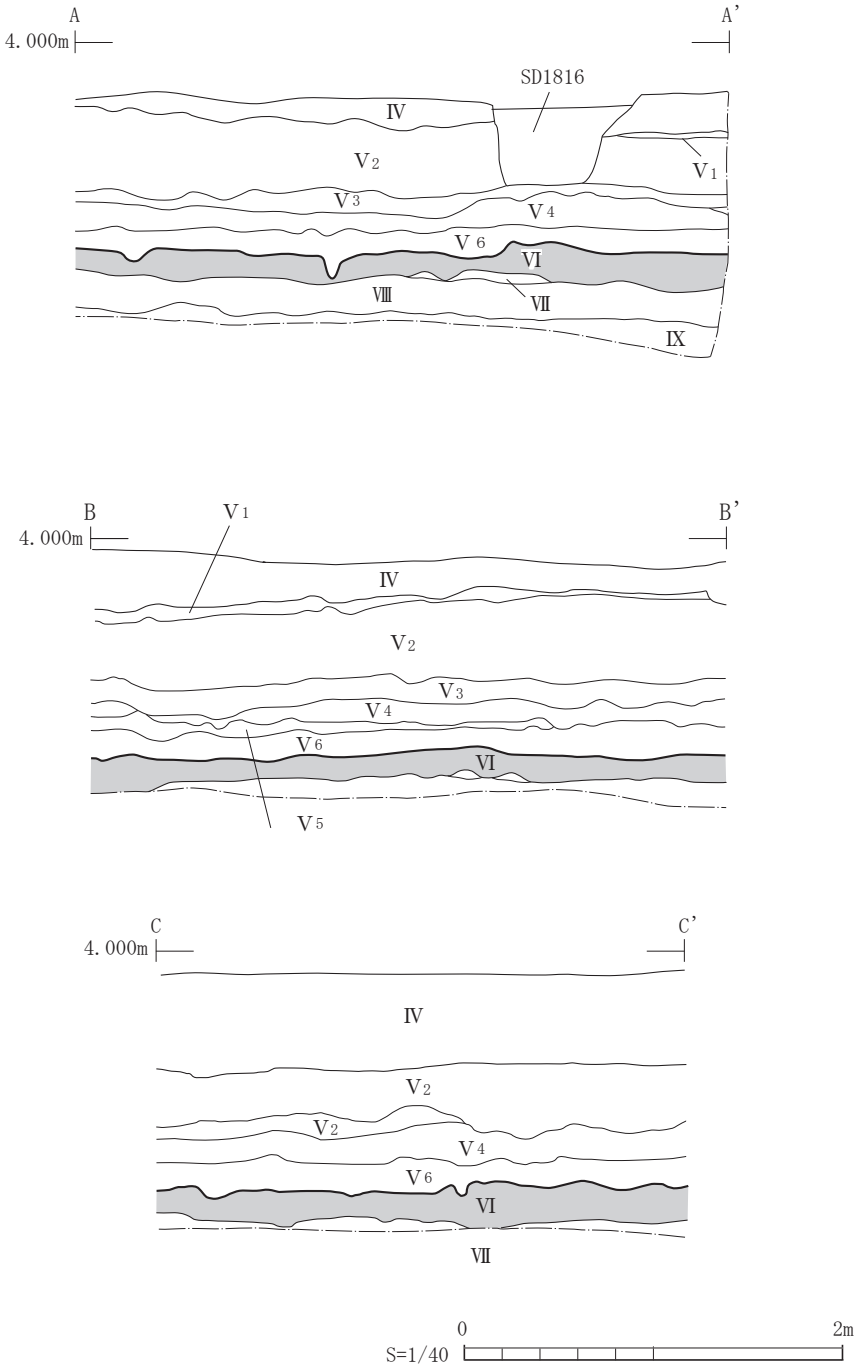
表１　畦畔計測値

番号	検出長	方　向	上端幅（㎝）		下端幅（㎝）		水田面からの比高差（㎝）
			最小	最大	最小	最大	
1	5.7m以上	N-42°　27′　-E	16	65	47	77	2～11
2	4.1m以上	E-28°　52′　-S	20	51	41	68	—
3	4.9m以上	N-43°　08′　-E	12	31	22	38	2～6
4	3.7m	E-42°　09′　-S	15	42	23	52	3～4
5	0.6m以上	—	20	33	22	35	4～5
6	0.8m以上	—	17	20	31	40	5～6
7	4.4m	N-46°　06′　-E	6	26	16	28	5～8
8	2.8m以上	E-30°　16′　-S	24	73	30	85	2～4
9	0.8m以上	—	20	28	50	51	4～6
10	0.8m以上	—	12	27	26	45	4～6
11	3.8m以上	N-45°　05′　-E	37	96	70	105	3～10
12	0.8m以上	—	20	30	35	70	8～9

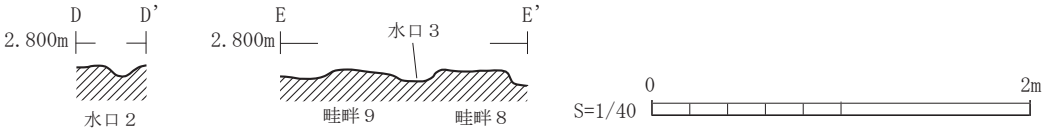
註１：区画②については、田面の調査時に若干掘り下げてしまったため、厳密な意味での標高値を計測することができなかった。このため、表２「水田面の標高値と傾斜」には記載していない。

表２　水田面の標高値と傾斜

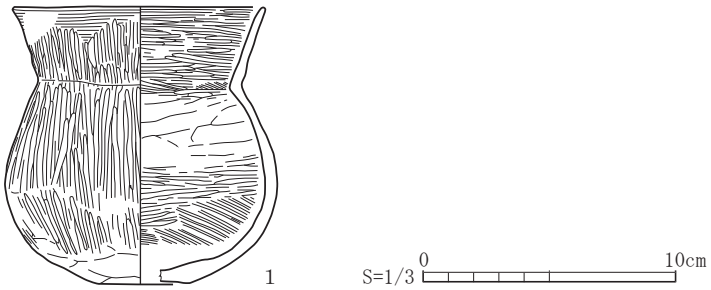
	北側	南側	平均		北側	南側	平均
区画①	2.66m	2.65m	2.66m	区画⑦	2.58m	2.59m	2.59m
区画②	—	—	—	区画⑧	—	—	—
区画③	2.62m	2.66m	2.64m	区画⑨	2.59m	2.60m	2.60m
区画④	2.61m	2.60m	2.61m	区画⑩	2.58m	2.57m	2.58m
区画⑤	—	—	—	区画⑪	—	—	—
区画⑥	2.62m	2.60m	2.61m				



第４図　１区北・東壁断面図



第５図　水口２・３断面図



（単位：cm）

番号	種類	遺構 層位	特　徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備　考
			外面	内面						
1	土師器・壺	区画④ Ⅵ層	ヨコナデ後縦方向ヘラミガキ・体部下半部ヘラケズリ	ヨコナデ・ハケメ後ヘラミガキ、ヘラケズリ・ハケメ後ヘラミガキ	(10.0) 8/24	(4.9) 12/24	11.0	5-1	R5	非ロクロ

第６図　ＳＸ 1872 水田跡出土遺物

ＳＸ1873（第３図）

【位置･形態】１区南端で発見したⅥ層を盛って造った方形状の高まりである。ＳＸ1872水田跡の畔畦８・11と接続する。

【規模】南北4.2m以上、東西1.6m以上であり、調査区東側にさらに広がっている。

【遺物】出土していない。

Ⅳ層上面発見遺構

ＳＤ1816溝跡（第７～12・20図）

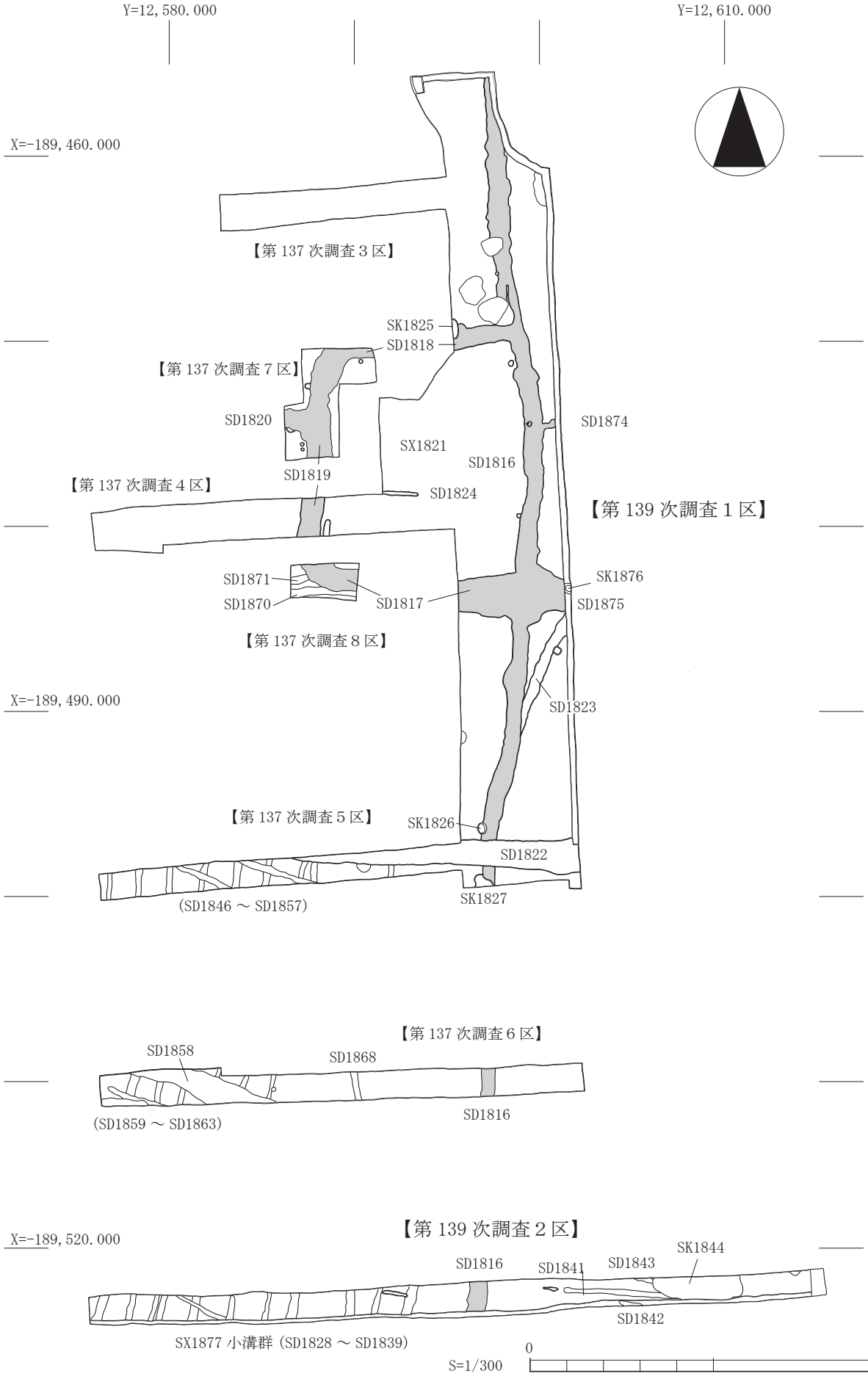
【位置】１・２区で発見した南北方向の溝跡であり、１区中央部から南側で緩やかに湾曲している。１区中央部で東西方向のＳＤ1817・1818が西側に接続し、同じく中央部で東西方向のＳＤ1874・1875が東側に接続する。

【重複】ＳＤ1822・1823、ＳＫ1826・1827と重複し、ＳＤ1822，ＳＫ1826・1827より古く、ＳＤ1823より新しい。

【方向・規模】１区北端と２区南端で測ると、北で約10度東に偏している。規模は２区も含めると長さ67m以上、上幅0.64～1.6m、下幅７～40㎝、深さ21～45㎝である。

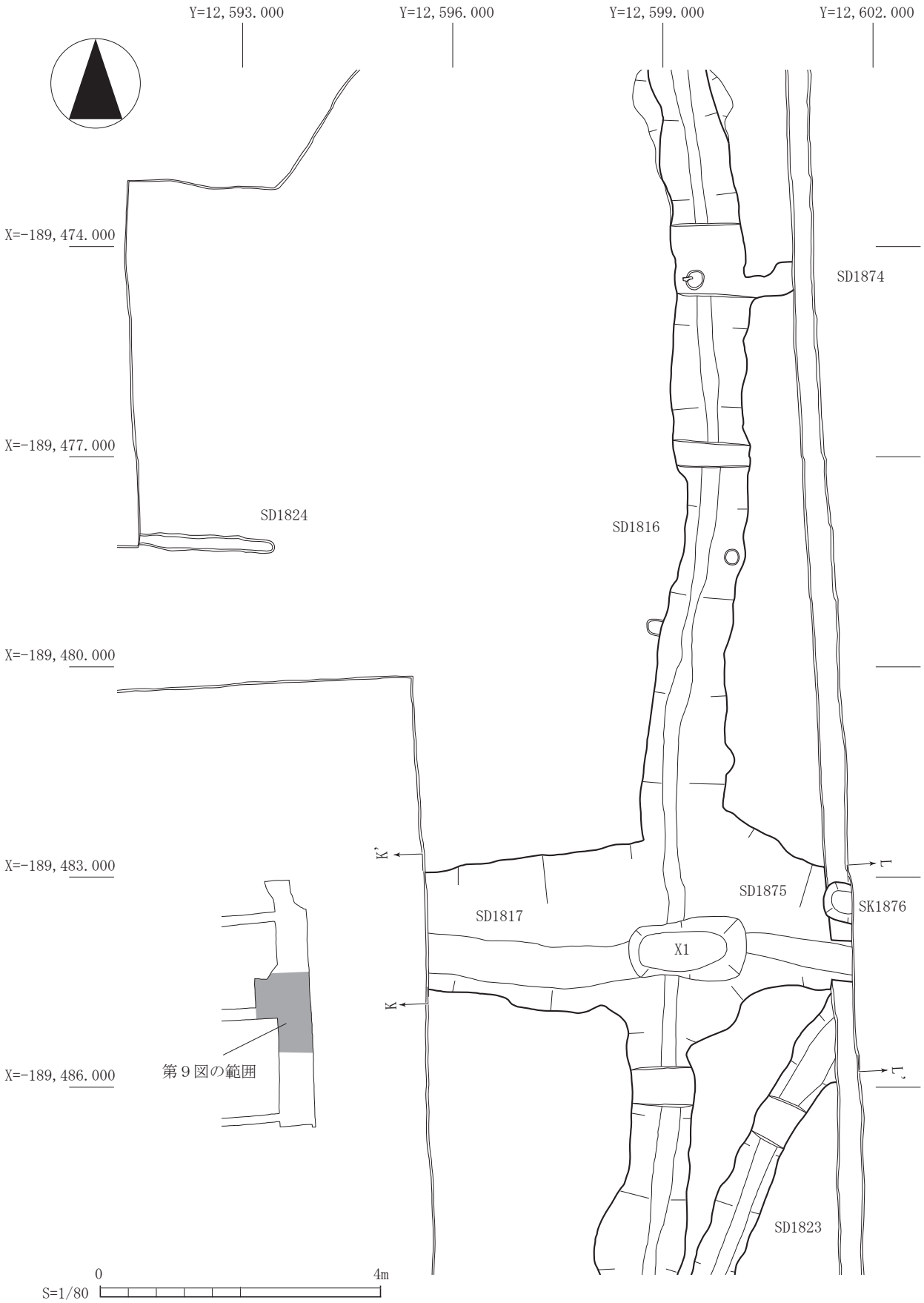
【埋土】残存状況の良い北側で見ると、５層に分けられる。１層は黄褐色粘土、２層は浅黄色土、３層は黒褐色粘土、４層は暗灰黄色粘土、５層はオリーブ褐色土がブロック状に混入する砂層である。このうち１層には灰白色火山灰が混入している。

【壁・底面】壁はおよそ垂直気味に立ちあがっているが、大きく外反するところや、緩やかに立ちあがるところもあり一様ではない。底面は多くの凹凸を伴いながら、丸味を帯びて窪んでいる。１区北端部と２区南端部の比高差は32㎝である。

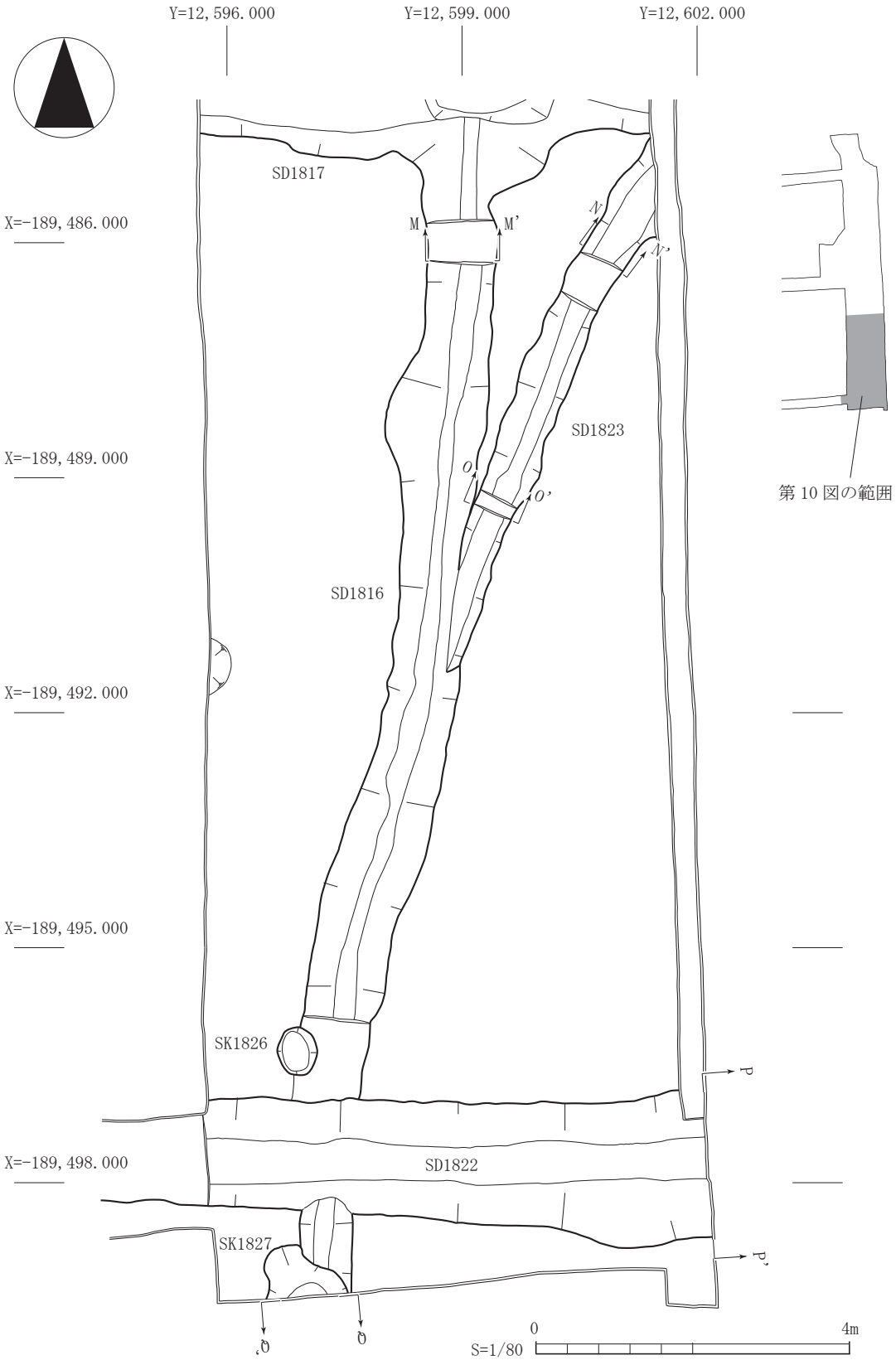

Y=12,580.000
Y=12,610.000
X=-189,460.000
【第 137 次調査３区】
SK1825
SD1818
【第 137 次調査７区】
SD1820
SD1819
SX1821
SD1816
SD1874
【第 137 次調査４区】
SD1824
【第 139 次調査１区】
SD1871
SD1870
SD1817
SK1876
SD1875
【第 137 次調査８区】
X=-189,490.000
SD1823
【第 137 次調査５区】
SK1826
SD1822
SK1827
(SD1846 ～ SD1857)
【第 137 次調査６区】
SD1858
SD1868
SD1816
(SD1859 ～ SD1863)
【第 139 次調査２区】
X=-189,520.000
SD1816
SD1841
SD1843
SK1844
SD1842
SX1877 小溝群 (SD1828 ～ SD1839)
S=1/300
0
20m

第７図　遺構配置図

第８図　１区遺構平面図（１）

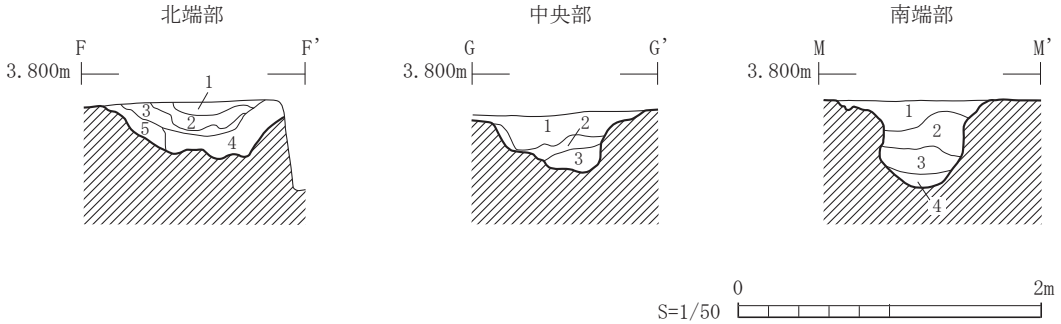


第９図　１区遺構平面図（２）

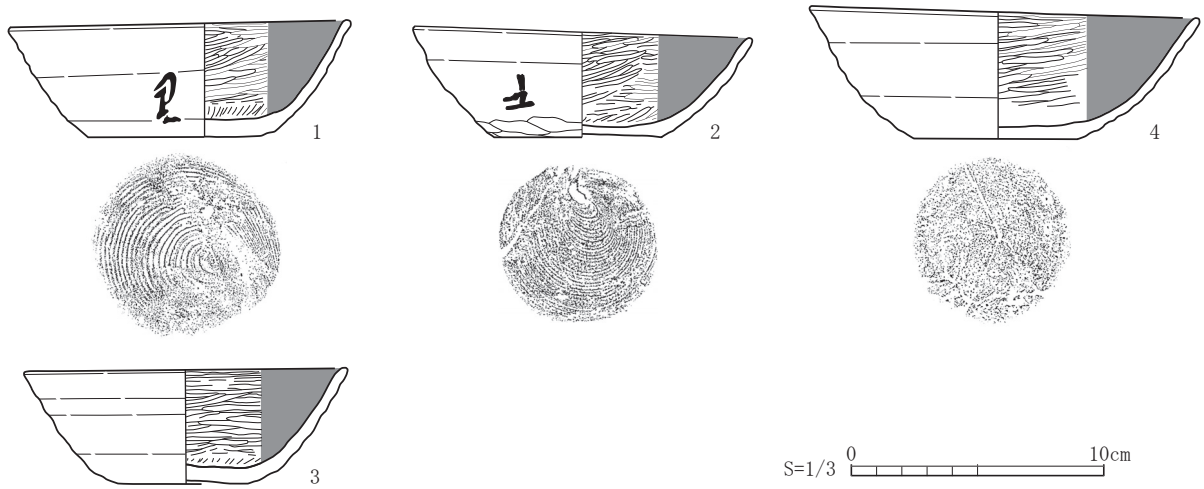


第10図　1区遺構平面図（3）

【その他】ＳＤ1817及びＳＤ1818の接続部底面で土壙状の落ち込みを確認した（ＳＤ1817接続部：Ｘ１、ＳＤ1818接続部Ｘ２）。Ｘ１は東西方向に細長い落ち込みであり、規模は東西1.68m、南北38㎝、深さ44㎝である。Ｘ２は南北方向に長い落ち込みであり、規模は南北1.67m、東西38㎝、深さ51㎝である。いずれも底面は丸味を帯び、壁は急角度で立ち上がる。埋土はＳＤ1816と同じで、同時に埋まっている。
【遺物】土師器坏（ＢＩｃ・ＢⅡｃ・ＢＶ類）が出土している。



第 11 図　ＳＤ 1816 断面図



（単位：cm）

番号	種類	遺構層位	特　徴		口径残存率	底径残存率	器高	写真図版	登録番号	備　考
			外面	内面						
1	土師器・坏	1層下層	ロクロナデ 底部：回転糸切り／回転ヘラケズリ調整	ヘラミガキ、黒色処理	13.6 16/24	7.4 24/24	4.7	5-2	R1	ＢＩｃ類 墨書「□」
2	土師器・坏	1層下層	ロクロナデ 底部：回転糸切り/手持ちヘラケズリ調整	ヘラミガキ、黒色処理	13.4 12/24	6.6 24/24	6.6	5-3	R2	ＢⅡｃ類 墨書「□」
3	土師器・坏	1層下層	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ヘラミガキ、黒色処理	(12.8) 8/24	4.9 24/24	4.9	5-4	R3	ＢＶ類
4	土師器・坏	１層	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ヘラミガキ、黒色処理	15.5 14/24	6.5 24/24	6.5	5-5	R4	ＢＶ類 底部「×」 ヘラ描き

第 12 図　ＳＤ 1816 出土遺物

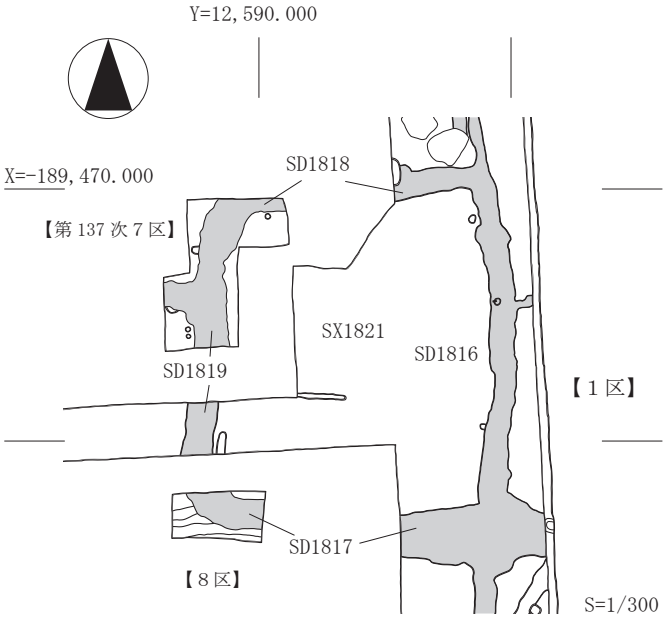
ＳＸ1821（第７・13・14図）

【位置】１区中央部で発見した、方形の区画である。

【重複】ＳＫ1825と重複し、それよりも古い。

【区画】東辺がＳＤ1816、南辺がＳＤ1817、西辺がＳＤ1819（確認調査：第137次）、北辺がＳＤ1818によって区画されている。第137次で検出したＳＤ1819を除き、埋土の掘り下げを行った。

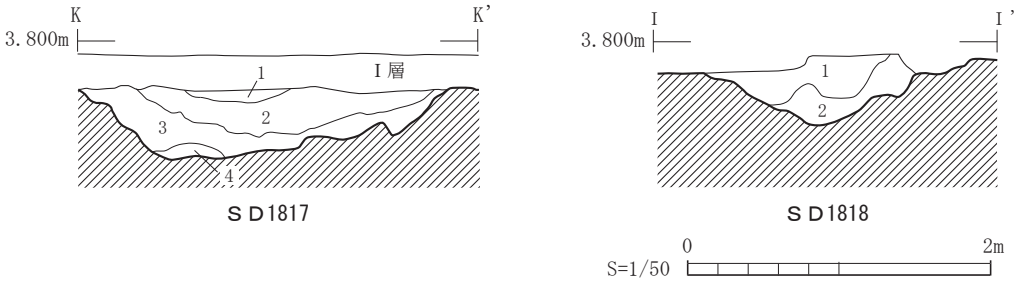
【方向・規模】方向は、北辺を区画するＳＤ1818で測ると、東で約４度北に偏している。各辺の規模は東辺が約15.3m、南辺が約10m、西辺が約13m、北辺が約10.5mである。溝幅は上幅0.8～2.3m、深さは22～40㎝である（最も規模の大きい南辺で測ると、上幅2.3m、下幅60㎝、深さ40㎝である）。



第13図　ＳＸ1821模式図

【埋土】南辺で４層、北辺で２層に分けられる。南辺では１層が浅黄色土、２層が黒褐色粘土、３層が暗灰黄色粘土、４層が砂を主体としたオリーブ褐色土であり、１層に灰白色火山灰が自然堆積している。北辺では１層が黒褐色粘土、２層が暗灰黄色粘土であり、１層に灰白色火山灰がブロック状に混入している。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面は丸味を帯びている。



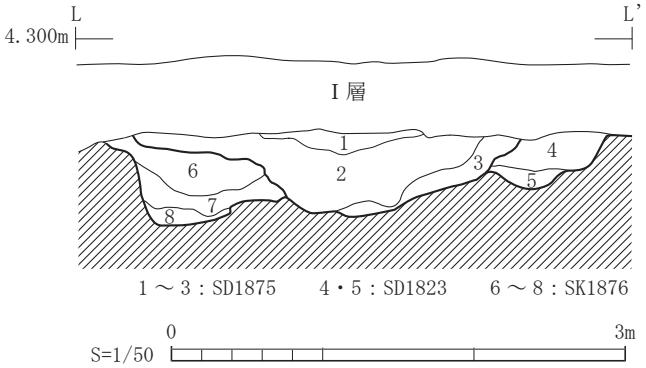
第14図　ＳＸ1821区画溝断面図

【出土遺物】ＳＤ1817から土師器坏（ＢⅡ類）、須恵器坏（Ⅲ類）、須恵系土器坏、ＳＤ1818から土師器甕、須恵器坏（Ⅲ類）、平瓦（ⅡＢ類）が出土している。

ＳＤ1875溝跡（第７・９・15図）

【位置】１区中央部の東壁際で発見した東西方向の溝跡である。西側でＳＤ1816に接続する。

【重複】ＳＤ1823、ＳＫ1876と重複し、それらより新しい。



第15図　ＳＤ1875・1823、ＳＫ1876断面図

【方向・規模】方向は東西の発掘基準線に沿っている。東側は調査区外に延びており、上幅1.74. ～ 3.36 m、下幅28 ～ 40㎝、深さは東壁で41 ～ 44㎝である。

【埋土】３層に分けられる。１・２層が黒褐色粘土、３層が黄褐色粘土であり、２層に灰白色火山灰が混入している。

【壁・底面】北側は垂直気味、南側は緩やかに立ち上がる。底面には凹凸が認められる。

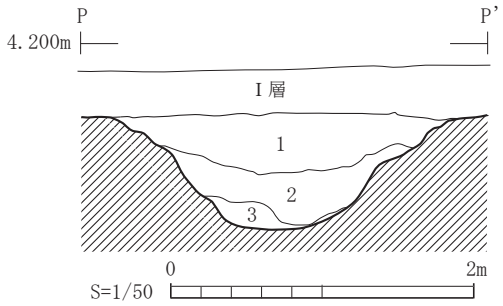
【遺物】出土していない。

ＳＤ1822溝跡（第７・10・16図）

【位置】１区南端部で発見した東西方向の溝跡であり、東・西側は調査区外に延びている。

【重複】ＳＤ1816と重複し、それより新しい。

【方向・規模】方向は東で約１度南に偏している。規模は長さ15m以上、上幅1.35 ～ 1.87m、下幅42 ～ 53㎝、深さ60㎝である。



第 16 図　ＳＤ 1822 断面図

【埋土】３層に分けられる。１層は酸化鉄を含んだオリーブ褐色粘土、２層は黒褐色粘土、３層は黄褐色土がブロック状に混入する暗オリーブ褐色粘土である。

【壁・底面】壁はやや凹凸があるものの、緩やかに立ち上がっている。底面は平坦であり、東西の比高はほとんどない。

【遺物】出土していない。

ＳＤ1823溝跡（第７・９・10・15・17図）

【位置】１区南側で発見した、南北方向の溝跡である。

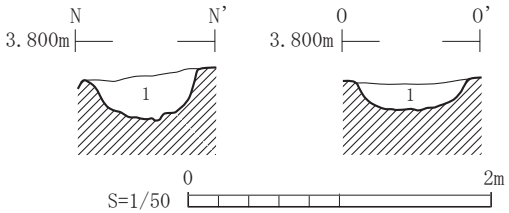
【重複】ＳＤ1816・1875と重複し、それらより古い。

【方向・規模】方向は北で約25度東に偏している。規模は長さ６ｍ以上、上幅40 ～ 65㎝、下幅19 ～ 30㎝、深さ25㎝である。

【埋土】２層に分けられる（第15図）。１層は酸化鉄を含む砂質に富んだ黒色粘土、１層は黄褐色土である。

【壁・底面】壁は垂直気味に立ち上がる。底面はやや凹凸があり、北から南に向かって緩やかに低くなっている。

【遺物】須恵器坏が出土している。



第 17 図　ＳＤ 1823 断面図

ＳＤ1824溝跡（第７・９図）

【位置】１区中央部で発見した、東西方向の溝跡である。

【方向・規模】方向は西で約３度北に偏している。西側は調査区外に延びている。長さは1.9m以上で、上幅14 ～ 23㎝、下幅10 ～ 16㎝、深さ２㎝である。

【埋土】黒褐色粘土の単層である。

【壁・底面】壁は垂直気味に立ち上がり、底面は平坦である。

【遺物】出土していない。

ＳＤ1874溝跡（第７・９図）

【位置】１区中央部の東壁際で発見した、東西方向の溝跡である。西側でＳＤ1816と接続する。

【方向・規模】方向は東で約10度北に偏している。東側は調査区外に延びており、長さ１ｍ以上、幅14～23㎝である。

【埋土】灰白色火山灰が混入する黒褐色粘土である。

【遺物】出土していない。

ＳＫ1876土壙（第７・９・15図）

【位置】１区中央部の東壁際で発見した。

【重複】ＳＤ1875と重複し、それよりも古い。

【平面形・規模】方形と推定される。規模は南北53㎝、東西45㎝以上、深さ50㎝である。

【埋土】埋土は３層に分けることができる。１層は黄褐色土がブロック状に混入する黒褐色粘土、２層は黄褐色土が多量に混入するオリーブ褐色土、３層が黄褐色土である。

【壁・底面】壁はおよそ垂直に立ち上がっている。底面は若干起伏が認められ、北側に傾斜している。

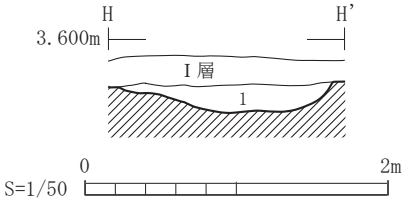
【遺物】出土していない。

ＳＫ1825土壙（第７・８・18図）

【位置】１区の北側の西壁際で発見した。

【重複】ＳＤ1818と重複し、それより新しい。

【平面形・規模】大部分が調査区外にあるため全容は不明だが、方形と推定される。規模は南北1.1ｍ、東西30㎝以上、深さ15㎝以上である。



第 18 図　ＳＫ 1825 断面図

【埋土】酸化鉄や地山ブロックをわずかに含むオリーブ黒色粘土である。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面には凹凸が認められる。

【遺物】施釉陶器平碗（古瀬戸）、染付磁器皿（有田）の小片が出土している。

ＳＫ1826土壙（第７・10図）

【位置】１区南端部で発見した。

【重複】ＳＤ1816と重複し、それより新しい。

【平面形・規模】南北に長い惰円形である。規模は南北60㎝、東西50㎝、深さ８㎝である。

【埋土】２層に分けられる。上層は黄褐色土が混入する黒褐色土、下層は黒褐色土が縞状混入する黄褐色粘質土である。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。

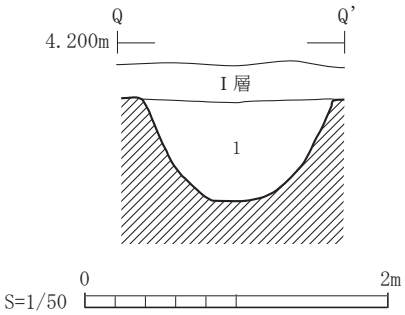
【遺物】出土していない。

ＳＫ1827土壙（第７・10・19図）

【位置】１区南端部の南壁際で発見した。

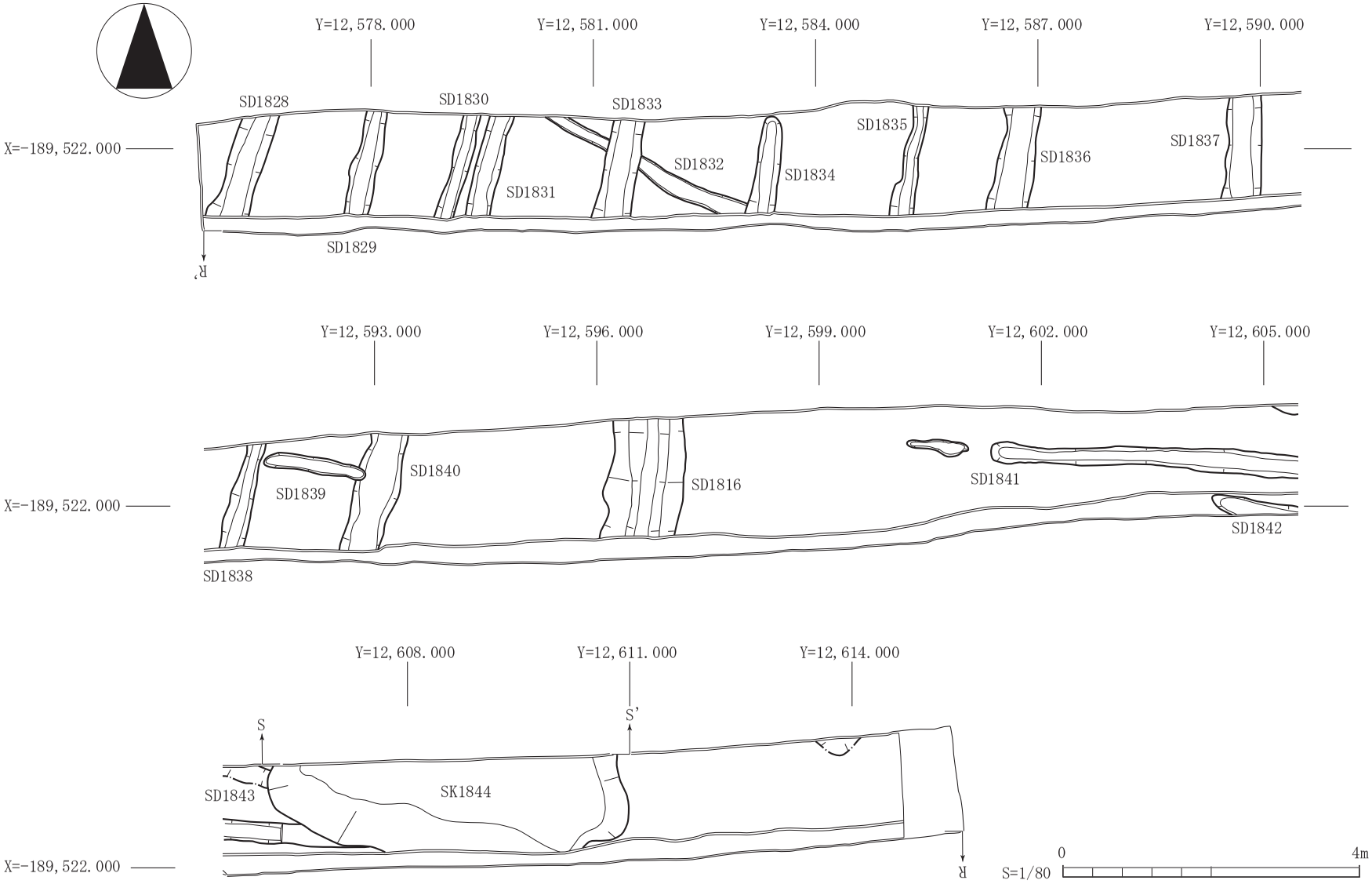
【重複】ＳＤ1816と重複し、それより新しい。

【平面形・規模】大部分が調査区外にあるため、全容は不明である。規模は東西１ｍ、南北70㎝以上、深さ52㎝である。

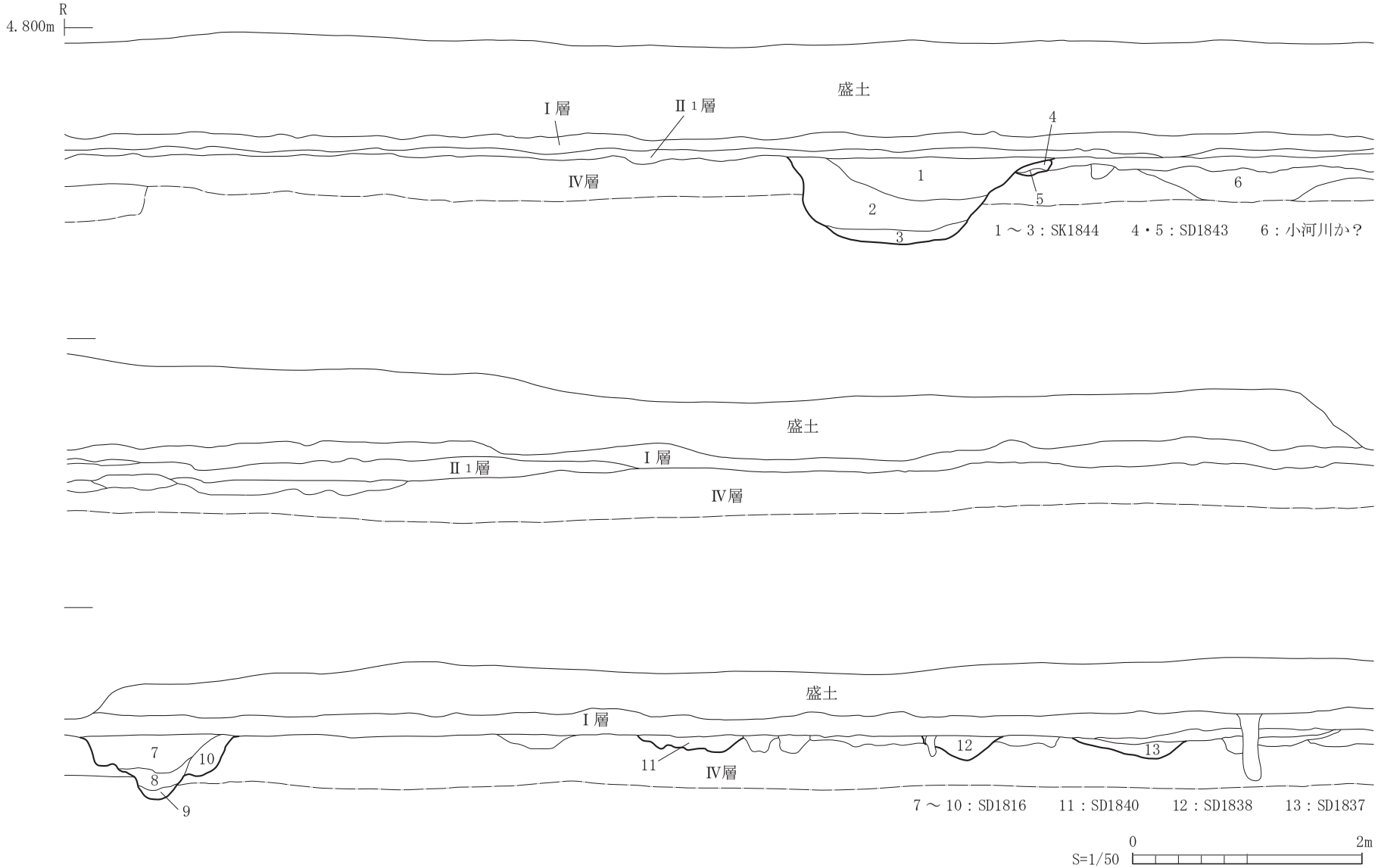


第 19 図　ＳＫ 1827 断面図

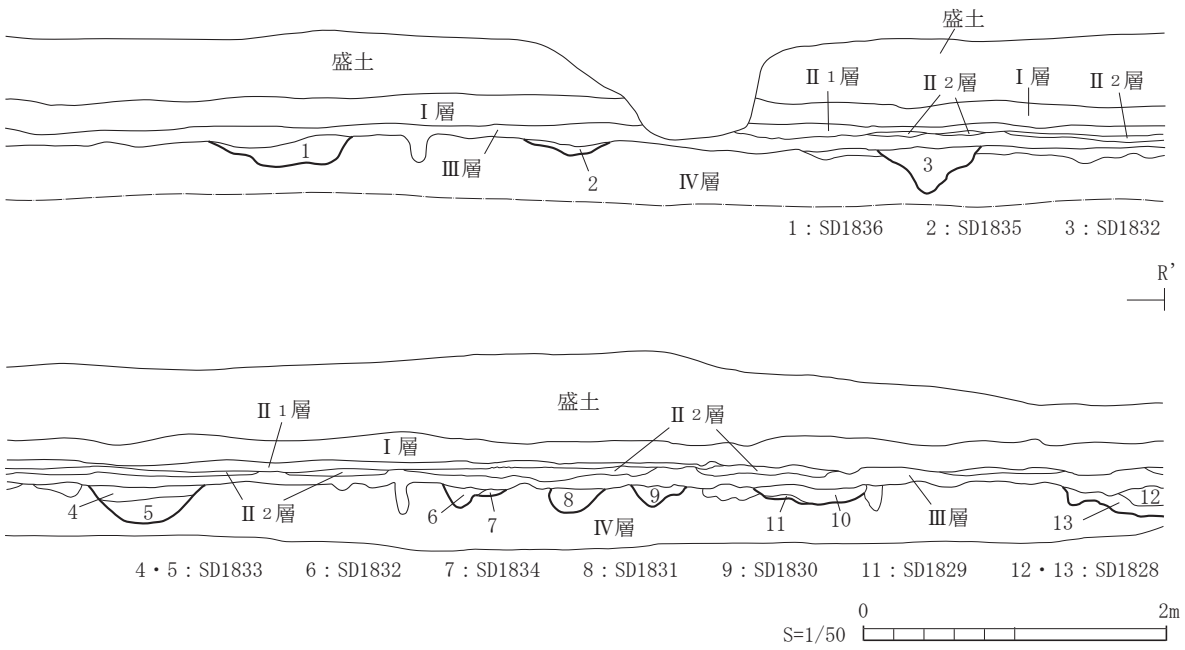
【埋土】オリーブ褐色土がブロック状に混入するオリーブ黒色



第 20 図　２区遺構平面図



第21図　２区南壁断面図（１）



第22図　２区南壁断面図（２）

粘土であり、人為的に埋め戻されている。

【壁・底面】壁は垂直気味に立ち上がり、底面は平坦である。

【遺物】出土していない。

ＳＸ1877小溝群（第７・20～22図）

【位置】２区のほぼ全域で発見した、南北方向（Ａ群：ＳＤ1829～1832・1834～1839・1841）と東西方向（Ｂ群：ＳＤ1833・1840・1842～1844）の溝跡である。

【重複】ＳＤ1842・1843（Ｂ群）とＳＫ1845が重複し、後者が新しい。なお、Ａ・Ｂ群の関係を見ると、ＳＤ1834・1835（Ａ群）とＳＤ1833（Ｂ群）、ＳＤ1841（Ａ群）とＳＤ1840（Ｂ群）が重複し、いずれもＡ群が古い。このことから、Ａ群→Ｂ群の関係が把握できた。

【方向・規模】Ａ群は北で約５～18度東に偏している。規模は上幅15～64㎝、下幅８～45㎝、深さ２～15㎝である。なおＡ群は幅２ｍにも満たない東西方向の調査区で確認したものであることから、溝全体の長さを把握できたものはない。Ｂ群は西で約４～28度北に偏している。規模は上幅15～22㎝、下幅10～22㎝、深さ３～11㎝である。Ａ群同様、溝全体の長さは明らかでない。

【埋土】Ａ・Ｂ群ともに、単層のものと２層に分けられるものとがある。単層のものは黒褐色粘土である。２層に分けられるものも上・下層ともに黒褐色粘土が主体であるが、下層には黄色土がブロック状に混入している。

【壁・底面】壁はＡ・Ｂ群ともに、垂直気味に立ち上がるものと、緩やかに立ち上がるものがある。底面も平坦なものと凹凸があるものがあり、一様ではない。

【遺物】Ａ・Ｂ群ともに出土していない。

ＳＫ1844土壙（第７・20・21・23図）

【位置】２区の東側で発見した。

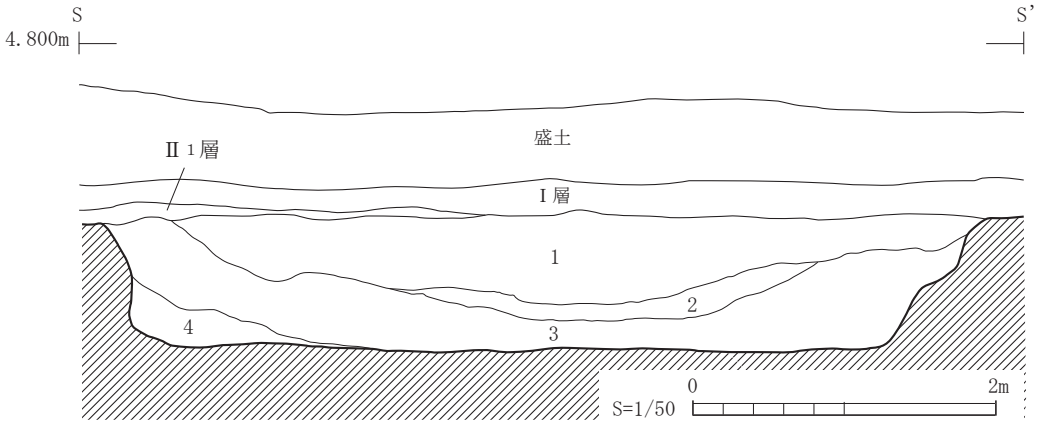
【重複】ＳＤ1841・1843と重複し、それらより新しい。

【平面形・規模】大部分が調査区外にあるため、全容は不明である。規模は東西4.3m以上、南北1.5m以上、深さ75㎝である。

【埋土】４層に分けられる。１層は暗灰黄色粘土がブロック状に混入するにぶい黄色土、２層は酸化鉄を含むオリーブ褐色砂、３層はオリーブ褐色砂が混入する暗灰黄色粘土、４層は酸化鉄を含む黄褐色砂である。このうち、１・２層は人為的に埋め戻されている。

【壁・底面】壁は垂直気味に立ち上がり、上半でやや開く。底面は平坦である。

【遺物】出土していない。



第23図　ＳＫ1844断面図

４　遺構の年代

ここでは検出した層序ごとに遺構の年代等について検討する。

（１）Ⅵ層発見遺構

ＳＸ1872水田跡及びＳＸ1873を検出した。このうちＳＸ1872水田跡の区画④から、非ロクロ調整の土師器小型壺が１点出土している。口縁部は直線的に外傾する単純口縁で、頚部の屈曲は器体中央部より上方にある。体部はやや下で膨らみ、最大径は中央よりやや下にある。底部は平底である。このような器形は古墳時代前期の土器の中に認められ、丹羽編年で第ⅡＢ段階及び辻編年でⅢ－１期とされている藤田新田遺跡ＳＤ224出土土師器壺Ｃ３類や、前期でも後半段階とされる佐沼城跡ＳＤ105出土土器土師器壺Ⅲｂ類と類似していることから、同時期のものと考えられる（註２）。このことから、ＳＸ1872水田跡（Ⅵ層）の年代についても、古墳時代前期後半段階と捉えておきたい。

なお、ＳＸ1872のＡＭＳ分析結果は、暦年較正年代（１δ）140 ～ 232calＡＤであり、出土遺物の年代観より１世紀程古い結果が得られている（附章参照）。

ところで、本地区周辺では、東側150ｍの地点においても古墳時代前期の水田跡11区画を確認している（山王遺跡第88次調査）。検出した標高は2.65 ～ 2.76ｍであり、今回発見した水田跡の標高値2.58 ～ 2.66と近似している。区画の規模をみると、第88次調査区では南北2.7 ～ 3.5ｍ、東西では最大4.2ｍと推測しているのに対して、本地区では南北約3.8ｍ、東西3.7ｍであり、およそ同規模の水田区画と考えられよう。畦畔の方向は、第88次・139次いずれも北で東に傾いている。さらに、北側約80 ～ 100ｍの地点で実施した山王遺跡第83・90・91次調査においても古墳時代前期の水田跡を発見しており、第88・139次と方向が近似する畦畔を確認している。

これらは、本地区周辺で広範囲に確認される古墳時代前期の水田が、同一の基準で造られた可能性を示すものである。

（２）Ⅳ層発見遺構

１・２区では区画施設、溝跡、土壙などを発見した。これらの遺構の検出面や新旧関係について整理すると以下のようになる。

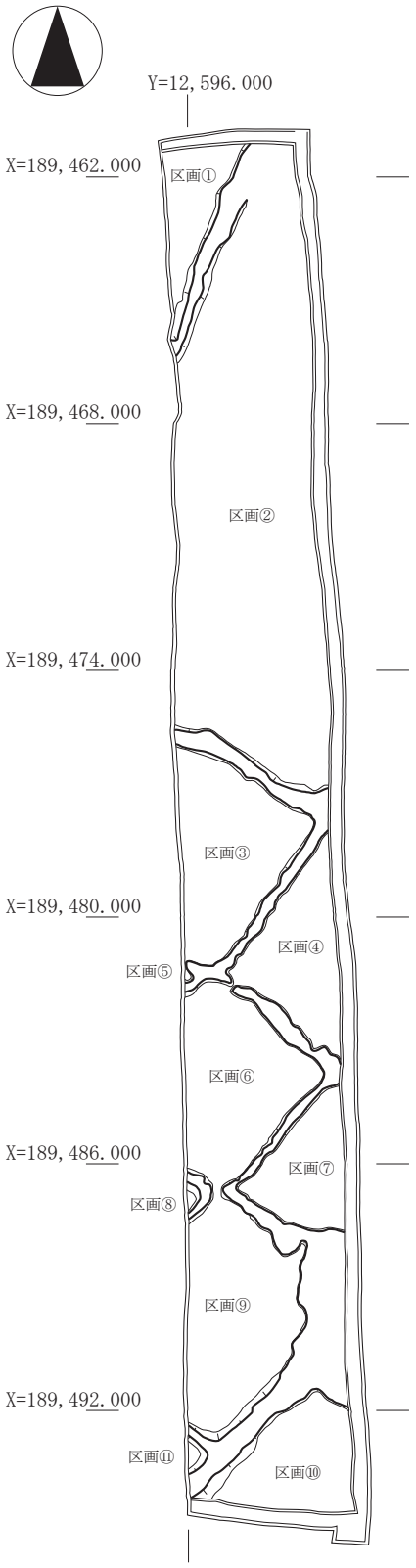
１区発見遺構

１区では、10世紀前葉頃に降下した灰白色火山灰を境に、降下以前に機能していた遺構（Ⅰ期：ＳＤ1816・1817・1818・1823・1874・1875、ＳＫ1876）と降下以降に機能していた遺構（Ⅱ期：ＳＤ1822、ＳＫ1825・1826・1827）に大別することができる（註３）。

Ⅰ期遺構のうち、ＳＤ1816埋土下層から、土師器坏が３点出土している。ＢⅠｃ類が１点、ＢⅡｃ類が１点、ＢⅤ類が１点であり、いずれも完形に近い。底径／口径は0.38 ～ 0.54、器高／口径は0.33 ～ 0.35である。底部内面のヘラミガキは、全て中央から放射状に施されている。このような坏と類似するものは、

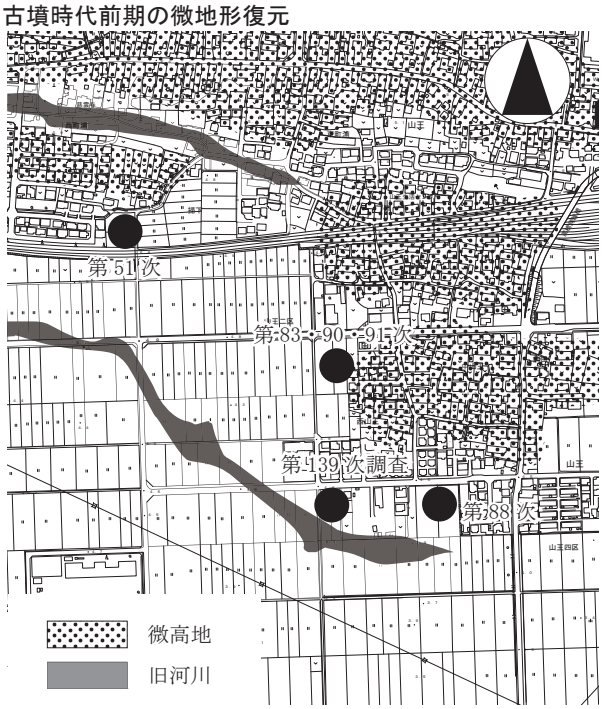
註２：器面調整をみると、外面の最終調整に縦方向のヘラミガキが口縁部から体部下半にま施される点では本調査出土壺と佐沼城跡出土壺Ⅲｂ類は近似しているが、藤田新田遺跡出土壺Ｃ３類では体部下方の最終調整がヘラナデである点で異なっている。佐沼城跡では、ＳＤ105から出土した一括資料には、丹羽編年Ⅱ～Ⅲ段階、辻編年Ⅲ－２～４段階のものが含まれている。このことについて、報告書では、これら土器に見られる多様さを個々の土器製作者の由来や製作の知識などを反映したものと理解し、前期後半段階の土器編年再考の必要性を提示している。

註３：ＳＤ1816 ～ 1818・1874・1875については、埋土上位に灰白色火山灰が混入していたものの、最下層には認められなかったことから、溝が開削されたのは火山灰降下以前であると判断した。



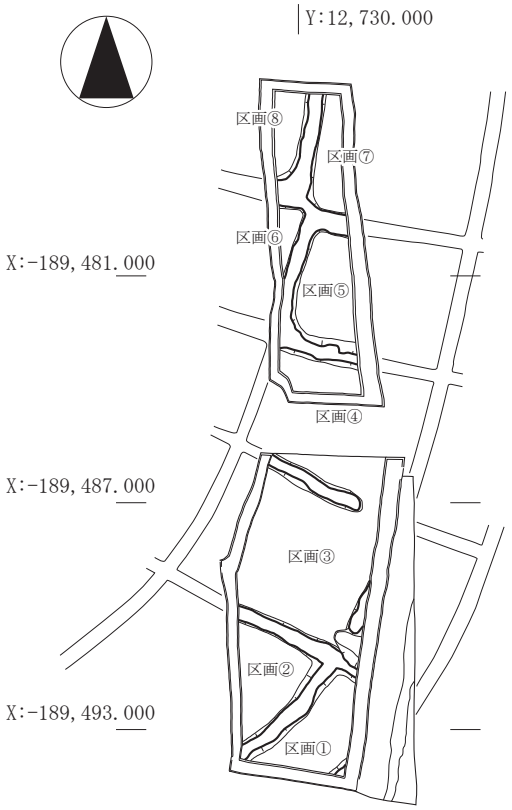
第 139 次調査ＳＸ1872 水田跡

古墳時代前期の微地形復元



S=1/10,000

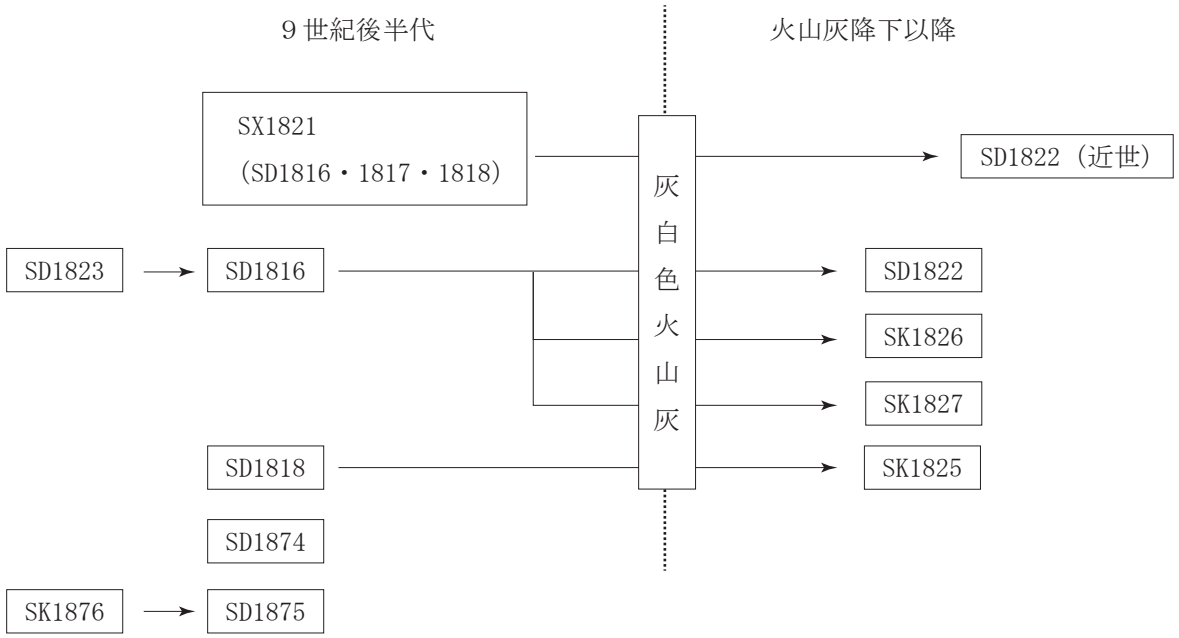
※　松本・野中(「中野高柳遺跡と竹ノ内遺跡の外観」『中野高柳遺跡Ⅳ』2006)を基に作成



第 88 次調査ＳＸ1618 水田跡

S=1/200　0　10m

第 24 図　ＳＸ 1872 水田跡と第 88 次調査ＳＸ 1618 水田跡



第 25 図　１区発見遺構変遷模式図

９世紀後半代とされている多賀城跡鴻の池第10層出土土器と類似している（註４）。このことから、ＳＤ1816の年代も同様の年代と考えられる。これと一連の区画を構成するＳＤ1817・1818・1874・1875についても、同様の年代と理解することができる。

重複関係でＳＤ1816よりも古いＳＤ1823、同じくＳＤ1875よりも古いＳＫ1876は、９世紀後半以前のものである。

Ⅱ期遺構では、ＳＫ1825から古瀬戸皿や有田産染付磁器丸椀の小片が出土していることから、近世以降のものと捉えられる。それ以外の遺構については、出土遺物がないため、年代は明らかではない

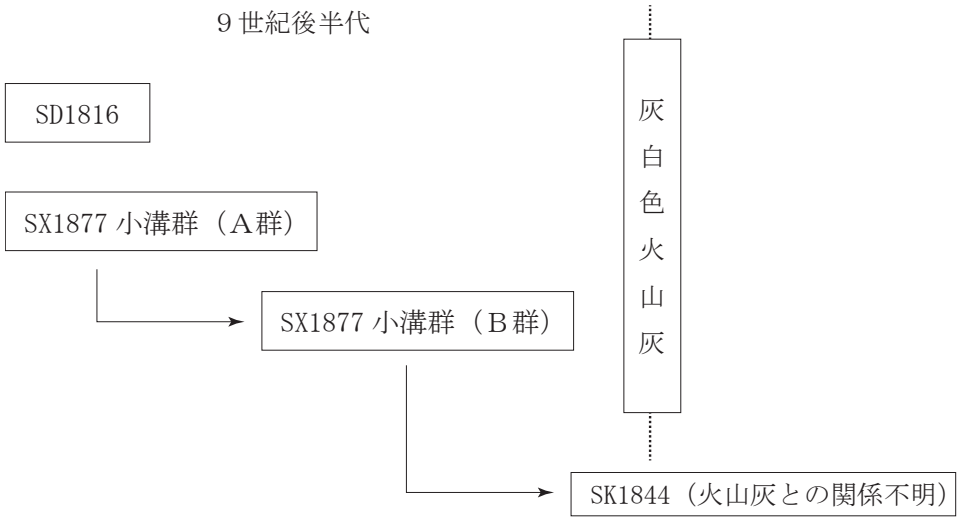
２区発見遺構

ＳＸ1877小溝群のうち、ＳＤ1828 ～ 1831・1834 ～ 1836（Ａ群）、ＳＤ1832（Ｂ群）は灰白色火山灰が混入するⅢ層に覆われている。これら遺構の埋土中には灰白色火山灰が全く混入していないことから、火山灰降下以前に埋没していたものと考えられる。このことから、ＳＸ1877Ａ・Ｂ群は、ともに10世紀前葉以前の年代が与えられる。

なお、ＳＸ1877に見られるような並行に連続する小溝群については、畑の耕作痕（畝状遺構）と考えられている。また、ＳＤ1816の西側には小溝群が広範囲に検出されており、東側では南北溝跡が確認されていないことから、本溝跡は生産域と非生産域を区分する性格も兼ねていたと考えられる。

ＳＫ1844については、ＳＸ1877Ｂ群よりも新しいものの、出土遺物がないことや灰白色火山灰との関係が不明であることから、年代については明らかでない。

註４：鴻の池10層出土土器土師器坏では、口径／底径が0.36 ～ 0.46、口径／器高が0.27 ～ 0,38であり、底部内面のヘラミガキは放射状に施すものが基本である（『多賀城跡調査研究所年報1991』1992）。



第 26 図　２区発見遺構変遷模式図

５　まとめ

（１）１区のⅥ層上面で古墳時代前期の水田跡を発見した。

（２）１区のⅣ層上面では、９世紀後半代の区画施設ＳＸ1821やＳＤ1816溝跡を発見した。

（３）２区のⅣ層上面では、灰白色火山灰降下以前の畑跡ＳＸ1877（Ａ→Ｂ群）を発見した。これら畑跡のうち、Ａ群についてはＳＤ1816と方向が近似していることや、一定の距離をおいて設けられていることから、同時期に機能していた可能性が高い。

（４）当該区は古墳時代前期には水田耕作域、古代には畑跡が営まれており、主に生産域として利用されていた地区であることが明らかになった。

引用・参考文献

宮城県教育委員会　日本道路公団『藤田新田遺跡』宮城県文化財調査報告書　第163集　1994
迫町教育委員会　『佐沼城跡　－近世武家屋敷と古代の集落跡－』迫町文化財調査報告書　第２集　1995
宮城県教育委員会　　宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡　宮城県多賀城跡調査研究所1991』1992

附章　山王遺跡第139次調査における放射性炭素年代測定（AMS測定）報告

（株）加速器分析研究所

１　測定対象試料

山王遺跡（第139次調査）は、宮城県多賀城市山王字山王四区195-2外（北緯38°　17′　45″、東経140°　58′　26″）に所在し、自然堤防の南側に広がる沖積地に立地する。測定対象試料は、ＳＸ1872水田跡Ⅵ層水田土壌と、その直下の自然堆積層と見られるⅦ層から採取された土壌各1点である（表１）。ＳＸ1872水田跡Ⅵ層は古墳時代前期（４世紀）に位置づけられている。

２　測定の意義

ＳＸ1872水田跡Ⅵ層と同時期と見られる水田跡は近隣の調査区でも確認されているが、水田跡は出土遺物が少なく、具体的な年代決定が困難である。このため、Ⅵ層とⅦ層の土壌の年代測定によって、Ⅴ層水田土壌の年代とその上限年代を明らかにする。

３　化学処理工程

（１）メス・ピンセット、ふるいを使い、石や根などの混入物を取り除く。

（２）酸処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。処理には1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用い、表１に「HCl」と記載する。

（３）試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

（４）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

（５）精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

（６）グラファイトを内径１mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

４　測定方法

加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、^{14}Cの計数、^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

５　算出方法

（１）δ^{13}Cは、試料炭素の^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表1）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

（２）^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C年代はδ^{13}Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表１に、補正していない値を参考値として表２に示した。^{14}C年代と誤差は、下１桁を丸めて10年単位で表示される。また、^{14}C年代の誤差（±1σ）は、試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2％であることを意味する。

（３）pMC（percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい（^{14}Cが少ない）ほど古い年代を示し、pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値もδ^{13}Cによって補正する必要があるため、補正した値を表１に、補正していない値を参考値として表２に示した。

（４）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の^{14}C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の^{14}C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、１標準偏差（1σ＝68.2%）あるいは２標準偏差（2σ＝95.4%）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ^{13}C補正を行い、下1桁を丸めない^{14}C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース（Reimer et al. 2013）を用い、OxCalv4.2較正プログラム（Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については､特定のデータベース､プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表２に示した。暦年較正年代は、^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

６　測定結果

測定結果を表1、2に示す。

試料の^{14}C年代は、1が1820±20yrBP、2が2060±20yrBPである。暦年較正年代（1σ）は、1が140～232cal AD、2が110～3cal BCの間に各々複数の範囲で示され、１が弥生時代後期頃、２が弥生時代中期頃に相当する（小林2009)。

なお、試料1が含まれる１～３世紀頃の暦年較正に関しては、北半球で広く用いられる較正曲線IntCalに対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘がある（尾嵜2009、坂本2010など)。その日本版較正曲線を用いて試料1の測定結果を暦年較正した場合、ここで報告する較正年代値よりも新しくなる可能性がある。

このため、１の較正年代については、推定される古墳時代前期（４世紀）頃まで下り、調査所見と整合する結果となる可能性がある。

試料の炭素含有率は1が3.1%、2が2.8%で、土壌としては低くない値となっている。化学処理、測定上の問題は特に認められない。

表1　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C補正値）

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C（‰）(AMS)	δ^{13}C補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA-133456	1	ＳＸ1872水田跡　Ⅵ層	土壌	HCl	-21.46 ± 0.28	1,820 ± 20	79.70 ± 0.25
IAAA-133457	2	Ⅶ層	土壌	HCl	-17.93 ± 0.34	2,060 ± 20	77.43 ± 0.23

[#6392]

表2　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C未補正値、暦年較正用^{14}C年代、較正年代）

測定番号	δ^{13}C補正なし		暦年較正用 (yrBP)			1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age　(yrBP)	pMC　(%)					
IAAA-133456	1,760 ± 20	80.28 ± 0.24	1,822	±	24	140calAD - 197calAD (47.1%) 207calAD - 232calAD (21.1%)	127calAD - 250calAD (95.4%)
IAAA-133457	1,940 ± 20	78.55 ± 0.23	2,055	±	24	110calBC - 38calBC (63.5%) 27calBC - 25calBC (1.2%) 10calBC - 3calBC (3.6%)	164calBC - 129calBC (11.9%) 121calBC - 3calAD (83.5%)

［参考値］

文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

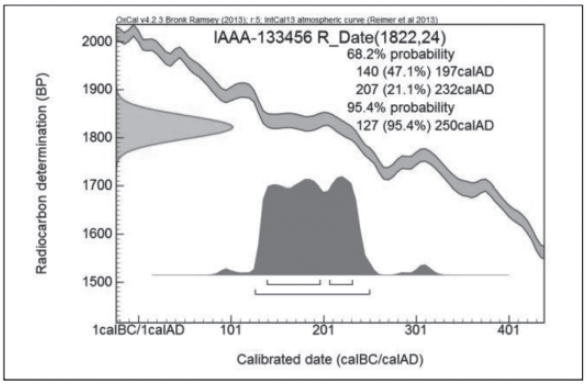
小林謙一 2009 近畿地方以東の地域への拡散, 西本豊弘編, 新弥生時代のはじまり　第4巻　弥生農耕のはじまりとその年代, 雄山閣, 55-82

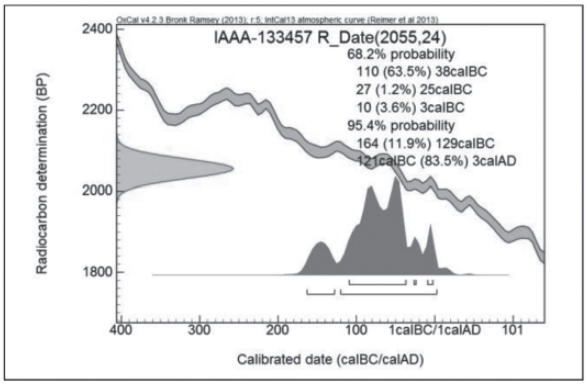
尾嵜大真 2009 日本産樹木年輪試料の炭素14年代からみた弥生時代の実年代, 設楽博己, 藤尾慎一郎,松木武彦編弥生時代の考古学1　弥生文化の輪郭, 同成社, 225-235

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55(4), 1869-1887

坂本稔 2010 較正曲線と日本産樹木ー弥生から古墳へー, 第5回年代測定と日本文化研究シンポジウム予稿集, (株)加速器分析研究所, 85-90

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19(3), 355-363





［図版］暦年較正年代グラフ（参考）

１区ＳＸ1872水田跡全景（北より）

１区ＳＸ1872水田跡全景（南より）

１区ＳＸ1872水田跡全景（南東より）

１区ＳＸ1872水田跡南半部
（北東より）

１区水口３（南より）

１区北壁土層堆積状況
（南より）

写真図版２

１区調査区全景（北より）

１区調査区全景（南より）

１区ＳＤ1816完掘状況（南より）

１区ＳＤ1823完掘状況（北東より）

写真図版３

１区ＳＤ1816・1818完掘状況
（南東より）

１区ＳＤ1822完掘状況（東より）

２区調査区全景（西より）

写真図版４

１　土師器壺（第６図１）
２～５　土師器坏（第12図１～４）

写真図版５

報告書抄録

ふりがな	さくらいたてあとほか
書名	桜井館跡ほか
副書名	桜井館跡第３次調査　西沢遺跡第25次調査　山王遺跡第139次調査
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第115集
編著者名	相澤清利　石川俊英　小原一成
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター
所在地	〒985-0873　宮城県多賀城市中央二丁目27－１　TEL：022-368-0134
発行年月日	西暦2014年３月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
桜井館跡（さくらいたてあと）（第３次）	宮城県多賀城市（みやぎけんたがじょうし）中央１丁目（ちゅうおうちょうめ）104-1	042099	18028	38度17分25秒	141度00分22秒	20130509～20131031	1,628㎡	宅地造成
西沢遺跡（にしざわいせき）（第25次）	宮城県多賀城市（みやぎけんたがじょうし）浮島字高原150番（うきしまあざたかはらばん）	042099	18017	38度18分14秒	140度59分59秒	20131002～20131219	435㎡	集合住宅建設
山王遺跡（さんのういせき）（第139次）	宮城県多賀城市（みやぎけんたがじょうし）山王字山王（さんのうあざさんのう）四区（く）195-2　196-2　197-2	042099	18013	38度17分45秒	140度58分25秒	20131217～20140131	300㎡	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
桜井館跡（第３次）	城館	古墳・古代・中世	土塁・空堀・竪穴住居跡・畑跡・溝跡	土師器・須恵器	多賀城市内では希少な中世城館跡の調査を実施した。
西沢遺跡（第25次）	集落	古代以降	竪穴住居跡・溝跡・土壙	土師器・須恵器・瓦	
山王遺跡（第139次）	集落・都市	古墳・古代	水田跡・溝跡	土師器	畑跡を区画する平安時代の溝跡を発見した。

要約	桜井館跡第3次調査では、中世の土塁・空堀、古墳時代後期の竪穴住居跡を発見した。
	西沢遺跡第25次調査では、古代の竪穴住居跡と溝跡を発見した。
	山王遺跡第139次調査では、古墳時代前期の小区画水田跡と古代の区画溝を発見した。

多賀城市文化財調査報告書第115集

桜井館跡ほか

桜井館跡第３次調査
西沢遺跡第25次調査
山王遺跡第139次調査

平成26年３月31日発行

編集　多賀城市埋蔵文化財調査センター
宮城県多賀城市中央二丁目27番１号
電話（０２２）３６８－０１３４

発行　多賀城市教育委員会
宮城県多賀城市中央二丁目１番１号
電話（０２２）３６８－１１４１

印刷　株式会社　工陽社
宮城県塩竈市尾島町８番７号
電話（０２２）３６５－１１５１

VEGETABLE OIL INK
この印刷物は、環境にやさしい
「植物油インキ」を使用しています。